高知市文化財調査報告書第26集

森田久右衛門墓所

及び小高坂山森田家墓所

－墓地改葬に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2004.3

高知市教育委員会

森田久右衛門墓標

ＳＫ９出土遺物

序

小高坂山は、近世高知城下町の北西に位置する小丘陵で、一帯は近世から現代にかけて墓地山として利用され、高知市内でも有数の墓の多く集まっている地域です。そのうち、森田久右衛門墓所の所在するあたりは、土佐藩二代目藩主忠義の側室であった壽性院（通称三の丸様）の墓所が山頂付近に造営されたことから三ノ丸山と呼ばれ、特に許可を得た武家層の墓所が多く所在しています。

今回調査を行った墓の被葬者である森田久右衛門は、1653（承応２）年に開窯された尾戸焼の初代陶工として名高い人物です。尾戸窯の場所が小高坂山の東方約１kmと近かったこともあって、19世紀に高知市西部の能茶山に窯が移転するまで、初代久右衛門以下代々の墓所として使用されてきました。

この度、三ノ丸山一帯の宅地開発により当地に所在する墓地の移転が順次行われ、森田家の墓地も移転することになりました。高知市教育委員会では、子孫の方の希望もあって、平成15年３月に行われた森田家墓所の改葬の際に考古学的な調査を併行して実施しました。墓標によって確認できた埋葬の年代は、17世紀末から19世紀初めまで約130年間にわたります。この報告書は、その成果をまとめたものです。

この報告書が、土佐における近世墓に関しての理解を深める一助となれば幸いです。最後になりましたが、調査に関わられた方々にお礼申し上げるとともに、関係諸機関のご理解とご協力に感謝申し上げます。

平成16年３月

高知市教育委員会

例　言

1．本報告書は高知県高知市三ノ丸に所在した森田久衛門墓所及び周辺に所在した森田家墓所の埋蔵文化財確認調査報告書である。

2．確認調査は高知市教育委員会が主体として行った。また、掘削・現場管理等については白馬産業株式会社の協力を得た。

3．確認調査は2003年３月３日に行い、３月12日に追加測量を行った。整理作業は現場終了後、2004年３月まで行った。諸記録は高知市教育委員会及び㈶高知県埋蔵文化財センターで保管している。出土遺物については記録・計測等を行った後、森田家に返却した。但し、遺骨以外の銭貨・煙管・陶磁器等の遺物については、後日森田家から寄贈があり、埋蔵文化財センターで保管している。

4．確認調査にあたっては磁北をもとに任意座標を設定し、使用した。

5．現地調査の体制は次の通りである。

調査員　田上　浩（市教委）　　測量補助員　西村譲二

また現地調査の際、（財）高知県埋蔵文化財センターから、以下の諸氏の協力を得た。

松村信博、浜田恵子、坂本憲彦、宮地啓介

6．本書の執筆及び編集は田上・浜田（現高知市立介良潮見台小学校教諭）が共同で行った。執筆分担は第１章が田上、第２・３章が浜田である。また、整理作業・編集には上記に加えて、大賀幸子の協力を得た。

7．出土人骨の鑑定については土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアムの松下孝幸氏に依頼し、玉稿を頂いた。また、出土銭貨の鑑定については泉幸代氏（須崎市立横浪小学校）に依頼した。記して感謝したい。

8．発掘調査並びに報告書作成に当たり、高知県教育委員会及び㈶高知県埋蔵文化財センターの諸氏から多くの助言、教示を賜った。記して感謝したい。

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過
第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　遺跡の立地及び周囲の遺跡
（１）遺跡の立地 …… 1
（２）周囲の遺跡 …… 3
第３節　調査の方法 …… 5
第２章　遺構と遺物
（１）Ⅰ区の調査 …… 6
（２）Ⅱ区の調査 …… 9
（３）Ⅲ区の調査 …… 14
第３章　考察
第１節　近世小高坂村と森田家墓所
１．文献資料にみる近世小高坂村と小高坂山墓地 …… 16
２．森田家墓所と被葬者について …… 18
第２節　土佐近世墓の諸様相
１．県下の近世墓報告遺跡 …… 26
２．墓坑形態について …… 28
３．副葬品について …… 30
付編　高知市森田久右衛門墓所出土の近世幼児骨 …… 49

挿図目次

本文
Fig.1　周辺の遺跡及び今回の調査対象地位置図（1/25,000） …… 2
Fig.2　調査区配置図（1/2,500・1/500） …… 4
Fig.3　Ⅰ区・Ⅱ区遺構位置図 …… 5
Fig.4　Ⅰ区検出遺構・墓標位置図 …… 6
Fig.5　ＳＫ１・２平面・エレベーション図及び出土遺物 …… 7
Fig.6　ＳＫ３・４平面・エレベーション図及び出土遺物実測図 …… 8
Fig.7　ＳＫ５平面・エレベーション図及び出土遺物実測図 …… 9
Fig.8　ＳＫ６平面・エレベーション図及び出土遺物実測図 …… 10
Fig.9　ＳＫ７・８平面・エレベーション図及び出土遺物実測図 …… 11
Fig.10　ＳＫ９平面・エレベーション図及び出土遺物実測図 …… 13
Fig.11　ＳＫ10平面・エレベーション図 …… 14
Fig.12　非塔形墓標類型図 …… 25
Fig.13　高知県下の近世墓 …… 35

付編　図１　遺跡の位置……50
図２　森田家墓所ＳＫ９（幼児）、人骨の残存部……51

表目次

本文　表１　遺物観察表（金属製品）……14
表２　遺物観察表（陶磁器）……15
表３　古銭観察表……15
表４　小高坂山近世墓標一覧……22
表５　近世の検出墓坑一覧……36
表６　出土銭貨一覧……39
付編　表１　年齢区分……49
表２　上腕骨計測値……52
表３　大腿骨計測値……53
表４　脛骨計測値……53
表５　顔面頭蓋（㎜、度）……56
表６　下顎骨（㎜）……56
表７　鎖骨（㎜）……57
表８　上腕骨（㎜）……57
表９　橈骨（㎜）……57
表10　尺骨（㎜）……57
表11　大腿骨（㎜）……58
表12　脛骨（㎜）……58
表13　腓骨（㎜）……58

写真図版目次

巻頭カラー　森田久右衛門墓標、ＳＫ９出土遺物……巻頭
本文　PL.１　Ｉ区全景（西より）、墓標Ａ、墓標Ｅ（前）・Ｃ（後）、墓標Ｄ、墓標Ｂ‥43
PL.２　ＳＫ４遺物出土状況、ＳＫ１六道銭・人骨出土状況……44
PL.３　ＳＫ９甕棺出土状況（東より）、ＳＫ９出土人骨……45
PL.４　ＳＫ４・９出土遺物……46
PL.５　ＳＫ３～６・８出土遺物……47
PL.６　ＳＫ１・３・６・８出土遺物……48
付編　森田家墓所ＳＫ９人骨（1.5歳）　四肢骨、頭蓋……59

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経過

森田久右衛門（1641～1715）は、尾戸焼の初代陶工として知られる。尾戸窯開窯（1653）にあたって、大坂高津から久野正伯が招かれ当時13歳の久右衛門が最初の弟子として師事した。また、1678年江戸に出府した際の約１年間の日記は日本の窯業資料としても価値が高く、「森田久右衛門江戸日記」として県指定文化財となっている。

この度、高知市の小高坂山において宅地造成が計画され、計画地内に森田家墓所も含まれることから、平成14年２月28日付で、高知県教育委員会に対して森田家当主から埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があった。これに対して同年５月10日付で県教育委員会から事前の試掘確認調査が必要との回答があり、これを受けて調査を行った。調査にあたっては、森田家の子孫が所在もはっきりしているため、有縁墓地の改葬の手順の中での調査協力をお願いした。そのため、調査方法や遺物の扱い等についても通常の調査の扱いとは異なっている。調査体制は以下の通りである。

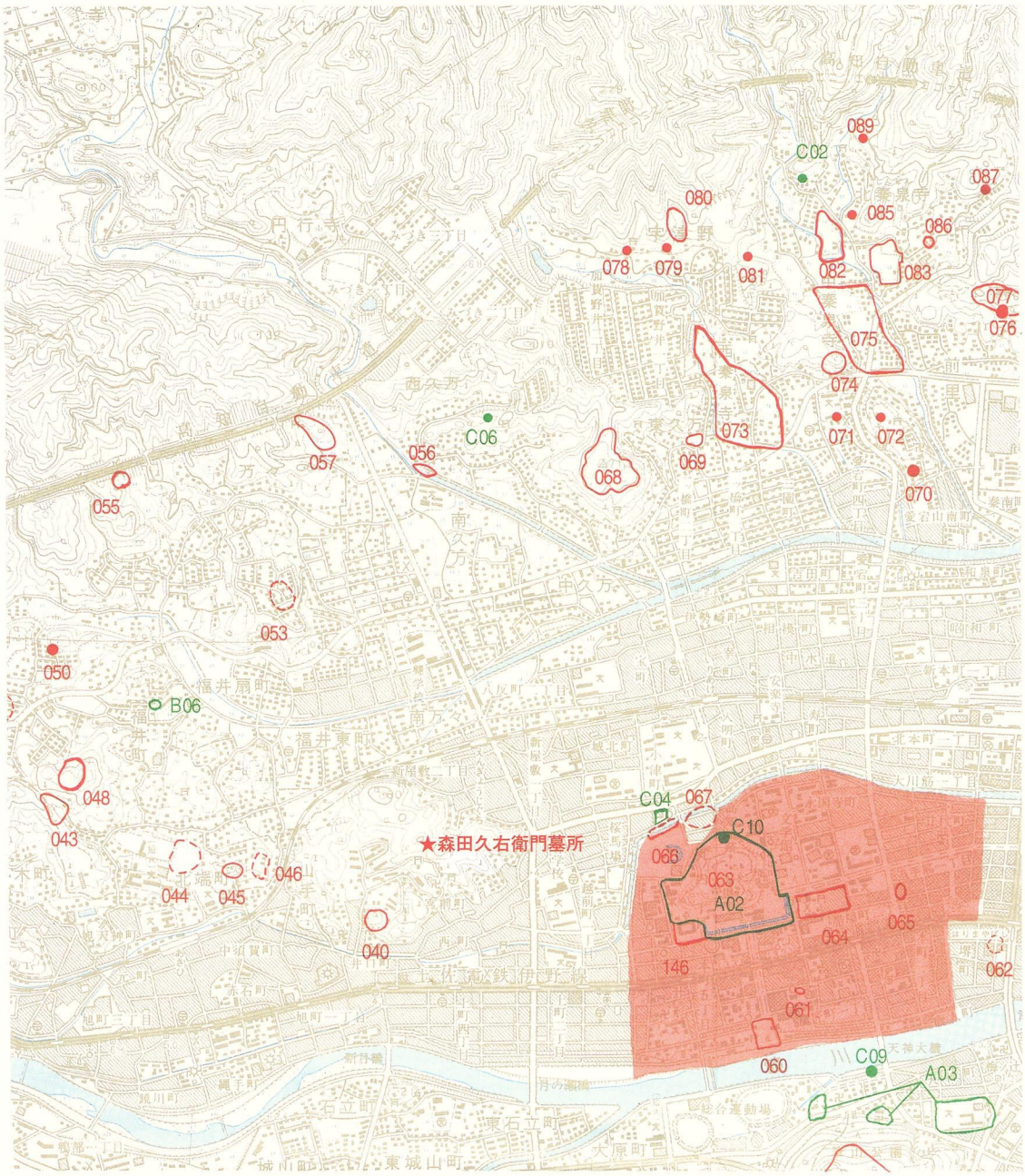
事業名　　高知市内遺跡確認調査事業
調査主体　　高知市教育委員会
　　事務全般　　門田麻香（同教育委員会生涯学習課主査）
　　現地調査　　田上　浩（　　同課指導主事）
調査協力　　財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

第２節　遺跡の立地及び周囲の遺跡

（1）遺跡の立地

高知市の中心市街地は東西にはしる断層に挟まれた中央低地上に立地しており、そこに北部の山地を源とし、低地内を東流する鏡川によって沖積平野が形成されている。

また、地質的には秩父累帯に属し、中央低地の南側の鷲尾山地北麓をはしる仏像構造線によって、四万十帯と区切られている。秩父累帯は現在の鏡川河道付近の仁淀スラストで、南帯（三宝山帯）と中帯（黒瀬川帯）に区切られる。今回の調査対象地が所在する小高坂山は黒瀬川帯に属しており、高知市西部の旭地区から東にのびて高知城が立地する大高坂山まで連なる小丘陵の一つである。この丘陵は黒瀬川構造体を特徴づける高度変成岩類を主体としており、花崗岩や蛇紋岩等を伴っている。なお、小高坂山と大高坂山との中間についてもかつて中高坂山と呼ばれる小丘が存在し、高知城築城の際に崩されたことが記録に見える。



国土地理院発行の1/25,000地形図に基づく「高知市遺跡地図」(平13四複第82号)の一部を複製。〔(使用地形図　いの（高知11号－2）こうち（高知７号－４)〕

0　1km

番号	遺跡名	種別	時代
A02	高知城跡	城館跡	近世
B06	鹿持雅澄邸跡	屋敷跡	近世
C02	吉弘古墳	古墳	古墳
C06	桑名古庵墓	墓	近世
043	高知学園裏遺跡	散布地	弥生～古代
045	福井中城跡	城館跡	中世
048	かろーと口遺跡	散布地	弥生
055	福井遺跡	散布地	縄文～中世
056	初月遺跡	散布地	弥生

番号	遺跡名	種別	時代
057	万々城跡	城館跡	中世
060	南御屋敷跡	邸跡	近世
061	中島町遺跡	散布地	古墳
063	大高坂城跡	城館跡	中世
064	弘人屋敷跡	屋敷跡	近世
067	尾戸窯跡	窯跡	近世・消滅
068	安楽寺山城跡	城館跡	中世
069	東久万池田遺跡	散布地	古代～中世
070	愛宕不動堂前古墳	古墳	古墳

番号	遺跡名	種別	時代
073	西秦泉寺遺跡	散布地	古墳
075	秦泉寺廃寺	寺院跡	古代
078	宇津野2号墳	古墳	古墳
079	宇津野1号墳	古墳	古墳
080	宇津野遺跡	散布地	縄文
082	吉弘遺跡	散布地	古代
083	松葉谷遺跡	散布地	古代～中世
086	北秦泉寺遺跡	散布地	弥生

Fig. 1　周辺の遺跡及び今回の調査対象地位置図

（2）周囲の遺跡

高知市中心部付近において、旧石器時代の遺跡は未だ発見されていないが、縄文時代になると北部の丘陵では福井遺跡（055）や宇津野遺跡（080）等のように人類の生活した痕跡が現れるようになってくる。このうち福井遺跡では高知自動車道の建設に先立って発掘調査が行われ、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることがわかっている。

更に、弥生時代には福井遺跡や高知学園裏遺跡（043）、初月遺跡（056）、北秦泉寺遺跡（086）等丘陵沿いに遺跡が増加してくる。

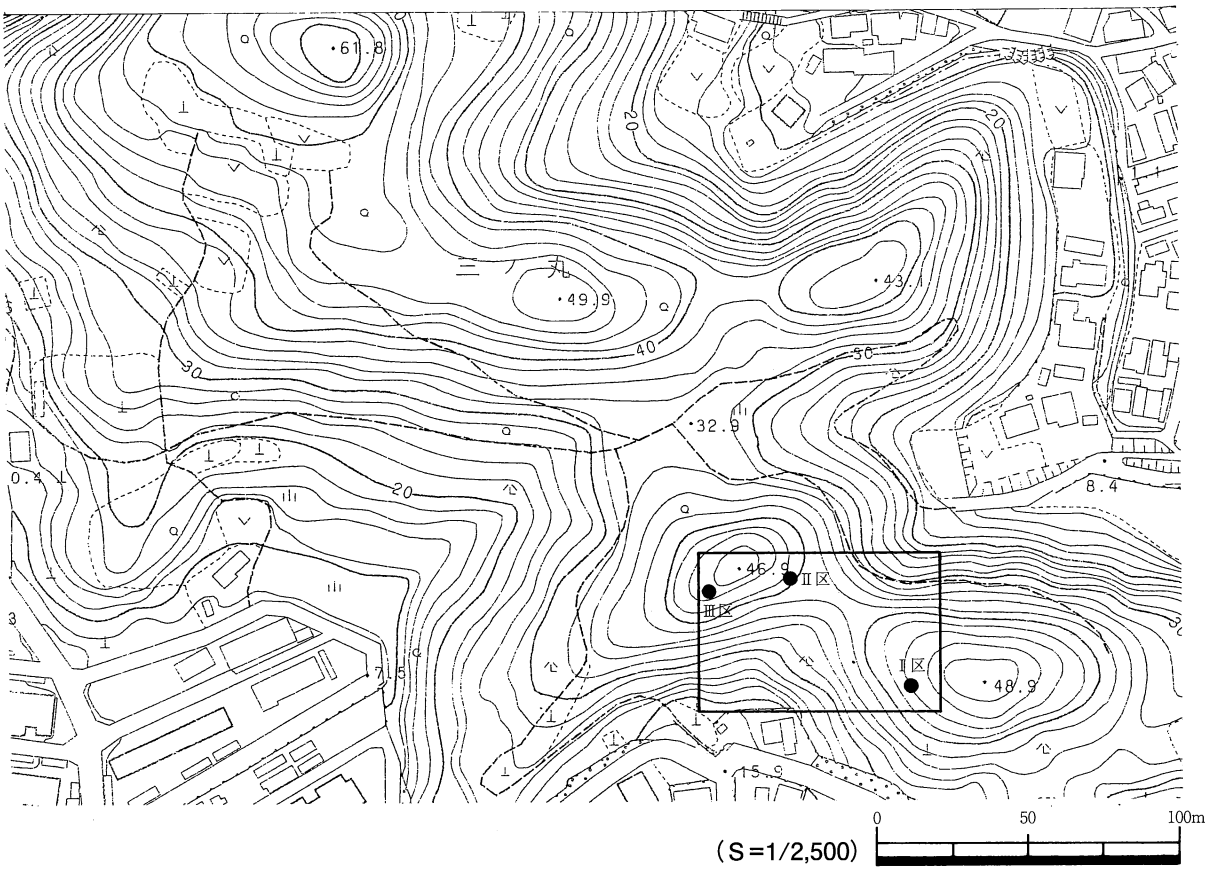
古墳時代にはいると、高知市指定史跡の吉弘古墳（C02）を初めとして、愛宕不動堂前古墳（070）や宇津野１号墳（079）、２号墳（078）等の後期古墳が現存する秦泉寺古墳群が山麓に点在し、ある程度の勢力を維持した豪族集団が北側の山麓に成立していたことが推定される。また古墳以外の遺跡についても中島町遺跡（061）や西秦泉寺遺跡（073）等、これまでの時代に比べて、より低地への進出がみられるようになってくる。

古代では、県内でも最古級の白鳳寺院である秦泉寺廃寺（075）が出現し、秦泉寺古墳群の造営に関わった集団が順調に発展を遂げていることが窺われ、高知学園裏遺跡や東久万池田遺跡（069）、吉弘遺跡（082）、松葉谷遺跡（083）等の遺跡が知られている。また、高知市中心部の北西側に高坂郷が成立し、以後中世にかけて次第に南側の低湿地へと開拓が進んでいったものと推察される。

中世にはいると、通常の遺跡は福井遺跡や東久万池田遺跡、松葉谷遺跡等周辺部のものしか知られていない。また、丘陵上に城郭が多く立地するようになり、福井中城跡（045）や万々城跡（057）、大高坂城跡（063・高知城跡と重なる）、安楽寺山城跡（068）等が現存している。その中でも大高坂城跡や既に消滅している国沢城跡（062）等は高知市の中心市街地に立地しており、付近の開発が進んできたことや、遺跡としては周知されていないものの一定の人口を有するようになってきたことが窺われる。それを裏付けるように、試掘調査でも中世に属すると思われる土師器片が出土することがある。また文献資料によっても中心部の開拓が進んできたことが窺える。

近世にはいると、先に述べた大高坂山において高知城（大高坂城）の築城並びに城下町の建設が長宗我部氏によって開始される。その後長宗我部氏の方針転換によって浦戸に城下町が移されたため一時の中断はあったものの、関ヶ原の戦い後土佐に入国した山内氏によって城下町の建設が再開され、以後土佐一国の中心として現在に至る。

これまで概観してきたように、今回の調査対象地である小高坂山の周辺では、北側の山麓より徐々に開発が進められ、中世にはある程度の人口が周囲に存在していたものと推定される。従って、小高坂山における墓地の造営が中世以前から行われていた可能性はあるものの、やはり近世城下町の成立以降の人口増によって、墓地に対する需要が高まった後に本格的な造営が始まったと考えるのが自然であろう。


三ノ丸
61.8
49.9
43.1
32.9
46.9
48.9
15.9
8.4
0.4
Ⅱ区
Ⅲ区
Ⅰ区
(S=1/2,500)
0
50
100m

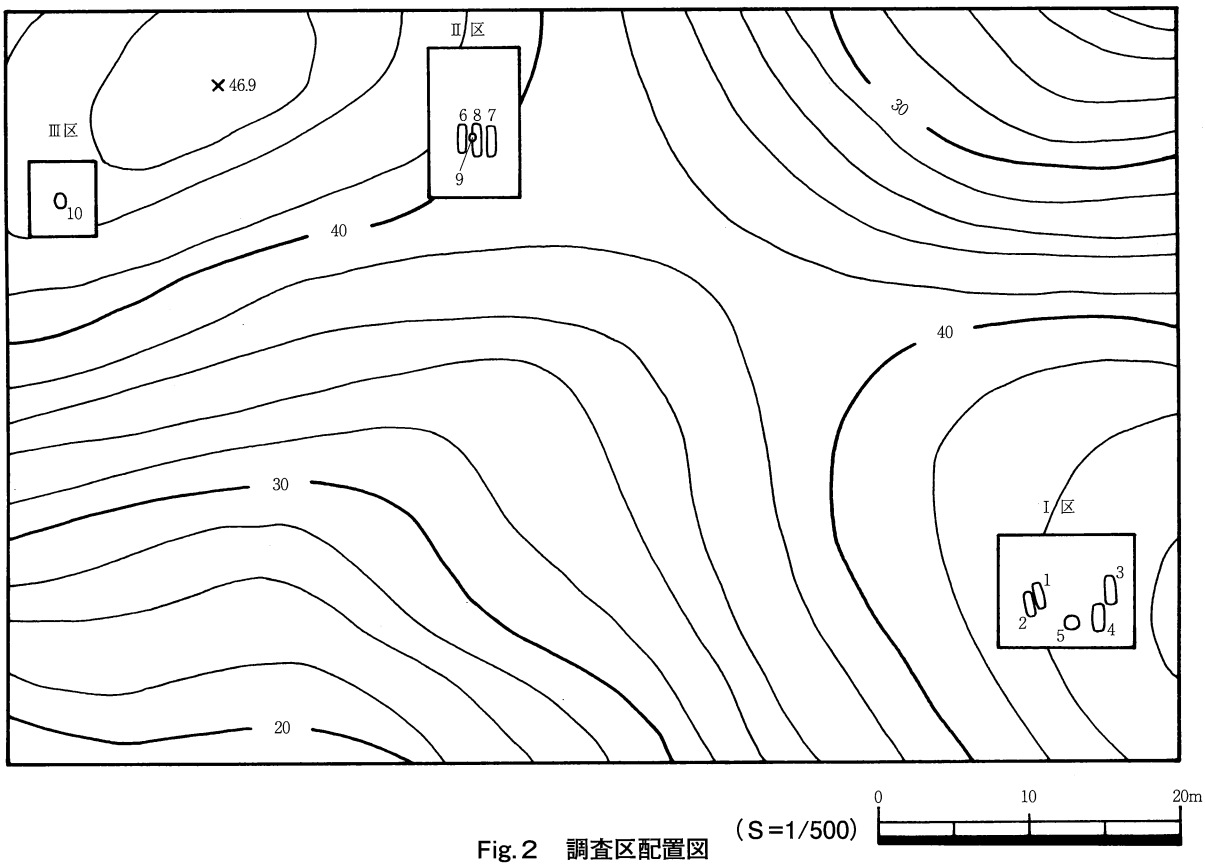

Ⅱ区
Ⅲ区
Ⅰ区
46.9
6 8 7
9
10
1
2
3
4
5
40
30
20
(S=1/500)
0
10
20m

Fig. 2　調査区配置図

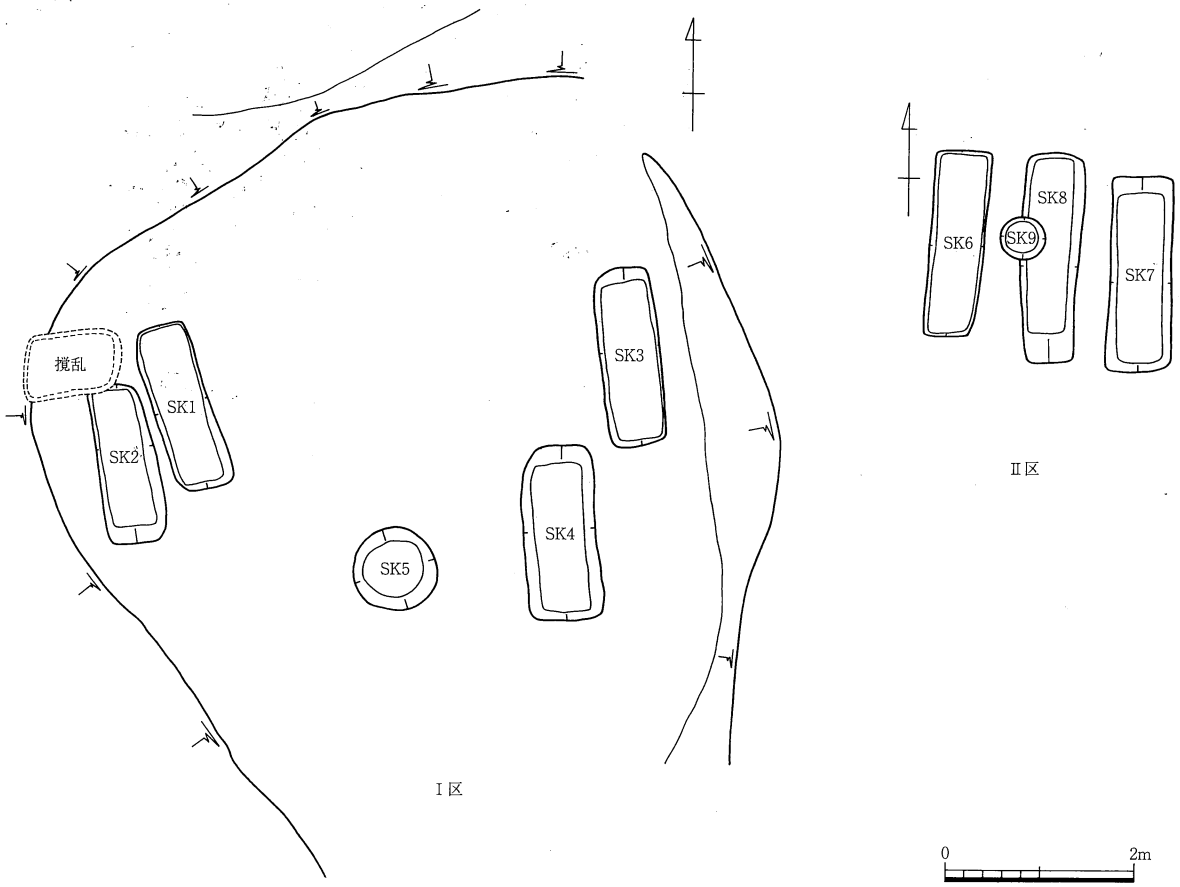


Fig.3　Ⅰ区・Ⅱ区遺構位置図（S=1/80）

第３節　調査の方法

（1）調査の手順

今回の調査対象は有縁墓地の改葬であり、周辺では宅地造成工事に伴う他の改葬が順次行われていたため、その手順や日程を尊重し必要に応じて測量等を行うという形をとった。また、県教育委員会からの調査指示は初代森田久右衛門の墓所のみであったが、同日に他の森田家墓所の改葬も行われ、森田家御子孫や工事主体の白馬産業の承諾が得られたため墓所全てについて調査を行った。そのため一族の埋葬形態について一括した資料が得られ、より資料価値の高い調査が実施できたと考える。

調査した墓壙が多く、また時間の限られた確認調査であったため、掘削は墓壙側壁を破壊しないよう注意しながら機械掘削を中心にして行い、必要に応じて人力を併用した。また遺物出土状況図や平面図・断面図等を作成した。また、出土遺物については移転後の墓所へ安置する前に、実測・鑑定等を行うことについて森田家側の快諾が得られたため、一時借用し持ち帰って必要な調査を行った後返却した。

（2）調査区の設定及び基準点

各墓壙は大きく３箇所に分かれて存在していたため、最も南に位置する初代森田久右衛門墓所付近を調査Ⅰ区、中央に位置する４代森田弥源次墓所付近を調査Ⅱ区、最も西に位置する森田源兵衛墓所を調査Ⅲ区とした。測量基準点は各調査区ごとに設定し、各墓壙ごとの実測基準点は任意座標を用いて平板測量で記録した。また、各調査区の位置関係は後日トータルステーションを用いて測量した。

第２章　遺構と遺物

（1）Ｉ区の調査

調査Ｉ区では、５基の墓坑を検出した。この墓域上面では

墓標Ａ－正徳五年（1715）森田久右衛門

墓標Ｂ－延宝八年（1680）被葬者不明

墓標Ｃ－寛保四年（1744）森田八丞光政

墓標Ｄ－寛保三年（1743）森田八之丞妻

墓標Ｅ－被葬者不明

の５基の墓標と、Ｆ－上部墓標を損失したとみられる墓石基部1基、Ｇ－石積み１基が上面にて確認されている。しかしながら、上部構造である墓標と地下構造との対応関係が推察できるものは墓標ＡとＳＫ１、墓標ＧとＳＫ２、墓標ＣとＳＫ３、墓標ＤとＳＫ４のみであり、その他については墓標の移動や消失によって対応関係が明らかでない。

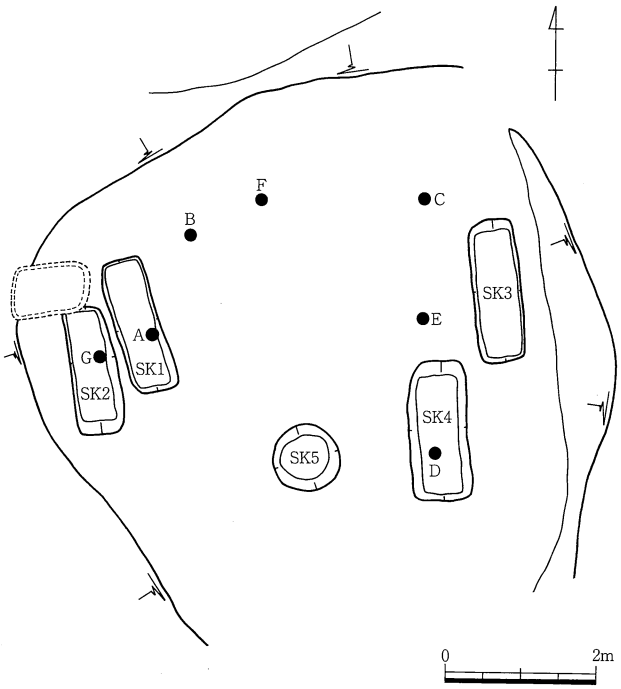


Fig.４　Ｉ区検出遺構・墓標位置図

各墓標は墓標Ａ～Ｄが砂岩製、墓標Ｅが花崗岩製であり、墓標Ａが非塔形墓標分類（Fig.12）のＤ型、墓標Ｂ・ＥがＡ型、墓標Ｃ・ＤがＢ型である。

ＳＫ１（Fig.５）

調査Ｉ区の北西部に位置する墓坑で西側にＳＫ２が並列する。墓坑上面には「正徳五未年　森田久右衛門墓　三月九日□七十五」銘の石製墓標を伴う。墓標は砂岩製で塔身が方柱形を呈し笠部を有する。

墓坑は軸方向N－0°－E。平面形は長方形を呈し長軸180×短軸60cm、深さは173cmを測る。底部は長軸180×短軸55cm。床面はほぼ平坦である。埋土は明赤褐色粘質土で角礫を多量に含む。

木棺片は残存しないが床面壁際から釘数点が出土しており、内部主体は箱形木棺とみられる。床面からは人骨が少量出土している。副葬遺物は床面北寄りから出土した寛永通寶６枚である。銭貨は６枚重ねであり、外部には布痕跡を残している。図示したものは寛永通寶（１～６）であり、１・２は新寛永、３～６が古寛永である。

ＳＫ２（Fig.５）

調査Ｉ区の北西端に位置する墓坑で、東側にSK1が並列する。墓坑上面には石積みを伴う。

墓坑は軸方向N－11°－E。平面形は長方形を呈し、長軸174×短軸60cm、深さは146cmを測る。底部は長軸144×短軸46cm。床面はほぼ平坦である。埋土は明赤褐色粘質土で角礫を多量に含んでいる。木棺片、人骨、副葬遺物とも未確認である。

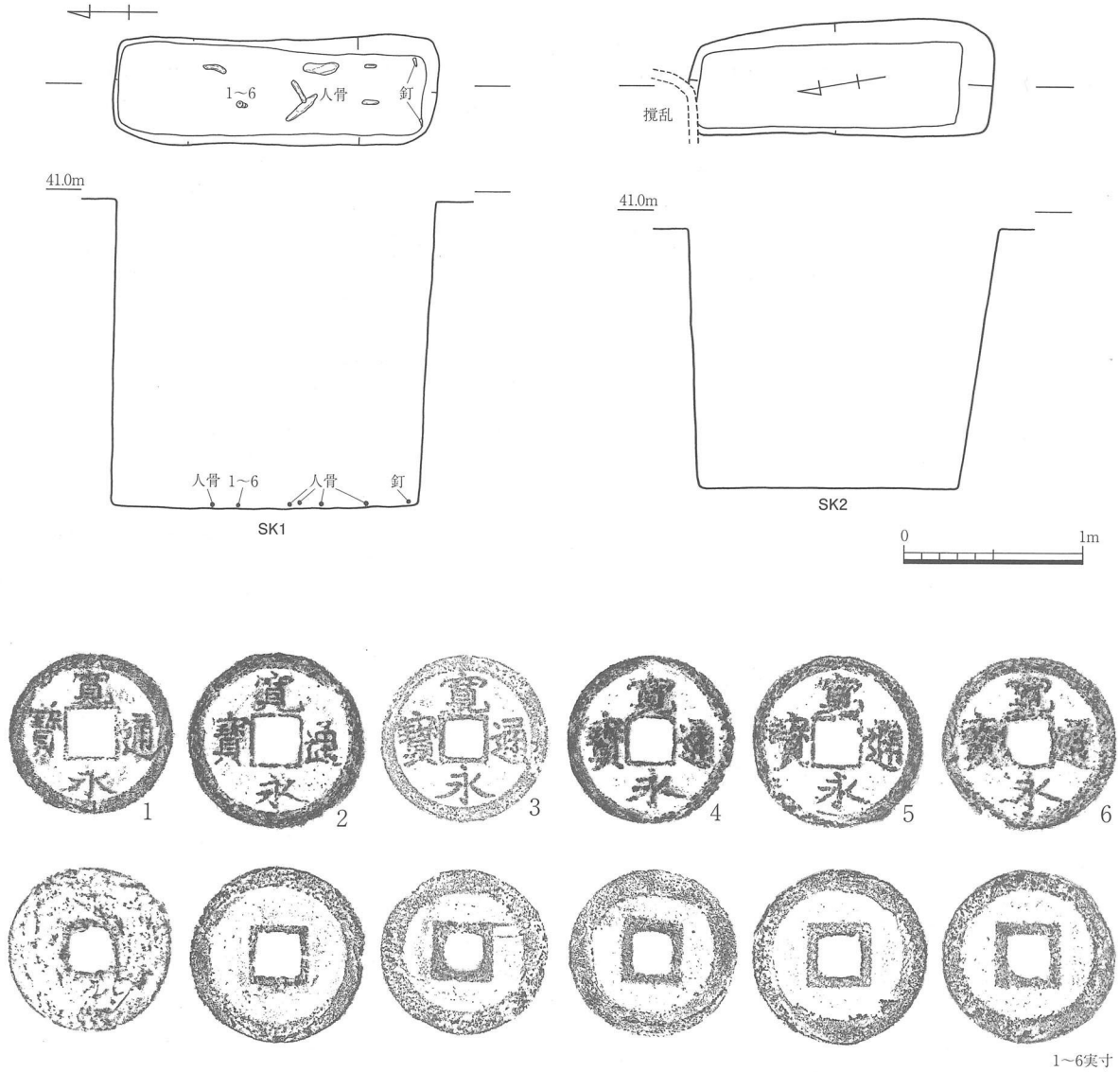


Fig.5　ＳＫ１・２平面・エレベーション図及び出土遺物（１～６：ＳＫ１）

ＳＫ３（Fig.6）

調査Ｉ区の北東部に位置する。墓坑上面には「寛保四申子年　森田八丞光政墓　正月□日行年七十一歳」銘の石製墓標を伴う。墓標は砂岩製で、塔身が方柱形を呈し、頭部は弧状となる。

墓坑は軸方向N－12°－E。平面形は長方形を呈し、規模は長軸190×短軸63cm、深さ145cmを測る。底部は長軸170×短軸50cmである。埋土は明赤褐色粘質土で角礫を多量に含む。

内部主体は箱形木棺とみられ、床面からは鉄釘数点と人骨が出土している。副葬遺物は床面北側から出土した６枚重ねの寛永通寶、煙管雁首と吸口である。

図示したものは寛永通寶（新寛永:14･16･18、古寛永:15･17･19)、煙管雁首（12)、煙管吸口（13)、鉄釘(8)である。煙管は12･13ともにラウが残存する。８は鉄製の角釘とみられ、頭部は半円形を呈する。８は先端部を欠損する。

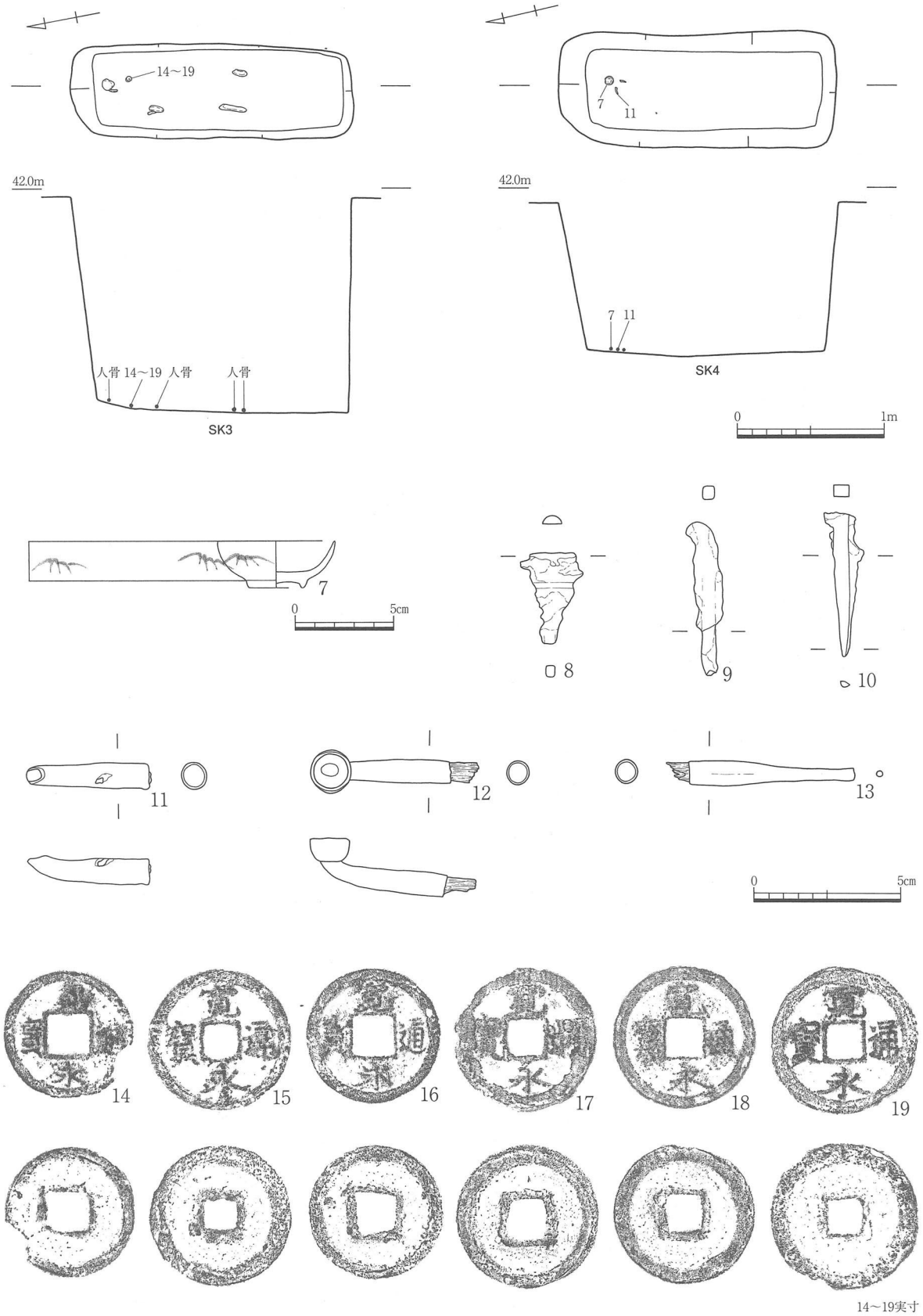


Fig.6　ＳＫ３・４平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
（８・12～19：ＳＫ３，７・９～11：ＳＫ４）

ＳＫ４（Fig.6）

調査Ｉ区の南西部に位置する墓坑で、北東側にＳＫ３が近接する。墓坑上面には「寛保三癸亥年宮近□女　森田八之丞妻墓　閏四月廿八日行年四十四歳」銘の石製墓標を伴う。墓標は砂岩製で塔身が方柱形を呈し、頭部は弧状をなす。

墓坑は軸方向N－15°－E。平面形は長方形を呈し長軸190×短軸63cm、深さ72cm、底部は長軸158×短軸50cmを測る。埋土は明赤褐色粘質土で角礫を多量に含む。

床面壁際からは鉄釘数点が出土しており、内部主体は箱形木棺とみられる。副葬遺物は床面北側から出土した染付小杯、煙管雁首と吸口であり、煙管吸口は外部に布痕跡を残す。図示したものは染付小杯（7）、煙管雁首（11）、鉄釘（9・10）である。７は肥前産の丸形小杯で、外面に笹文を描く。呉須は青色に発色し透明釉は僅かに青色を帯びる。煙管雁首（11）は火皿を欠損する。吸口は破損が著しく図化不能であった。10は鉄製の角釘で、四角形の頭部をもち全長は4.8cmを測る。９も角釘であるが、先端部を欠損する。長さは5cm前後とみられる。

ＳＫ５（Fig.7）

調査Ｉ区の中央部に位置する墓坑で、上面には墓標を伴わない。平面形は円形を呈し、規模は径88×90cm、深さ172cm。底部は平坦で径60×65cmを測る。埋土はにぶい赤褐色粘質土で角礫を多量に含んでいる。

内部主体は早桶等の桶状木棺とみられ、床面壁際からは鉄釘数点が出土している。

副葬品は未確認である。図示したものは鉄釘（20）である。20は錆が著しく体部形態は不明である。釘全長は5.7cmを測る。

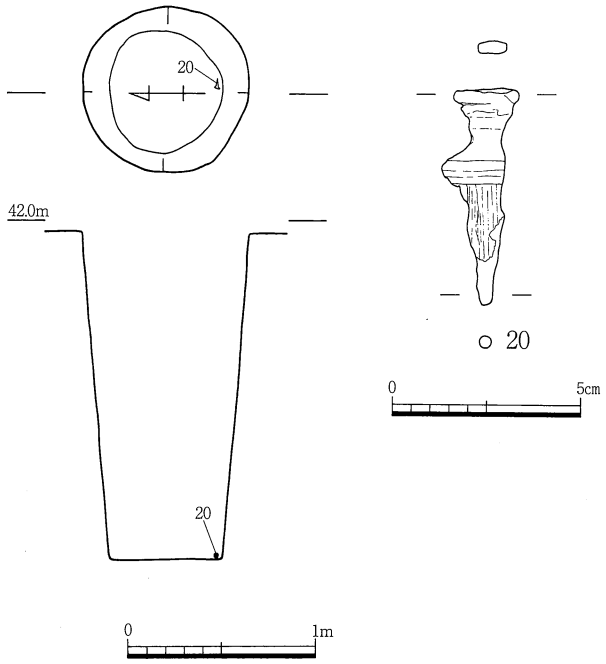


Fig.7　ＳＫ５平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

（2）Ⅱ区の調査

調査Ⅱ区では山の東斜面に墓域が展開しており、ＳＫ６～９の４基の墓坑を検出した。この墓域では最下段にあたる東端部にて墓標Ｈ－森田弥源次（没年1803）と同妻（没年1809）の墓標、その西側にて墓標Ｉ－正徳元年（1711）森田久右衛門娘亀の墓標が確認されている。このうち、墓標と検出墓坑との対応関係が特定できるものは夫婦墓である墓標ＨとＳＫ７・８であり、墓標Ｉについては元の埋葬地点から移動された可能性があり検出墓坑との対応関係は明らかでない。

各墓標はいずれも砂岩製であり、墓標Ｈが非塔形墓標分類（Fig.12）のＢ型、墓標ＩがＡ型である。

ＳＫ６（Fig.８）

調査Ⅱ区の西端に位置する。墓坑上面付近には「正徳元辛卯年十二月十□日　森田久衛門娘亀墓戒名□□□行年廿六」銘の墓標が残るが、墓標は元の埋葬地点から移動された可能性があり検出墓坑との対応関係を明らかにし難い。墓標は砂岩製で塔身が方柱形を呈し、頭部は切妻状をなす。

墓坑は軸方向N－7°－E。平面形は長方形を呈し長軸200×短軸60cm、深さは162cmを測る。底部は長軸190×短軸53cmである。埋土は褐色粘質土で角礫を少量含んでいる。

内部主体は箱形木棺とみられる。副葬遺物は床面から出土した寛永通寶６枚、煙管雁首と吸口、である。このうち寛永通寶は４枚重ねと２枚重ねの組み合せで出土したものである。又、煙管は布が付着していることから布に巻いて副葬されたものとみられる。図示したものは寛永通寶（新寛永：23～28)、煙管雁首（21)、煙管吸口（22）である。煙管は21・22ともにラウが残存する。

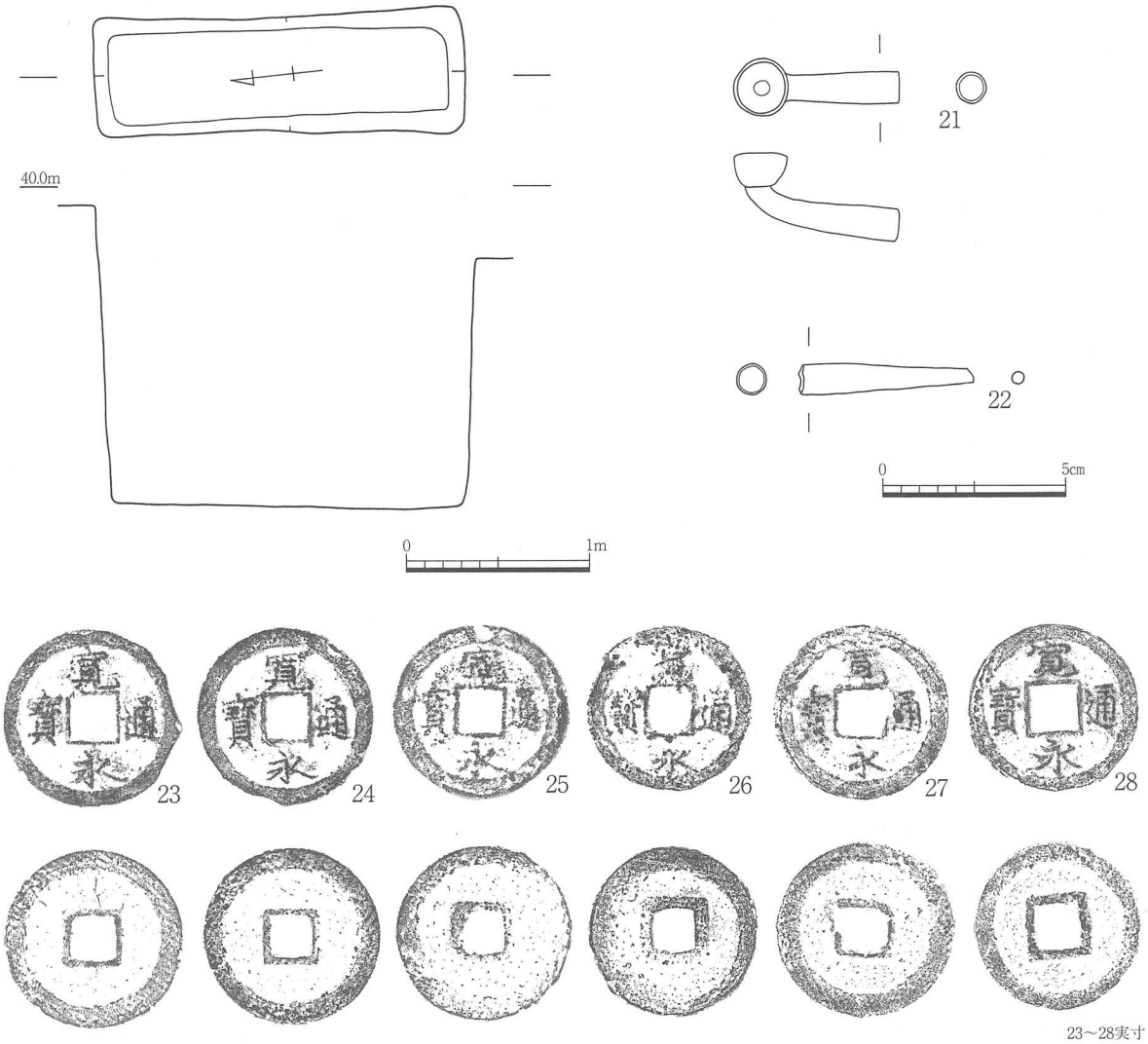


Fig.８　ＳＫ６平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

ＳＫ７（Fig.９）

調査Ⅱ区の東端に位置する。上面には「森田弥源次墓　同妻之墓」銘の墓標を伴う。墓標は砂岩製で塔身が方柱形を呈し、頭部は弧状をなす。墓坑は軸方向N－0°－E。平面形は長方形を呈し長軸約200×短軸60cm、深さ約140cmを測る。埋土は褐色粘質土で角礫を少量含んでいる。

内部主体は箱形木棺とみられるが、副葬遺物等は未確認である。

ＳＫ８（Fig.９）

調査Ⅱ区、ＳＫ７の西に接する墓坑である。先の「森田弥源次墓　同妻之墓」墓標と位置関係からみて、隣接するＳＫ７とは夫婦墓になると思われる。墓坑は軸方向N－0°－E。平面形は長方形を呈し長軸190×短軸50cm、深さは143cmを測る。底部は長軸185×短軸44cm。床面はほぼ平坦である。埋土は褐色粘質土で角礫を少量含む。

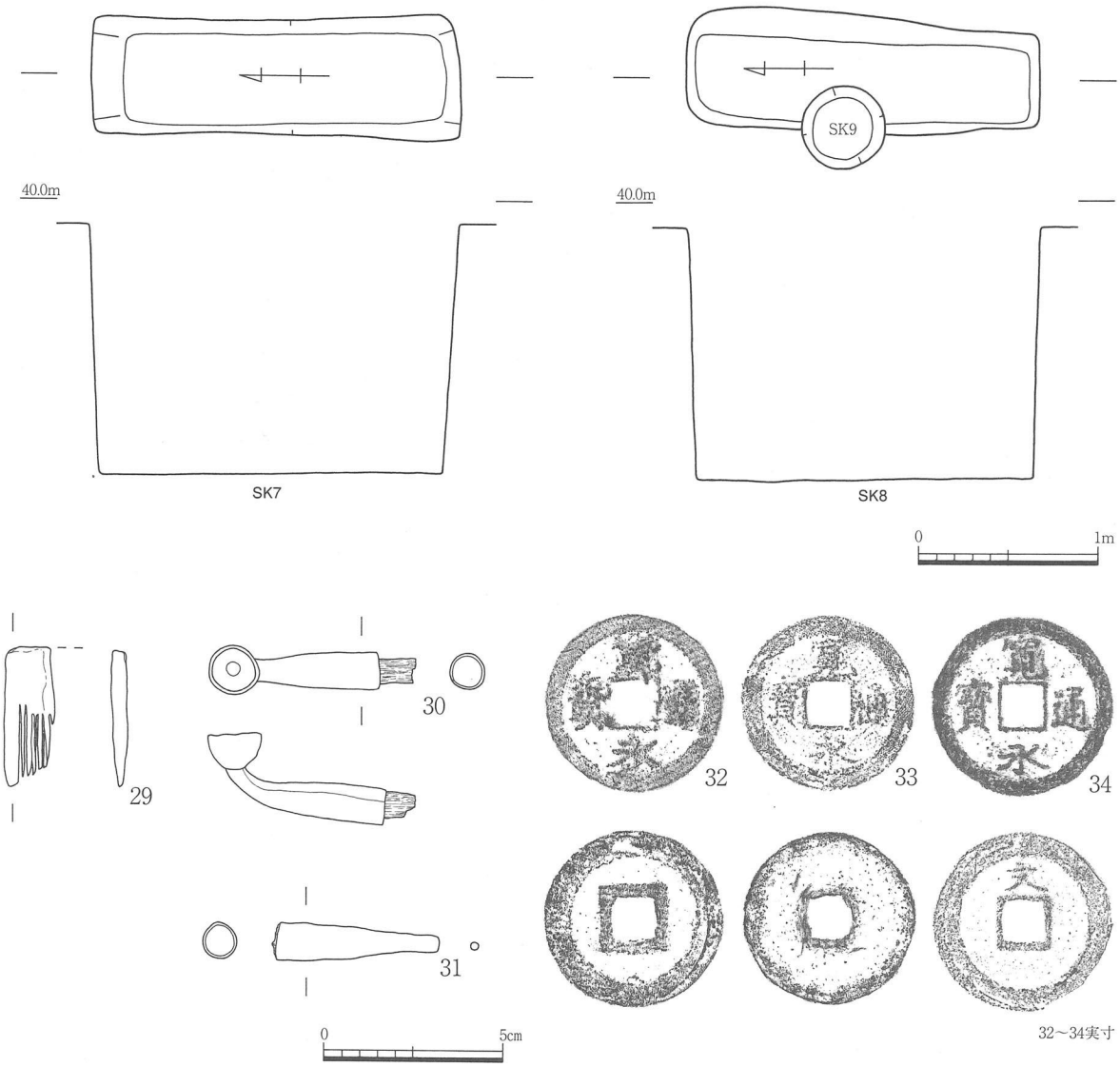


Fig.９　ＳＫ７・８平面・エレベーション図及び出土遺物実測図（29～34：ＳＫ８）

木棺片は残存しないが内部主体は箱形木棺とみられる。副葬遺物は床面北寄りから出土した寛永通寶3枚、煙管雁首と吸口、櫛、玉である。図示したものは寛永通寶（新寛永：32～34）、煙管雁首（30）と吸口（31）、櫛（29）である。煙管はラウが残存しており、ラウ表面には赤色の漆が施されている。

ＳＫ９（Fig.10）

調査Ⅱ区に位置する小型の円形墓坑で、ＳＫ８の西側を切っている。平面形は円形を呈し、規模は径46cm深さは46cmを測る。埋土は褐色粘質土で角礫を少量含んでいる。

内部主体は陶器製の甕棺である。甕上面は素焼きの蓋によって密閉されており、内部には火葬された幼児人骨が納められている。副葬遺物は寛永通宝４枚である。寛永通宝（新寛永）は３枚重ねと１枚の組み合せで人骨の下側から甕内底に溶着した状態で検出された。又、寛永通宝の他に、人骨間から金箔状の細片が少量検出されている。

図示したものは鉄釉陶器甕（35）、素焼き蓋（36）である。35は口径28.3cm、胴径32.5cm、底径17.4cm、器高33.6cm。胎土は灰白色（2.5Y8/2）で、胎土中に石英と長石の角粒粗砂を多量に、黒色細粒を少量含む。釉は暗赤褐色（5YR3/4）に発色し、内面下半無釉、外底施釉である。外面肩部には黒色の鉄釉を流し掛けする。口縁部は外方に肥厚し、口唇部は水平で浅いハケ目が残る。胴部外面には多段の沈線と１条の櫛描波状文を巡らす。肩部双方にはリング状の双耳を貼付し、強いユビオサエを施す。口唇部の９箇所に径１cm前後の円形の砂目、外底の３箇所に径５cm前後の円形の砂目が残る。なお、35は焼け歪みによって片底部側が著しく凹み、口縁部の1箇所には歪みによる亀裂が生じている。又、内底には甕内部での重ね焼きの際に生じたとみられる径8.2cmの陶器高台溶着痕が認められ、又、胴部内面片側にも灰白色（2.5Y7/1）の薄手の灰釉陶器細片が溶着している。蓋（36）は径28.6cm、厚さ2.1cm。胎土は浅黄色（2.5Y7/4）で石英と長石の角粒粗砂を多量に、２～５mm大の長石角礫と１mm前後の黒色粒を多く含む。内外面無釉で硬く焼締まっており、片面のみが褐色に発色する。タタラ成形で外面はイタナデ、部分的にユビオサエと強いイタナデが施される。側面はハケ調整である。焼け歪みによって中央部分が凹み、上面の周縁に鉄釉が僅かに掛かる。本個体は窯焼成時の焼台等の用途に使用された痕跡は無く、又、法量が甕棺口径に一致することから、専用の棺蓋として製作された可能性が高い。

なお、検出人骨の残存状態は良好であり、土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏による鑑定の結果、1.5歳前後の幼児骨との同定結果を得ている。

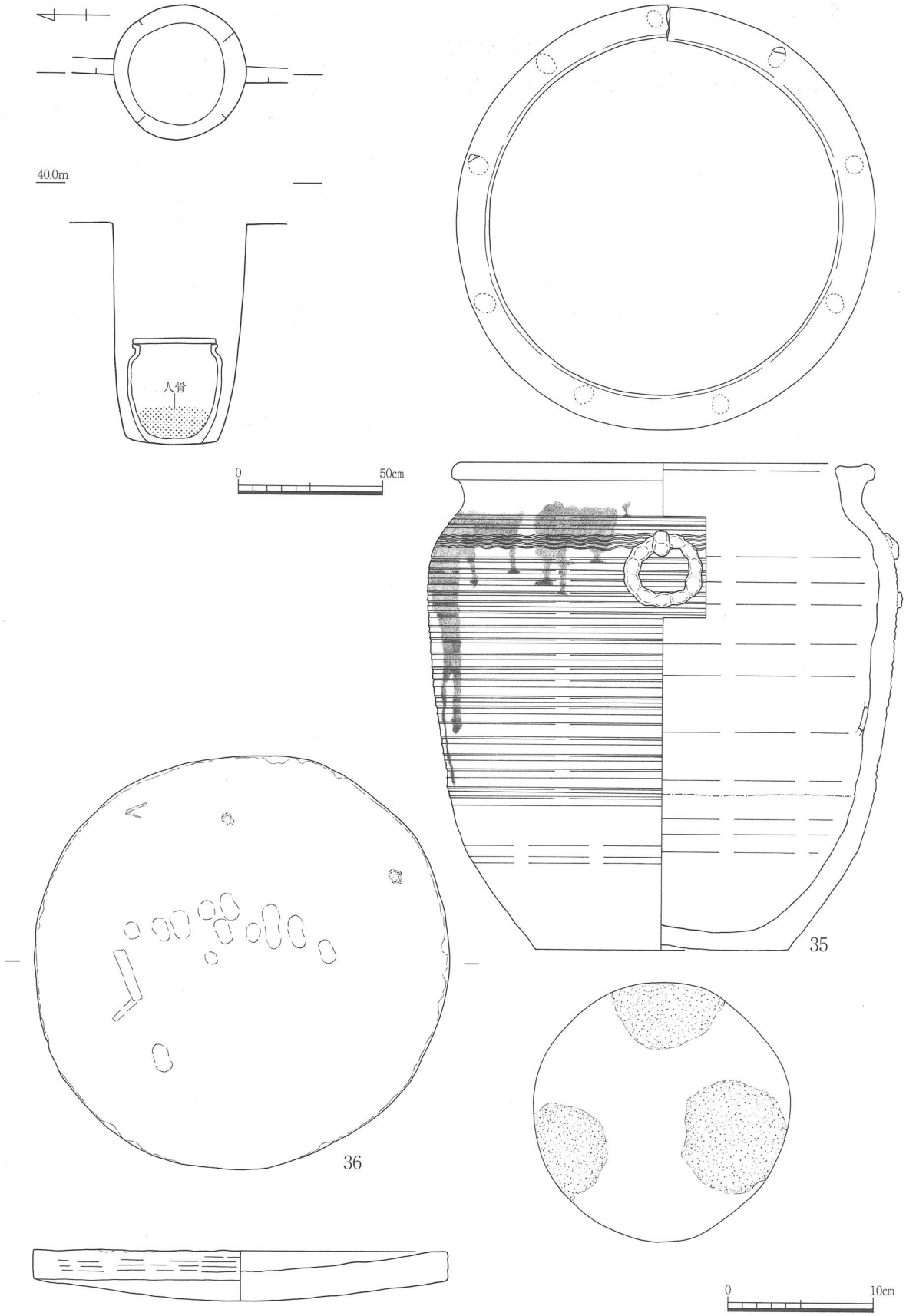


Fig.10　ＳＫ９平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

（3） Ⅲ区の調査

調査Ⅲ区では、ＳＫ10を検出した。この墓域では墓標Ｊ－森田源兵衛光信（没年1725）が確認されている。

ＳＫ10（Fig.11）

調査Ⅲ区に位置する円形墓坑である。平面形は円形を呈し、規模は径100×72cm深さ112cmを測る。底部は径70×60cmである。埋土は褐色粘質土で角礫を少量含んでいる。

内部主体は桶状木棺とみられるが、木棺片や副葬遺物等は未確認である。

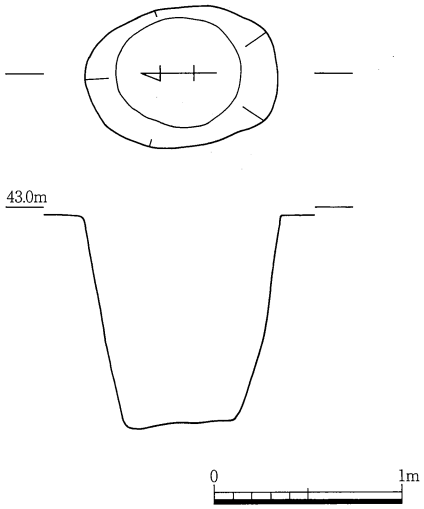


Fig.11　ＳＫ10平面・エレベーション図

表１　遺物観察表（金属製品）

挿図番号	出土地点	種類	器種	法量（cm・g）				特徴	備考
				全長	全幅	全厚	重量		
8	SK3	鉄製品	釘	確認長 3.1	－	－	〔2.7〕	断面四角形。頭部は半円形を呈する。	先端部を欠損。
9	SK4	鉄製品	釘	確認長 5.2	0.5	0.4	〔2.8〕	断面四角形。	頭部は欠損する。
10	SK4	鉄製品	釘	4.9	0.5	0.4	2.5	断面四角形。頭部は四角形を呈する。	
11	SK4	銅製品	煙管雁首	確認長 4.1	0.9	火皿径 －	〔3.0〕	脂返しはに緩やかに湾曲する。	火皿を欠損する。
12	SK3	銅製品	煙管雁首	4.7	0.8	火皿径 1.5	5.4	脂返しは緩やかに湾曲する。	
13	SK3	銅製品	煙管吸口	5.7	0.9	吸口径 0.4	2.9	吸口に向かい窄まる。側面に接合痕あり。	
20	SK5	鉄製品	釘	5.7	－	－	〔2.9〕	頭部は四角形を呈する。	
21	SK6	銅製品	煙管雁首	4.5	0.9	火皿径 1.5	6.6	脂返しは緩やかに湾曲する。	外面に布が付着。
22	SK6	銅製品	煙管吸口	4.8	0.9	吸口径 0.4	1.8	吸口に向かい窄まる。	
30	SK8	銅製品	煙管雁首	4.3	1.0	火皿径 1.5	5.6	脂返しは湾曲する。側面に接合痕あり。ラウ外面には赤色の漆を施す。	
31	SK8	銅製品	煙管吸口	4.5	1.0	吸口径 0.4	4.2	吸口に向かい窄まる。	

表２　遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）				色調・胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
7	SK4	磁器染付	小杯	6.9	2.4	－	2.8	白色。	丸形。笹文。透明釉は青色を帯びる。	肥前。
35	SK9	陶器	甕	28.3	33.6	32.5	17.4	灰白色 2.5Y8/2。石英・長石の粗砂を多量に含む。	鉄釉は暗赤褐色に発色。内面下半無釉。肩部に黒色の鉄釉を流し掛け。輪状の双耳を貼付。外面に多段の沈線と1条の櫛描波状文。外底3箇所に砂目、口唇部9箇所に胎土目跡。	尾戸窯か。底部が著しく焼け歪み、口縁部に亀裂あり。内底に高台溶着痕あり。胴部内面に灰釉陶器片が溶着。
36	SK9	素焼き	蓋	全径 28.6	全厚 2.1	－	－	浅黄色 2.5Y7/4。石英・長石の粗砂、長石礫を多量に含む。	タタラ成形。外面イタナデ・部分的にユビオサエ。側面粗いハケ。	尾戸窯か。

表３　古銭観察表

挿図番号	出土地点	銭種	分類	外径（mm）	穿径（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	備考・初鋳年代
1	SK1	寛永通寶	新寛永	23.0	6.0	1.0	3.12	四ツ宝銭・宝永5年（1708）
2	SK1	寛永通寶	新寛永	24.5	6.5	1.0	3.16	不旧手銭・享保年間（1716～1735）
3	SK1	寛永通寶	古寛永	23.5	5.5	1.0	2.92	－
4	SK1	寛永通寶	古寛永	23.5	5.8	1.0	3.07	水戸銭か
5	SK1	寛永通寶	古寛永	24.2	5.9	1.0	3.53	岡山銭・寛永13年（1636）
6	SK1	寛永通寶	古寛永	24.2	6.0	1.1	3.97	－
14	SK3	寛永通寶	新寛永	22.0	6.8	0.9	1.85	－
15	SK3	寛永通寶	古寛永	24.0	5.5	1.0	3.27	岡山銭・寛永13年（1636）
16	SK3	寛永通寶	新寛永	23.0	6.5	0.8	2.67	－
17	SK3	寛永通寶	古寛永	24.0	6.0	1.0	3.57	－
18	SK3	寛永通寶	新寛永	24.0	6.1	1.1	3.45	－
19	SK3	寛永通寶	古寛永	25.0	5.8	0.9	2.73	－
23	SK6	寛永通寶	新寛永	24.5	6.0	0.9	2.58	－
24	SK6	寛永通寶	新寛永	24.2	5.8	1.0	2.94	不旧手銭・享保年間（1716～1735）
25	SK6	寛永通寶	新寛永	23.9	5.9	1.1	2.88	－
26	SK6	寛永通寶	新寛永	22.8	5.8	0.9	2.86	－
27	SK6	寛永通寶	新寛永	24.0	6.0	1.0	2.92	－
28	SK6	寛永通寶	新寛永	22.9	6.1	0.9	2.24	－
32	SK8	寛永通寶	新寛永か	25.0	6.0	1.0	3.24	－
33	SK8	寛永通寶	新寛永	24.0	6.0	1.0	2.82	－
34	SK8	寛永通寶	新寛永	25.0	5.8	1.1	3.48	文銭・寛文8年（1668）
－	SK9	寛永通寶	新寛永	約25	約6	約1	3枚で 10.30	－
－	SK9	寛永通寶	新寛永	測定 不能	〃	〃	〃	－
－	SK9	寛永通寶	新寛永	測定不能	〃	〃	〃	鉄銭・明和4年（1767）
－	SK9	寛永通寶	観察不能	測定不能	〃	〃	2.99	－

第３章　考察

第１節　近世小高坂村と森田家墓所

１．文献資料にみる近世小高坂村と小高坂山墓地

（1）小高坂村

近世の小高坂村は、高知城下町の西側に隣接する村であり、その西部には丘陵地、小高坂山が広がる。「小高坂村」の名称はすでに天正15年（1587）『長宗我部地検帳』の「大高坂之郷地検帳」にその名が見えており、その大部分は長宗我部氏の一族と伝えられる大黒氏領であったという。近世以降の記録では、宝永年間（1704～1711）の村落の詳細を記したといわれる『土佐州郡志』に「在二府城西北一・・・・東西十町許南北十二町　其ノ土黒　戸凡テ六百二十士民雑居ス」との記載があり、武士・農民の居住地として発展した村の様子が描かれている。

城下町の発展に伴って、近世以降は小高坂村南東部の町地化が 進んだ。先の『土佐州郡志』によれば、小高坂村には「越前町」「川原町」「櫻ノ馬場」と「西町」「北筒市」の地名が挙げられ、18世紀初頭頃の小高坂村において侍屋敷地、町地、農民層の集落が展開した様子が窺われる。続いて、文化12年（1815）編纂の『南路志』（註１）では、先に挙げられた「越前町」「川原町」「櫻馬場」の他に、元禄５年（1692）に山内大膳亮公の侍屋敷が設けられた「大膳様町」、宝永４年（1707）以降寺院の造営が進められた「寺町」、享保21年（1736）以降から農民が移り住んだ「新屋敷」、小高坂山の丘陵部を指す「三丸」の地名が新たに加えられている。

この他に、近世の絵図にも小高坂村は江ノ口川を挟んで、郭中の西側にその村名が記されている。このうち天保12年（1841）の『城下町絵図』を見ると、村の南東部には江ノ口川沿いに東から「ヱチゼン町」「大膳様丁」の南北の町筋が描かれ、その西に「小高坂西町」「小高坂北町」が見える。又、「ヱチゼン町」の北側に「寺町」、その北西に「新屋敷」の名が記されている。

これらの記録から窺われるように、近世の小高坂村は、上級～中級武士層の居住区であった郭中に隣接するという立地環境によって、侍屋敷地、町地、寺町、集落という多様な側面をもちながら発展を遂げた。近世城下町の形成と発展に伴って、当村はその機能を拡大していったといえよう。

（2）寺町の形成

次に、小高坂村内の寺院について見てみたい。まず、『土佐州郡志』では「常通寺」「圓満寺」「宗善寺」の３寺院の名が挙げられている。一方、『南路志』では、先の真言宗「賢法山常通寺悉地院」、一向宗東派「圓満寺」、一向宗西派「宗善寺」に加えて、浄土宗「源信山浄福寺正林院」、浄土宗「智福山西念寺願正院」、浄土宗「山泉寺」、浄土宗「専修寺」、一向宗京佛光寺末「真光寺」が新たに記載されている。

これら寺院がいつ頃から当村に造営されたかが問題になるが、先の史料によれば、常通寺が寛永年間（1624～44）に石立岩戸から当地に移されたことが『土佐州郡志』に、圓満寺が寛永11年（1634）に建立されたことが『南路志』に記されている。また、宗善寺については両史料ともに建立時期が明

記されていない。この他、寛文9年（1669）の『高知城下図』には、江ノ口川西岸の櫻馬場に圓満寺、その西側の越前町横に常通寺の位置が示されている。

続いて、『南路志』によると、源信山浄福寺正林院、智福山西念寺願正院、山泉寺、専修寺、真光寺が宝永４年（1707）以降当村に移転されたとあり、西念寺については「宝永四年大変後今の寺町江引移。」との記述が残る。また同史料によれば、宝永４年の大地震の後に、越前町の北側にあたる地域に寺町の形成が進められたということであり、これについて「寛文十一年辛亥四月、伊達兵部少輔宗勝公御預り之節此所配所ニ相成、三方堀ニ而南一方出入口なり。延宝七己未十一月四日兵部公於配所卒去。其後宝永四亥年大地震後、今の寺町ニ成。」との記述がなされている。

したがって、小高坂山の下側に位置する宗善寺が造営時期不明であることを除けば、17世紀前半に真言宗常通寺と一向宗圓満寺の２寺院が村の南東部に設けられ、続いて18世紀初頭以降、浄土宗浄福寺、西念寺、山泉寺、専修寺、一向宗真光寺の５寺院が次々と造営され、当村に寺町を形成するに至ったということが分かる。すなわち小高坂村に寺院の造営が本格的に進められたのは近世以降からと言えるが、当村に寺院造営が進んだ背景には、城下町に接する村の立地条件も大いに関与していたとみることができるだろう。

（3）近世墓地の形成

「三ノ丸」は、小高坂村西部の丘陵地小高坂山の北部を指す地名である。この丘陵の東側には寺町が面しており、丘陵の尾根から裾にかけて、近世から現代に至る墓地が営まれてきた。また現在丹中山と呼ばれている小高坂山の南部側にも近世墓が多く残されている。（註２）

この「三の丸」については『南路志』にその名称由来と墓地造営の経緯が記されているので、以下引用したい。「或云、忠義公御妾服（ママ）の姫君正蓮院心譽宗月、宝永四年八月御逝去也。山内將監殿御室ニ而、後彦作殿の御母に當也。彦作殿ハ豊昌公と従弟也。御妾を三丸殿と云へり、誰人の娘成事を不聞。三の丸殿死去、小高坂山に葬。今三の丸と云ふハ右の墓有故也、古城の三丸に非らす。夫より前〻ゟ右の墓地近邊ハ乾氏の預りにて、其邊江葬る者あれハ彦作殿江付届をする也。」ここには、「三ノ丸」の名称が山内忠義の側室三丸殿の墓造営に由来することや、この墓地近辺の土地が山内家親族である乾氏の所有地であり、三ノ丸近辺の土地に墓を造営する際には彦作殿への届出が必要とされたこと等が示されている。

ここに表れる「三丸殿」は現存する墓標「寛文元年□卯年 壽性院殿 月清玉心大姉覚位 三月初六日」銘からみて、没年は寛文元年（1661）である。したがって三ノ丸への近世墓造営は寛文元年（1661）前後には行われていたとみることができる。また三ノ丸の土地が山内家関係の所有地であったという点に関しては、今回調査の対象となった 森田家墓地についても、森田家が土佐藩窯の陶工を務めていたことから山内氏関連の土地への墓地造営が許されたと聞く。（註３）三ノ丸には、こうした経緯によって近世を通じ武家を主体とする墓地が営まれていったものとみられる。

最後に、今回は小高坂山墓地移転対象区の近世墓標を調査し、その造営時期の検討を行った。（表４）それによると小高坂山三ノ丸における近世墓の出現は寺町形成以前の17世紀後半からすでに認められており、寺町形成後の18世紀以降その数が急増している。（註４）先に触れた様に、三ノ丸の丘陵は

山内氏親族の所有地が存在したという理由から、ここに武家の墓地が多く営まれることとなるが、城下町の西方に近接し寺町とその周辺に展開する寺院群の西に面するという立地条件も、当墓域の拡大を促したと思われる。こうした背景をもって、小高坂山は城下町西方に面する墓域として展開し近世墓地が営まれていったのであろう。

2．森田家墓所と被葬者について

森田久右衛門は土佐尾戸窯の初代陶工として、承応２年（1653）の尾戸窯開窯から正徳５年に75歳で没するまでの63年間を務め、尾戸焼の作風を確立した人である。延宝６年（1678)、久右衛門は四代藩主山内豊昌より江戸出府を命じられ、各地の窯業の視察や大名茶人の前での作陶を行っている。この延宝６年(1678)夏から翌７年夏までの各地での見聞を詳細に記録したものが『森田久右衛門日記』(註５）である。『森田久右衛門日記』は江戸初期の近世窯業の実態を伝える数少ない陶磁史資料であるとともに、陶工自身が各窯業地の状況を描写した見聞記であることから、当時の窯業実態を知る極めて信憑性の高い資料として現在高く評価されている。また久右衛門以降、近世尾戸窯の陶工を代々務めた森田家には、藩差し出しの『森田家年譜書』の他に、『戸陶値段表』『森田家系図』などの自家の古記録が残されており、当時の尾戸焼の贈答や製作品目及び藩窯陶工の活動内容等を伝える貴重な資料となっている。

そこで、以下の項では近世尾戸窯の操業経緯を紹介するとともに、森田家文書や藩記録を手掛りとして、藩窯陶工としての森田家の動向を検討しておきたい。(註６）

（1）近世尾戸窯と森田家

土佐の藩窯である尾戸窯は、承応２年（1653）二代土佐藩主山内忠義公の命により開窯された。この年藩主から野中兼山に宛てた『忠義公書状』(註７）には、その開窯の経緯が記されている。書状中には「一、肥前焼物其元へ商人持参候て、其元にも能土有之、焼物出来候ば重宝成候、又は家中侍共下々迄も遣用ニ致儀と被存、・・・」との記述がみられ、肥前陶磁の盛行や諸国での国焼新興の気運に刺激をうけ焼物の国産を狙っての開窯であったことが窺われる。又、文面からは諸公への贈答品や藩内御用品の製作の他に、家臣や民家使用の品々も焼かせたいとのねらいもあったとみられる。開窯にあたっては、大坂高津の陶工久野正伯を土佐に招き寄せて、窯を築かせ製作を行わせている。『忠義公書状』中に表れる正伯の製作品目は茶入、茶碗、花入れ、皿であり、それらは「くはんにう入仕立」のものであったらしい。

正伯の弟子には森田久右衛門と山崎平内が命じられた。両人は正伯の元にてその技法を習得し、正伯帰坂後も両人が作陶を行った。この初期の段階の尾戸焼は「正伯焼」「正伯弟子焼」として記録上(註８）に表れている。以後、近世を通じて森田・山崎の両家が藩窯での作陶に代々従事した。製作品目は森田家が茶道具を中心に製作し、山崎家は香炉などの他尾戸雑器の生産に従事したと考えられているが（註９)、山崎家の製作内容については資料が乏しく不明な点が多い。

窯は現在の高知市小津町に位置しており、寛文９年（1669）の古絵図では高知城の北側に７室程度の規模をもつ登り窯が描かれている。しかしこの後の文政３年、能茶山において磁器藩窯が開かれた

ことから、文政５年（1822）には高知城下の尾戸の窯場は廃止され、工人らは能茶山に移転することとなる。

（2）森田家陶工の記録と被葬者の位置付け

今回小高坂山森田家墓所で確認した墓標には、初代森田久右衛門から四代目森田弥源次までの藩窯工人と、森田家本家から末家の家人の名が刻まれている。各墓標はＡ－正徳五年（1715）森田久右衛門、Ｂ－延宝八年（1680）被葬者不明、Ｃ－寛保四年（1744）森田八丞光政、Ｄ－寛保三年（1743）森田八之丞妻、Ｅ－被葬者不明、Ｆ－被葬者不明（墓石上部損失）、Ｇ－被葬者不明（石積み）、Ｈ－森田弥源次（没年1803）と同妻（没年1809）、Ｉ－正徳元年（1711）森田久右衛門娘亀、Ｊ－森田源兵衛光信（没年1725）である。なお『森田本家系図』（註10）によれば、五代久右衛門光為以降は墓所を能茶山に移しており、高坂山には四代目までとその一族の墓が設けられたとされている。しかし、二代三郎兵衛光長と三代三郎兵衛光福については墓標がすでに所在不明となっており、今回の調査でも確認出来ていない。

（Ａ）森田久右衛門光久（初代。没年1715）

遠祖は近江の佐々木氏とされ、天文年間より長宗我部氏に仕える。天正の『長宗我部地検帳』には久右衛門の祖父にあたる新兵衛光治の給地が現在の高知市万々方面に見えている。父にあたる源兵衛光氏は山内二代藩主忠義に仕え、御用山手代官を務めていた。

久右衛門光久は承応２年（1653）久野正伯の弟子を仰せつけられ、正伯の指導のもとに尾戸焼の技法を確立した。延宝６年（1678）夏には四代藩主豊昌より江戸出府を命じられ、各地の窯業の視察や大名茶人の前での作陶を行った。この年夏から翌7年夏までの各地での見聞を詳細に記録したものが『森田久右衛門日記』である。また、この前年には『幡多中村旅日記』（註11）を記している。久右衛門は正徳５年（1715）75歳で病死するまで63年間を務め、二代忠義から六代豊隆まで仕えた。久右衛門以降は、正徳５年（1715）久右衛門の甥にあたる三郎兵衛光長が後を継いで森田家二代となり、享保12年（1727）その息子にあたる直之丞光福（後号、三郎兵衛光福）が三代を継いでいる。

（Ｂ）被葬者不明（没年1680）

墓標Ｂは埋葬年代延宝８年（1680）が碑銘から確認できるものの、墓石の摩耗が著しく被葬者名が解読出来ない。しかしこれについて、甲藤勇氏が調査作成された森田家系譜資料を参照すると、初代久右衛門の養子に入った二代三郎兵衛光長が、外姓の中屋左衛門の実子（久右衛門の甥にあたる）であり、この中屋左衛門の妻が墓地所在小高坂山、没年延宝８年と明記されている。こうしたことから、墓碑Ａは二代三郎兵衛光長母の墓石であった可能性が高い。

なお、二代三郎兵衛光長については『森田家年譜書』に「一、久右衛門悴三郎兵衛、幼年より父に随御用手伝相勤、正徳五年、父跡目、同年八月廿三日上下三人扶持相続被仰付勤之。」と記載される。相続時、三郎兵衛はすでに57歳の年齢に達しているが、『森田家年譜書』の記述によれば三郎兵衛は幼年から藩御用の作陶に久右衛門とともに従事しており、窯場の操業は一族の者による協同作業から成り立っていたことが窺われる。二代三郎兵衛は享保12年（1727）に死去するまでの11年間を森田家二代目として務めた。

（C）森田八之丞光政（末家。没年1744）

墓標Cは「寛保四申子年 森田八丞光政墓 正月□日行年七十一歳」銘をもつ。八丞光政は森田末家にあたり、初代久右衛門の甥にあたる。八之丞光政の作陶に関する記事は『森田家年譜書』には表れていないが、同資料寛延２年（1749）８月12日の天守閣再建に伴う作陶記録に「御本丸成就御移徒御用左之通　一、素焼御瓶子　一対　仕成三郎兵衛一人　一、御雑煮茶碗　三拾　森田□□　一、御向付小茶碗　三拾　山崎藤七　一、御盃□□　六つ・・・三郎兵衛一人八月十日、同十一御本丸下へ相詰、御瓶子御天守へ持参上る也。・・・」とあり、これについて、丸山和雄氏は森田本家、末家、山崎家が分担して同一目的の仕事に携わったのではないか、との考察を示されている。そして素焼瓶子が森田家三代三郎兵衛、向付小茶碗が山崎家三代勝利の作とし、雑煮茶碗の製作にあたったのがこの八之丞光政であろうと指摘されている。(註12)

（H）森田弥源次光次（四代。没年1803）

墓標には「森田弥源次墓 同妻之墓」銘をもつ。弥源次は森田末家の八之丞光政の実子にあたるが、寛延４年（1751）に森田本家の養子となり、宝暦4年（1754）三代三郎兵衛に代わり森田家４代を継いでいる。弥源次光次は『森田家年譜書』には「弥源次（光次）号楽山　一、宝暦四年三月十九日弥源次儀、父三郎兵衛代勤御聞届仰付られ相勤申候。一、同年五月四日　父三郎兵衛病死仕候、早速忌御免仰付られ候。」とある。弥源次の作陶については、宝暦４年（1754）から安永５年（1776）まで儀礼関係での御用や贈答品の製作記事が多く残されている。

その後、四代弥源次は享和３年（1803）８月16日に病死し、弥源次の長男光為（久右衛門）が後を継いで森田家五代となる。

（J）森田源兵衛光信（没年1725）

源兵衛光信（弥三丞光信）は森田久右衛門の実子、長男にあたるが、陶業は継いでいない。『皆山集』に収められた「前系畧」には「弥三丞系別ニ有久右衛門総領貞享四年郷士ニ被召出元禄十六年郷士職甥九十郎へ譲り同年御軍貝役被召出御徒行ニ被仰付申」との記録が残る。

記録から見るように、尾戸窯における森田家の作陶活動は本家・末家による一族の協同操業によって成り立っていた。また丸山氏が指摘された様に、御用の内容によっては森田・山崎の両家が同じ目的の業務に向かうこともあったのであろう。陶工の身分と待遇については『勤役年譜書』延宝６年の項に「上下三人扶持被成下候。」とあることから、初代久右衛門以降代々、三人扶持の称号を与えられていたことが分かる。また『勤役年譜書』天明２年四代弥源次の代には「天明二年正月十三日　御呼出仰付られ、職業宜仕候と有、帯刀御免仰付らる。」との記事もあり、四代目以前までは工人ながら帯刀を許された身分であったことが窺われる。ただし山崎家は同じく三人扶持であるが、帯刀は無しであった。

その作陶活動の記録をみると、開窯初期から中期にかけては諸公への贈答を目的とした茶陶の作陶記事が多く、他に儀礼用の土器や供宴用食器、その他の藩御用品が認められる。一方で、藩用以外にも商品としての売り出しを図ったことが森田家文書の『戸陶値段表』（註13）から知ることができる。ここには「濃茶碗・薄茶碗・茶入・蓋置・香合・風炉」等茶陶の他に、「茶碗・奈良茶碗・ひなの蓋茶碗・

ひなの膳・菊皿・鱠皿・菓子鉢・猪口・汁こぼし・汁次・盃台・御上酒入徳利・水吸・水次・香炉・花瓶・水指・花生・大砂物鉢・置物・瓶子・硯水入・ぶんちん・火トボシ・引手・たばこ入・鳥の水あひ・鳥の餌入・ひしゃく立・横渡し・白土器」などの販売品の名称を認めることができる。しかし、江戸後期に至ると贈答品としての作陶に関する記載は急速に減少する。文化６年の『山内家史料豊興公紀』の記述にはすでに土佐藩武士層における茶の湯の衰退が窺われており、藩財政の窮迫と倹約策を背景に、尾戸窯も又その作風を転じざるを得なくなったものと推測される。

この後、文政３年（1820）に能茶山に磁器藩窯が開かれ、藩窯経営の主体が磁器生産に移ったことから、五代目久右衛門光為の代文政５年（1822）には、尾戸窯場の廃止と尾戸陶工の能茶山移転の命が下される。尾戸窯陶工はこれによって、本俸の三人扶持と補米一石のうち、補米一石を除かれている。仕事は能茶山において従前の如く行われたが、作陶の記録は少なくなっており、それ以降の近世尾戸窯の作陶状況とその製品については不明な点が多い。

〔謝辞〕

今回の執筆にあたっては、森田家系図について森田芳伯氏より多くの御教示を賜った。また墓標調査においては出原恵三・宮地啓介氏の協力を得、移転先での無縁墓墓標調査に際しては墓地管理元である白馬産業㈱より御配慮を賜った。深く感謝申し上げたい。

〔註〕

１）『土佐国史料集成－南路志』高知県立図書館1991年

２）山本泰三『土佐の墓』土佐史談会1987年。小高坂山には原鳳山（天明元年）、平尾伴九郎（享和２年）、山川久蔵（嘉永元年）、新国平五郎（明和５年）、小林養仲（宝永６年）、西川春庭（元禄14年）などの武士、土佐藩諸公子の侍医を務めた田中琢然（文化11年）や医師池川春水（安永２年）、絵師近森山湖（元文２年）等の墓が存在する。

３）森田芳行、森田芳伯氏のご教示による。

４）今回の小高坂山墓地移転では500基以上の近世墓が移転されており、約500基が無縁墓であった。このうち無縁墓約300基を墓標調査対象とし表４に示した。

５）『森田久右衛門江戸日記』は、昭和7年陶器全集刊行会出版の『陶器全集』にて一度刊行されたが、この後、丸山和雄氏の釈読による全文刊行が東洋陶磁学会から昭和53年に出された。原本は現在県文化財に指定されている。

６）『森田家年譜書』・『森田本家系図』・『皆山集』を参照した。

７）『収録方文書』承応二年・・山内家史料『忠義公紀』

８）『収録方文書』明暦三年、『言上留書牒』寛文六年・・山内家史料『忠豊公紀』

10）森田芳伯「尾戸焼森田家系図について」『土佐史談137号・139号』土佐史談会1974年

９・11・12・13）丸山和雄『土佐の陶磁』より引用。

〔参考文献〕

丸山和雄『土佐の陶磁』雄山閣出版1973年

丸山和雄「近世土佐の茶道と焼物」『高知の研究４』清文堂出版

丸山和雄「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol.５』東洋陶磁学会1978年

森田芳伯「尾戸焼森田家系図について」『土佐史談137号・139号』土佐史談会1974年

『山内家史料　第三代忠豊公紀』山内神社宝物資料館1982年

『土佐国史料集成－南路志』高知県立図書館1991年

表４　小高坂山近世墓標一覧（１）

墓標No.	西暦	埋葬年代	被葬者名・戒名	分類・特徴	側面の銘	材質
1	1675	延宝三□□年三月七日	戒名	B型・幅広	無	砂岩
2	1675	延宝三乙卯年七月二十九日	戒名・□□霊尼	A型・大型	無	花崗岩
3	1677	延宝五丁巳七月十七日	戒名	頭部段状	無	砂岩
4	1677	延宝五丁巳年□□	戒名	A型	無	砂岩
5	1678	延宝六午年□月三日	戒名	A型	無	砂岩
6	1679	延宝七己□	戒名	A型	無・裏面に銘	砂岩
7	1679 1688	延宝七己未年九月二日 元禄元戊辰七月十七日	金子五郎右衛門 尉夫婦	D型	無	砂岩
8	1681	天和元辛酉年九月十四日	□□忠兵衛	D型	有	砂岩
9	1682	天和二壬戌年八月二十四日	出間又介重政	B型・大型	無	砂岩
10	1683	天和三癸亥天七月十八日	戒名	B型	無	砂岩
11	1685 又は 1745	□享二年九月二十七日	戒名・□□童子	A型・小型	無	砂岩
12	1686	貞享三丙寅十月十日	戒名	B型	無	砂岩
13	1688	貞享五□□	戒名	A型	無	砂岩
14	1689	元禄二年己巳二月十五日	戒名・寂春照院妙好	上部破損	無	砂岩
15	1690	元禄三庚午年六月十八日	戒名	B型・大型	無	砂岩
16	1690	元禄三庚午年正月廿九日	戒名・□□信女	A型	無	砂岩
17	1694	元禄七年戊五月六日	戒名・□□信士	B型	無	砂岩
18	1695	元禄八乙亥年十二月廿七日	渡部源助	B型	無	砂岩
19	1695	元禄八□亥□□	戒名	自然礫	無	砂岩
20	1695	元禄八乙亥年十月九日	戒名・荘安祐自信女	B型	無	砂岩
21	1698	元禄十一年寅年八月五日	千屋圓右衛門	B型	有	砂岩
22	1701	元禄十四辛巳七月	長谷川磯右衛門	D型	有	砂岩
23	1701	元禄十四辛巳歳五月十六日	戒名・俗名中□興兵衛	A型・大型	無	砂岩
24	1702	元禄十五年壬午十一月十二日	岩目地源兵衛妻	B型	無	砂岩
25	1702	元禄十五壬午年十一月初二日	俗名堀□八左衛門	B型	無	砂岩
26	1703	元禄拾六□□三月□	戒名	A型	無・裏面に銘	砂岩
27	1703	元禄十六癸未	□□妻	不明・上部欠損・大型	無	砂岩
28	1703	元禄十六癸未年□□	□□□奄妻	不明・上部欠損	無	砂岩
29	1704	宝永元年甲申年四月二十七日	重松佐次右衛門	改葬墓か。	有	砂岩
30	1705	宝永二乙酉四月五日	戒名	B型	無	砂岩
31	1705	宝永二酉年十一月廿八日	高橋寛行	B型	有	砂岩
32	1705	寶永二乙酉年正月廿九日	戒名	D型	無	砂岩
33	1705	宝永二乙酉歳十二月四日	中岡才右衛門	B型	無	砂岩
34	1705	宝永二年乙酉七月八日	楠瀬傳助	B型	無	砂岩
35	1706	宝永三年丙戌□□	不明	不明・上部破損	－	砂岩
36	1706	宝永三年□□	不明	上部破損	－	砂岩
37	1707	宝永四丁亥	戒名	B型	無	砂岩
38	1708	宝永五□□	戒名	A型	有	砂岩
39	1709	宝永六己年十月五日	横田氏女	A型	無	砂岩
40	1709	宝永六己午七月廿六日	戒名	不明・上部欠損	無	砂岩
41	1710	宝永七庚寅歳六月十五日	戒名	B型	無	砂岩
42	1710	宝永七歳正月廿九日	今西助右衛門 今西助右衛門妻	B型・幅広	有	砂岩
43	1710	寶永七年庚寅七月十日	戒名	B型	有	砂岩
44	1711	宝永八辛卯年四月廿四日	戒名	自然礫の粗割り	無	砂岩
45	1712	正徳弐壬辰年九月廿八日	□橋八郎右衛門	D型	無	砂岩
46	1715	正徳五乙未歳十二月□日	戒名	B型	無	砂岩
47	1716	享保元申歳十一月廿七日	森本丹六妻　森本儀右衛門娘	B型	無	砂岩
48	1716	正徳六年丙申五月六日	□地宅右衛門勝久	B型	有	砂岩
49	1720	享保五年庚子十月十五日	乾長三郎 同妻	B型	有	砂岩
50	1720	元禄十四辛巳七月十日	長谷川磯右衛門妻	B型	－	砂岩
51	1720	享保五庚子十月初	戒名	B型	無	砂岩
52	1720	享保五庚子正月六日	宮田平兵衛	B型	無	砂岩
53	1721	享保六□丑七月十一日	戒名	B型	無	砂岩
54	1721	享保六辛丑年十一月七日	井澤茂七郎	B型	無	砂岩
55	1722	享保七歳壬寅正月二十九日	戒名・□□信女	B型	有	砂岩
56	1722	享保七寅歳正月十七日	横田六郎右衛門	B型	無	砂岩
57	1722	享保七壬寅年九月二十六日	戒名	B型	有	砂岩
58	1723	享保八癸卯天六月十二日	戒名	D型	有	砂岩
59	1724	享保九申辰歳正月十八日	戒名・春山□宗信女	自然礫	無	砂岩
60	1725	享保十乙巳年四月十一日	戒名	D型	有	砂岩
61	1727	享保十二丁未年閏正月十三日	戒名	D型	無	砂岩
62	1727	享保十二丁未年	清水林斎	A型	有	砂岩
63	1727	享保十二丁未六月十八日	□□□衛重久	不明・上部欠損	有	砂岩
64	1727	享保十二丁未年十月廿七日	戒名・□□信女	B型	無	砂岩
65	1729	享保十四年己酉四月二十八日	新閼利左衛門俊忠	その他	有	砂岩
66	1730	享保十五庚戌十月十六日	戒名	B型	有	砂岩
67	1730	享保十五庚戌年九月二十七日	村越九郎衛門信勝妻	B型	無	砂岩
68	1730	享保十五庚戌十月十日	出間氏	B型	無	砂岩
69	1731	享保十六亥歳十一月□日	戒名・□□信女	B型	無	砂岩
70	1732	享保十七年壬子三月六日	村越七右衛門	D型	有	花崗岩
71	1732	享保十七壬子年七月初二日	戒名	B型	無	砂岩
72	1732	享保十七子年九月二十九日	本山勘五郎	B型	無	砂岩
73	1733	享保十八年□□十月十日	山本氏	B型	無	砂岩
74	1733	享保十八癸丑年七月二十七日	村越九郎衛門	B型	無	砂岩
75	1735	享保二十乙卯年□□	戒名	不明・上部破損	無	砂岩
76	1735	享保二十乙卯	岡野作太夫正定	D型	無	砂岩
77	1736	享保二拾一丙辰三月廿八日	横田治三右衛門娘	B型	無	砂岩
78	1736	享保廿一丙辰五月廿二日	釋一向西圓□□	B型	有	砂岩
79	1737	元文二丁巳歳十月二日	半九郎妻	B型	有	砂岩
80	1737	元文二丁巳年	戒名	B型	無	砂岩
81	1737 1733	元文二丁巳年八月廿四日 享保十八癸丑年□□	松嶋茂助正栄 同妻	B型・幅広	無	砂岩
82	1738	元文三戊午年八月八日	嶋村権六	D型	有	砂岩
83	1738	元文三戊午年七月廿二日	秋岸妙林信女	B型	無	砂岩

表４　小高坂山近世墓標一覧（２）

墓標No.	西暦	埋葬年代	被葬者名・戒名	分類・特徴	側面の銘	材質
84	1738	元文三戊午年八月二十一日	戒名	不明・上部欠損	無	砂岩
85	1739	元文四年己未四月十九日	村越八郎右衛門	D型	有	花崗岩
86	1739	元文四己未天九月初七日	秋山良景	B型	無	砂岩
87	1740	元文五庚申四月二十九日	塩田政太郎	B型	無	砂岩
88	1741	寛保元辛酉年九月二日 寛保元辛酉年霜月廿九日	上嶋権八重知 上嶋権八重知妻	B型・幅広	無	砂岩
89	1741	寛保元辛酉年九月十九日	川田加七□雅妻 森田太兵衛光久娘	A型	有	砂岩
90	1742	寛保二壬戌年七月十七日	中屋□助妻	B型	有	砂岩
91	1742	寛保二年壬戌	戒名	D型	有	砂岩
92	1742	寛保二壬戌年正月十八日	戒名	B型	無	砂岩
93	1743 1744	寛保三癸亥年九月二日 延享元甲子年四月廿一日	岩井傳六 林氏女	B型	有	砂岩
94	1744	延享元年甲子十二月十五日	前野利平長義	D型	有	砂岩
95	1744	延享元甲子年九月十四日	戒名	B型	有	砂岩
96	1744	延享元甲子年九月二十八日	堀部九八郎	D型	無	砂岩
97	1744 1745	延享元甲子正月十四日 延享二□七月十九日	武市□□ 同人妻	B型	無	砂岩
98	1745	延享二乙丑年五月廿一日	山崎善右衛門	B型・幅広	無	砂岩
99	1745	延享二乙丑年六月廿三日	松岡□□	D型	有	砂岩
100	1745	延享二乙丑三月廿日	大谷久之丞妻	B型	無	砂岩
101	1746	延享三寅年俗名□作二月十八日	戒名	B型	無	砂岩
102	1746	延享三丙寅歳二月廿日	前野平七重長	B型	有	砂岩
103	1747	延享四年丁卯十月七日	戒名・□□信女	D型	有	砂岩
104	1748	寛延元年戊辰	戒名	D型	有	花崗岩
105	1748	寛延元戊辰年十月十一日	吉川茂右衛門茂正	B型	無	砂岩
106	1748	寛延元戊辰年八月十五日	戒名	上部欠損のため不明	有	砂岩
107	1748	延享五戊辰六月十六日	宮地重元	B型	無	砂岩
108	1748	延享五戊辰年八月六日	戒名□□信士・俗名今西弥市	B型	有	砂岩
109	1749	寛延二己巳年十二月廿一日	吉本忠太夫妻	B型	無	砂岩
110	1750	寛延三庚午年	五藤武八郎休則	D型	有	砂岩
111	1750	寛延三午年十月十八日	利山□□	B型	有	砂岩
112	1751	寶暦元辛未年六月八日	藤田長右衛門	D型	有	砂岩
113	1752	宝暦二壬申年七月二十九日	戒名	B型	無	砂岩
114	1753	宝暦三年癸酉	村越文左衛門	D型	有	花崗岩
115	1753	宝暦三癸酉年	本澤久右衛門	B型	無	砂岩
116	1753	宝暦三癸酉年	戒名・覚幻童子	D型・小型	有	砂岩
117	1753	宝暦三癸□	山下荘九郎重□	B型	無	砂岩
118	1753	宝暦三癸酉年正月三日	服部□右衛門	D型	有	砂岩
119	1755	宝暦五乙亥歳	北川貞之丞	D型	有	砂岩
120	1756	宝暦六丙子年四月三十日	戒名・清珠院□□	D型	有	砂岩
121	1756	宝暦丙子年九月廿八日	楠瀬宅右衛門	B型	有	砂岩
122	1756	宝暦六子年十一月五日	宮地重元妻	A型	無	砂岩
123	1756	宝暦六子歳五月十一日	森本丹六	D型	無	砂岩
124	1758	宝暦八戊寅六月十八日	戒名	D型	有	砂岩
125	1759	宝暦九年己卯八月二十三日	前村越八郎右衛門	不明	－	砂岩
126	1760	宝暦十辰年正月十九日	下元□助	B型	有	砂岩
127	1761 1768	宝暦十一巳正月二十日 明和五子三月八日	高橋寛利夫婦	B型	有	砂岩
128	1762	宝暦十二壬午年二月十一日	出間□兵衛妻	B型	無	砂岩
129	1763	宝暦十三未	村越貞元方成	D型	有	砂岩
130	1763	宝暦十三癸未年二月廿二日	戒名・□□信士霊位	B型	有	砂岩
131	1763	宝暦十三癸未十二月六日	戒名	B型	有	砂岩
132	1764	宝暦十四甲申四月十三日	村越氏女	D型	有	砂岩
133	1764	宝暦十四甲申	池川□五兵衛	B型	有	砂岩
134	1764	宝暦十四甲申年三月五日	戒名	D型	無	砂岩
135	1767	明和四丁亥年	春宗□□□	B型	無	砂岩
136	1767	明和四丁亥年	戒名・法道妙輪信女	B型	有	砂岩
137	1769	明和六己丑年	森本喜三右衛門妻	D型	有	砂岩
138	1769	明和六丑六月廿日	戒名・清致□□信女	自然礫	無	砂岩
139	1769	明和六己丑六月廿六日	中島弥五右衛門	B型	有	砂岩
140	1771	明和八年辛卯二月二十一日	山下要助信女	B型	無	砂岩
141	1771	明和八辛卯年七月六日	戒名・良寿院瑞林妙祥信女	D型	有	砂岩
142	1772	明和九壬辰七月十一日	戒名	不明・上部破損	有	砂岩
143	1772	安永元壬辰年十二月十五	松本勘兵衛女	頭部角錐状	有	砂岩
144	1773	安永二癸巳年□□	戒名	D型	有	砂岩
145	1774	安永三午歳	戒名・観霜妙覚信女	B型	有	砂岩
146	1774	安永三甲午年十月十二日	浅井忠兵衛勝□俊妻	B型	有	砂岩
147	1775	安永四乙未十一月廿六日	本澤久之丞	B型	有	砂岩
148	1775	安永四未歳十二月廿九日	森本丹六妻	B型	有	砂岩
149	1776	安永五年丙申六月五日	戒名	D型	有	砂岩
150	1776	安永五丙申二月二十七日卒	村越孫助貞則	B型	有	砂岩
151	1776	安永五年丙申五月十三日	戒名	A型	有	砂岩
152	1777	安永六年丁酉十月二十日	村越武左衛門	D型	有	砂岩
153	1777	安永六酉年正月□ 寛政三亥年八月二十六日	村越□助直堅妻	自然礫	有	砂岩
154	1777	安永六酉年十月十日	北川貞丞妻	B型	無	砂岩
155	1778	安永七戊年二月四日	戒名	自然礫	有	砂岩
156	1778	安永七戊戌歳四月二十一日	衛致院航誉涼風居士	D型	有	砂岩
157	1779	安永八己亥八月廿三日	五藤□馬	B型	有	砂岩
158	1779	安永八己亥年	戒名	B型幅広	無	砂岩
159	1779	安永八己亥年八月廿三	井澤元助	B型	無	砂岩
160	1781	安永十年丑	村越八郎右衛門	B型	有	砂岩
161	1781	天明元丑歳閏五月三日	楠瀬真右衛門娘	B型	有	砂岩
162	1781	天明元十月二日	戒名・仙覚賢祐信士	B型	有	砂岩
163	1786	天明六年丙午正月二日	戒名・梅巌妙花信女	B型	有	砂岩
164	1787	天明七丁未年三月二十四日	本山喜久彌茂膳	B型	有	砂岩
165	1787	天明七丁未年六月十一日	中村吉兵衛	B型	無	砂岩
166	1790 1815	寛政二庚戌□月廿八日 文化十二乙亥歳九月五日	甲藤重七夫婦 重七妻	B型	有	砂岩
167	1791	寛政三辛亥歳七月廿四日	戒名・秋妙院□□	E型	有	砂岩
168	1791	寛政三辛亥歳九月廿四	山田定助正遠	E型	有	砂岩
169	1792	寛政四年壬子八月二十三日	大濱琢膳栄之	D型	有	砂岩
170	1792	寛政四壬□九月二十日	奥村角八□	E型	有	砂岩
171	1793	寛政五癸丑年三月十一日	浅井直右衛門勝貞	B型・大型	有	砂岩
172	1794	寛政六年寅七月二十九日	村越九兵衛	B型	有	砂岩
173	1795	寛政七乙卯四月二日	俗名・善七	B型	有	砂岩
174	1795	寛政七年十月二日	弘田大蔵満治妻	自然礫	無	砂岩
175	1795	寛政七乙卯年七月十日	金子善右衛門	B型	有	砂岩

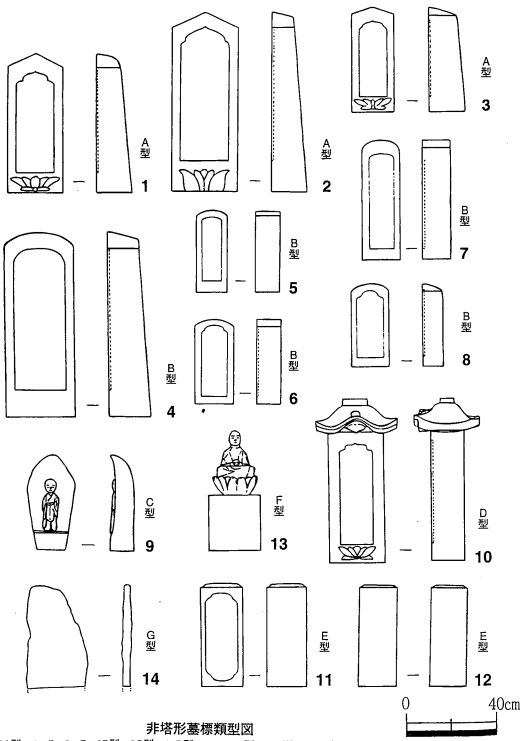
表４　小高坂山近世墓標一覧（３）

墓標No.	西暦	埋葬年代	被葬者名・戒名	分類・特徴	側面の銘	材質
176	1796	寛政八年丙辰十月八日	高橋重次郎	B型	有	砂岩
177	1796	寛政八丙辰年十一月四日	勝来馬正之	B型	有	砂岩
178	1796	寛政八辰年九月十二日	安岡惣右衛門妻	D型	有	砂岩
179	1797	寛政九年丁巳五月六日	横川重七友徳	B型	有	砂岩
180	1798	寛政十戊午年正月八日	前田文次娘本澤久之丞妻	B型	有	砂岩
181	1798	寛政十戊午二月十九日	橋詰久七	D型	有	砂岩
182	1798	寛政十戊午六月廿七日	横田團丞	B型	有	砂岩
183	1798	寛政十戊午年正月十三	五藤武八郎正則妻	B型	有	砂岩
184	1798	寛政十戊午四月十日	井上直助女千	B型	有	砂岩
185	1799	寛政十一未年十一月十四	村越八郎右衛門	D型	有	砂岩
186	1800	寛政十二庚申年	杉村平作妻	B型	無	砂岩
187	1800	寛政十二□申九月□日	戒名	B型	有	砂岩
188	1800	寛政十二庚申□月二十六日	戒名	D型	有	砂岩
189	1801	享和元年辛酉十一月十四日	横川文九郎	B型	有	砂岩
190	1802	享和二戌年十月二十九日	北代勘蔵	B型	有	砂岩
191	1804	文化元年申子三月	□□右衛門真行妻	B型	有	砂岩
192	1804	享和四年甲子年二月十四日	西忠兵衛妻	B型	有	砂岩
193	1807	文化四丁卯年二月八日	瀬尾裕八兼知娘	B型	有	砂岩
194	1808	文化五□□歳六月廿七日	戒名	B型	無	砂岩
195	1809 1817	文化六己九月十一日 文化十四丑	久万屋平六 同人妻	B型	有	砂岩
196	1810	文化七午歳正月八日	楠瀬信丞	B型	有	砂岩
197	1811	文化八年辛未正月廿日	戒名	B型	有	砂岩
198	1812	文化九壬申年四月廿五日	松村平作	B型	無	砂岩
199	1813	文化十癸酉九月十日	戒名・憲清院浄誉寿自信女	D型	有	砂岩
200	1813	文化十年癸酉十一月晦日	大津権十郎作祥妻	B型	有	砂岩
201	1814	文化十一甲戌年五月廿九日	戒名	上部欠損	有	砂岩
202	1814	文化十一甲戌年	橋詰久七妻	頭部角錐状	有	砂岩
203	1814	文化十一甲戌年十一月廿一日	杉村富五郎	B型	無	砂岩
204	1814	文化十一年甲戌六月十一日	浅井忠左衛門勝全	B型	有	砂岩
205	1815	文化十二年□□	邑越八良右衛門妻	D型	有	砂岩
206	1815	文化十二乙亥九月十九日	戒名・寿昌院秋林妙月信女	D型	有	砂岩
207	1815	文化十二年乙亥二月三日	大津権十郎作祥	B型	有	砂岩
208	1815	文化十二亥年十二月□□	川原塚十次郎□□	B型	有	砂岩
209	1816	文化十三子年七月廿五日	戒名・貞淳常栄信士	B型	有	砂岩
210	1816	文化十三丙子年七月十一日	今西□作妻	B型	有	砂岩
211	1819	文政二己卯年四月二十五日	□越文左衛門	D型	有	砂岩
212	1820	文政三庚辰十一月六日	前野利平長勝	D型	有	砂岩
213	1821	文政四辛巳十月八日	濱田五右衛門同人妻今村氏	B型	有	砂岩
214	1822	文政五午年九月廿七日	竹村重次	B型	有	砂岩
215	1823	文政六癸未年十二月十七日	北代文左衛門	B型	有	砂岩
216	1823	文政六未年九月廿二日	西岡作平妻	B型	有	砂岩
217	1824	文政七年甲申七月	戒名	D型	有	砂岩
218	1824	文政七年申九月二十日	村越楠弥	E型	有	砂岩
219	1824	文政七申年三月廿一日	楠瀬直丞妻	B型	有	砂岩
220	1824	文政七申□八月	津野八之丞	B型	有	砂岩
221	1824	文政七年甲申十月十三日	大津勝平業顕	B型	有	砂岩
222	1824	文政七年甲申閏八月八日	池田俊蔵稲満	B型	有	砂岩
223	1825	文政八酉年七月廿日	岡本五内	B型	有	砂岩
224	1825	文政八年乙酉八月廿七日	西本平内正朋同人妻	B型	有	砂岩
225	1825	文政八酉七月十四日	夷屋□右衛門	B型	有	砂岩
226	1825	文政八乙酉年正月二十六日	徳久柳茶貴□	B型	有	砂岩
227	1826	文政九丙戌八月廿日	誉田大門	E型	有	砂岩
228	1830	天保元年庚寅十月二十七日	戒名・□□信女	D型	有	砂岩
229	1832	天保三年壬辰三月六日	村越重右衛門	B型	有	砂岩
230	1832	天保三壬辰年八月二十四日	出間又介重政	B型・大型	有	砂岩
231	1833	天保四癸巳年十月廿七日	五藤武八郎正則	B型	有	砂岩
232	1833	天保四巳年十一月九日	岡本武作後妻	B型	有	砂岩
233	1833	天保四年癸巳十月廿日	中島七左衛門正助	B型	有	砂岩
234	1835	天保□年未七月十八日	弘田忠五郎	B型	有	砂岩
235	1835	天保六年乙未九月廿七日	井澤是作妻	B型	有	砂岩
236	1836 1855	天保七丙年三月十日 安政二□年九月二日	徳永屋重助夫婦	B型	無	砂岩
237	1837	天保八丁酉年六月十日	渡辺楠吾	頭部角錐	有	砂岩
238	1837	天保八酉年三月十日	徳永屋仁平	B型	無	砂岩
239	1838	天保九戊年三月十日	徳永屋重助娘	B型	無	砂岩
240	1839	天保十年己亥年八月十日	村越荘左衛門妻	B型	有	砂岩
241	1839	天保十亥年六月廿五日	今村次兵衛妻	B型	有	砂岩
242	1840	天保十一年子二月廿七日	戒名	D型	有	砂岩
243	1840	天保十一子年八月二日	今村三郎兵衛	B型	有	砂岩
244	1840	天保十一年庚子歳十二月十八日	出間長兵衛久寿妻	B型	有	砂岩
245	1840	天保十一子年十月廿二日	栗田勘七夫婦	B型	有	砂岩
246	1841	天保十二年辛丑八月四日	刈谷善七	B型	有	砂岩
247	1841	天保十二年丑四月五日	久市屋宇平	B型	有	砂岩
248	1841	天保十二丑年十月十九日	藤井亀女	E型	有	砂岩
249	1843	天保十四卯四月廿七日	刈谷善七妻	B型	有	砂岩
250	1844	天保十五年十月十九日	西東市正隆	B型	有	砂岩
251	1845	弘化二年乙巳四月十一日	田中庵秋二女杉	自然礫	無	砂岩
252	1845	弘化二年乙巳月廿日	中島七左衛門正誠妻	B型	有	砂岩
253	1846	弘化三丙午年五月三十日	亀川平次盛新妻	B型	有	砂岩
254	1846	弘化三午年正月二日	玉川や忠助	B型	無	砂岩
255	1847	弘化四年	澤谷柳助　同人妻	B型	有	砂岩
257	1848	弘化五申年正月廿二日	津野八之丞妻	B型	有	砂岩
256	1848	嘉永元年九月十九日	北代甚蔵妻	B型	有	砂岩
258	1849	嘉永二年八月二十一日	村越庄左衛門	E型	有	砂岩
259	1849	嘉永二年己酉	戒名・妙子嬰女	不明		砂岩
260	1849	嘉永二年酉五月十八日	井上利平妻	B型	有	砂岩
261	1850	嘉永三庚戌年四月二日	斎藤久右衛門	B型	有	砂岩
262	1851	嘉永四年	田中庵秋俊妻	自然礫	無	砂岩
263	1852	嘉永五年壬子年十二月七日	戒名・観誉妙照女	D型	有	砂岩
264	1853	嘉永六年正月十六日	村越重右衛門	E型	有	砂岩
265	1853	嘉永六丑年二月十四日	三宮友助後妻	B型	無	砂岩
266	1854	嘉永□年甲寅八月十三日	村越源三郎娘	E型	有	砂岩
267	1854	嘉永七寅年三月廿一日	楠瀬只四郎妻	B型	有	砂岩
268	1854	安政元甲寅年十二月四日	渡邊五郎利貞後妻	A型	有	砂岩
269	1854	安政元年寅九月二日	時久勘七妻	B型	有	砂岩
270	1856	安政三辰三月廿二日	久市屋宇平妻	B型	有	砂岩
271	1857	安政四年八月六日	村越重左衛門	E型	有	砂岩
272	1857	安政四巳六月廿五日	町田助□□八子	B型	有	砂岩
273	1857	安政四年丁巳二月三十日	楠山庄助	B型	有	砂岩
274	1858	安政五午年八月四日	田中勘七秋幸	自然礫	裏面に銘	砂岩
275	1859	安政六己未十月廿七日	斎藤久右衛門妻	B型	有	砂岩
276	1859	安政六己未八月八日	楠瀬只四郎	B型	有	砂岩
277	1860	萬延元年八月八日	村越只吉貞雄	E型	有	砂岩
278	1860	萬延元年庚申七月廿一日	松島鐘吉元長妻	B型	有	砂岩

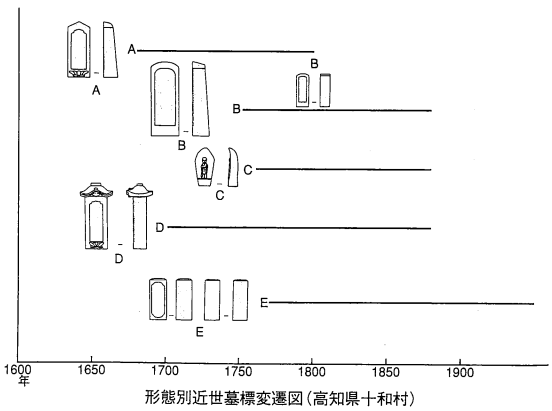
表４　小高坂山近世墓標一覧（４）

墓標No.	西暦	埋葬年代	被葬者名・戒名	分類・特徴	側面の銘	材質
279	1862	文久二戌十二月十七日	津野市丞　同人妻	B型	有	砂岩
280	1863	文久三亥年十一月二十日	大西丑之助	B型	有	砂岩
281	1863 1849	文久三年五月十五日 嘉永二年二月廿五日	寺田安八　同人妻	B型	有	砂岩
282	1864	元治元年子十月廿四日	森下元益	B型	有	砂岩
283	1866	慶応二寅正月二日	井上彦平妻	B型	有	砂岩
284	_	不明	戒名	A型・大型	無	花崗岩
285	－	□保□□	戒名	B型	無	砂岩
286	－	元□□	戒名	不明上部欠損・大型	無	花崗岩
287	－	不明	戒名	A型・大型	無	砂岩
288	－	不明	中山休夢	B型	無	砂岩
289	－	□□□三月廿九日	戒名	A型	無	砂岩
290	－	□□寅年五月六日	不明	B型	無	砂岩
291	－	不明	戒名	A型・大型	無	花崗岩

※墓標の分類は岡本桂典「非塔形墓標類型図」による。



非塔形墓標類型図
1・2・3A型、4・5・6・7・8B型、9C型、10D型、11・12E型、13F型、14G型
1（寛文四年）、2（天和三年）、3（享保三年）、4（寛文四年）、5（文政四年）、6（文政九年）、7（天和七年）、8（天和十年）、9（文政二年）、10（元禄十二年）、11（文政三年）、12（文久四年）、13（文政二年）、14（貞享四年）　銘
〈A型・B型は仮の名称である〉



形態別近世墓標変遷図（高知県十和村）

Fig.12　非塔形墓標類型図

（岡本桂典「土佐十和村の墓標について」『立正史学』1986,
『土佐国石塔・石仏巡礼Ⅰ』高知県立歴史民俗資料館2004.　より引用）

第２節　土佐近世墓の諸様相

はじめに

土佐における近世墓の研究は、今日まで岡本桂典氏によって墓標など上部施設の在り方を中心に精力的に進められてきた。しかしながら、その一方で、地下の埋葬施設については、特に近世墓において、資料数の不足から研究が非常に立ち遅れていると言わざるを得ない。これは近世墓の多くが現存する個人の墓地に属するものであったり、墓地移転に伴う改葬の場合でも宗教的儀礼を執り行うのみで移転を完了されてしまい記録保存に至らないなどという、法制的・習俗的な側面での制約に原因するところが多い。

こうした現状の中でも、近年では県中央部の小籠遺跡、田村遺跡、奥谷南遺跡などで近世農村墓地の考古学的な発掘調査がなされ、地下の埋葬施設や副葬品の在り方にまで及んだ報告事例が序々に蓄積されつつある。しかし、これらの報告例についても、調査の段階にはその殆どが墓標などの上部施設を失っており、地下の埋葬施設のみに限定されたものが多かった。碑銘を伴う墓坑の報告事例は没年代17世紀後半の墓誌銘が残る奥谷南遺跡の土葬墓の事例が挙げられるが、こういった例は県下では希であり、埋葬年代が明らかな墓坑数基を確認できた今回の小高坂山森田家墓所の事例は、県下の近世墓研究にさらに貴重な実例を加えたものといえるだろう。また本遺跡は初めて城下町周辺での近世墓制の実態を明らかに出来たという点でも重要な情報を提供している。

そこで今回は、森田家墓所の調査成果にこれまでの県下の発掘調査報告事例を加えて集約し、特に墓坑形態や副葬品など地下の埋葬形態について、県下の近世墓の様相を検討することとしたい。

１．県下の近世墓報告遺跡

まず、県中央部での近世墓報告遺跡の概要を述べることとする。各検出墓坑の形態・規模・推定埋葬年代等は表５に示している。

①小高坂山墓地（高知市三ノ丸）

小高坂山墓地は、高知城下町の西方に面する丘陵上にあたり、近世には城下とその周辺に居住する武家を主体として近世墓地が形成された。墓域は丘陵の裾から上部にかけて広がり、近世から現代まで墓地が営まれている。

ここに所在する森田家墓所は、土佐藩窯尾戸窯の初代陶工森田久右衛門と代々藩窯の陶工を勤めた森田家一族の墓所で、墓碑銘からみて17世紀後葉から19世紀前葉頃までここに一族の墓が営まれたものとみられる。検出墓坑は10基で、墓坑形態は円形が２基、長方形が７基、甕棺を伴う小型円形が１基であった。

この他、当墓地では、山内忠義の側室にあたる三ノ丸壽性院と、坂本家墓所の立会調査が行われている。坂本家墓所では、２基が長方形１基が楕円形で、いずれも埋土下層には木炭が厚く埋められている。墓碑銘からみた埋葬年代は18世紀前半から中葉にあたる。一方、「寛文元年□卯年」（1661年）墓標銘を伴う壽性院墓は、墓坑下層に木炭が多量に埋められ、さらに箱形木棺の外側全体を覆う様に漆喰等を埋め重ねている。棺内部は人骨の残存状態も良好である。副葬品としては色絵磁器碗１点を

確認しているが、六道銭の有無等については不明である。

②奥谷南遺跡（南国市岡豊町）

高知平野北側の山裾から尾根上にかけて展開する墓地で、近世から現代までの墓が営まれる。調査ではこの尾根頂部から３基の近世墓を検出している。墓坑形態はＳＫ１・ＳＫ２が底部２段堀りで、最下段の平面形態はＳＫ１が方形、ＳＫ２が長方形を呈する。又、ＳＫ３は平面形態長方形を呈する。埋葬主体はＳＫ１が肥前産陶器甕を使用した甕棺であり、これに肥前産の陶器鉢を蓋として転用している。甕棺内からは乳児人骨が検出されており、儒葬を窺わせる墓坑形態と周辺に残された石盤の墓誌からみて、ＳＫ１は乳児を埋葬した儒墓(土葬墓)であろうと報告されている。ＳＫ２は埋葬形態不明。ＳＫ３は木棺墓とみられる。埋葬時期はＳＫ１が近辺に残された墓誌銘と甕棺の生産年代から17世紀中葉、ＳＫ２もＳＫ１との位置関係と墓坑形態の共通性からみて近い年代であろうと報告されている。又、ＳＫ３は18世紀後半から19世紀前半に比定されている。なお、ＳＫ１被葬者の階層性については墓誌から掛川町の鍛冶頭木原作左衛門の一族のものと推定され、ＳＫ１・２とＳＫ３との墓坑形態の差は、階層差を反映したものであろうとの考察がなされている。

③姫野々土居跡（高岡郡葉山村）

山間部に位置する姫野々土居跡は中世の有力国人である津野氏の居館跡であるが、ここでは３基の近世墓も検出されている。墓群は並列するＳＫ10・ＳＫ11とそれに近接するＳＫ９からなっており、いずれも円形である。これらは副葬品として肥前内野山窯の銅緑釉小皿や灰釉小杯、土師器杯等を出土しており、いずれも17世紀後半代に比定される。

④小籠遺跡（南国市小籠）

県中央部の農村に立地する墓地である。近世小籠村では、17世紀中葉以降水路と溝によって区画された耕作地間に居住域が点在する農村景観が展開しているが、調査Ⅲ区ではその一角にて墓地が確認された。ここでは22基の近世墓が検出され、これらが耕作地地割りに沿った軸方向をもって東西方向に配列されている。墓碑は残存しないが、副葬遺物の年代観からみて17世紀末から18世紀代にかけて造営された一族の墓地であろうと報告されている。墓坑の平面形態は、円形が３基、長方形が10基、隅丸方形又は隅丸長方形が７基である。

⑤田村遺跡（南国市田村）

同じく農村に展開する墓地で、古代以来の条里によって区画された耕作地と居住地の間に、２～20基程度の小規模な墓群が点在する。Ｂ４区では、17Ｃ後半と18世紀前半の2基の墓からなる墓群、17Ｃ後半から18世紀前半にかけての４基の墓からなる墓群、18世紀から19世紀にかけての14基の墓によって構成される墓群を検出している。この他にＢ１区では19世紀中葉から近代までの７基の墓からなる墓群、Ｆ５区では18世紀から近代までの28基の墓で構成される墓群を検出している。いずれも墓坑の平面形態は方形あるいは長方形である。

⑥林田遺跡（香美郡土佐山田町）

物部川中流左岸に位置する遺跡で、近世の円形墓ＳＫ10が検出されている。墓坑埋土中には炭化物と焼土が多量に含まれ、上層からは炭化した藁が塊状に出土している。床面には径50～30cm大の大型礫が数個敷き詰められており、その上面から炭化した棺材と寛永通寶５枚が出土している。検出状況

からみて、棺を礫床の上にて焼いた火葬墓であろうと報告されている。

以上の様に、県下での近世墓報告事例は決して多いとは言えない。小籠遺跡・田村遺跡の事例は、集落内に一族を単位とする小規模な墓域が点在するもので、その景観は現代まで引き継がれている。また林田遺跡は集落周辺の河川岸段丘上に、奥谷南遺跡は集落に面する山裾に墓地が設けられるものである。これらのうち小籠遺跡・田村遺跡・林田遺跡はおそらく農民層の墓地であったと思われる。一方、小高坂山墓地の事例は城下町に面する丘陵上に墓域が設けられるものであり、残存する墓標群とその立地条件からみて城下とその周辺に居住する武家層を主体に構成された墓域と推察される。今回の検出事例についても大名家親族や武士、藩関連の工人といった階層差が認められている。

では、こういった墓地の地域性、被葬者の階層性の違いは、墓坑形態や埋葬形態にどのように反映するのだろうか。又、そこには地域差や階層差を越えて普遍的に認め得る年代的変化はあるのだろうか。こうした観点も踏まえながら、以下表５のデータをもとに検証を進めることとしたい。

２．墓坑形態について

土葬・火葬墓を含め、検出墓坑の形態の違いによって以下、分類を行った。

（1）分類

A類：平面形が円形を呈するものである。底部は平坦なものと底部周縁に浅いリング状の凹みを残すものがある。

A’類：上記の形態で小型のもの。

B類：平面形が方形、あるいは短軸：長軸比が１対２以内の短い長方形・隅丸方形・略方形に近い不整形などで、底部が平坦なもの。

B’類：上記の形態で小型のもの。

C類：平面形が長方形を呈し、底部が平坦なもの。

D類：底部が二段堀りとなるもの。

このうちA類・B類・C類・D類が土葬墓である。A類は底部周縁に桶痕とみられる浅いリング状の凹みを残すもの（小籠ＳＫ33）があり、埋葬形態は座葬の早桶とみられる。B類は座葬あるいは屈葬の木棺。又、小型のB’類は幼児を埋葬したものである。C類は寝葬の箱形木棺。D類は儒墓で、乳児骨を納めた甕棺の事例（奥谷ＳＫ１）が確認されている。このD類については報告事例が少なく、こういった形態が県下にて普遍的に認められるものなのか今後の資料増加を待ちたい。次に、A’類が火葬墓である。埋葬主体は甕棺で幼児骨を納めた事例（森田家ＳＫ９）が確認されている。

（2）墓坑形態の年代的変遷

まず、上記の中で特に墓標や副葬遺物の年代観から埋葬年代を特定できた遺構を表５より抽出し、時期別に各形態の出現状況をみることとした。それによると、17世紀後半ではA類が３基（姫野々土居ＳＫ９・10・11）、B類が１基（田村Ｂ４ＳＫ430）、C類が3基（田村B4SK530・565・566）、D類が２基（奥谷ＳＫ１・２）。17世紀末から18世紀前半ではA類が２基（森田ＳＫ10、田村F5SK5002）、B類が２基（田村B4SK554・F5SK5015）、C類が６基（森田ＳＫ１～４、奥谷ＳＫ３、田村B4SK556）。

18世紀後半から19世紀ではC類が23基（森田ＳＫ７・８他）、A’類が1基（森田ＳＫ９）が挙げられる。ただ、A類・B類については副葬品を伴わないものが多く、表５ではA類10基、B類15基が年代的な位置付けができず除外されている。又、おそらく両者のこうした性質によって、遺跡内でも墓として特定されず未報告に終わるものも多かったと思われる。したがって、上記のデータ数値は各形態間の出現比率を正確に表し得るものではなく、おそらく17世紀から18世紀のある時期まででではA類・B類の実態数はもっと多いものと予想される。

こうした資料上の限界はあるが、（1）17世紀後半には円形、短い長方形や略方形、長方形、底部二段堀りの墓坑形態が存在する。（2）17世紀末から18世紀前半には円形、短い長方形、長方形の３者が併存する。（3）18世紀中葉以降になると殆どが長方形墓坑で占められ、幼・小児の埋葬墓に限り別形態の土葬墓や火葬墓が残る、という形態変遷の傾向はみてとられると思う。さらに、各形態の出現時期に注目すると、A類－円形タイプは肥前内野山銅緑釉皿を副葬する姫野々土居跡ＳＫ10・11からみて17世紀後半、B類－方形タイプとD類－底部二段堀タイプも17世紀後半までには出現している。またC類－長方形タイプは田村遺跡ＳＫ530･565･566（17世紀後半）や森田ＳＫ１の埋葬年代（1715年）からみて、17世紀後半から18世紀前葉までには出現しているとみられる。ただC類は17世紀後半のものについては短軸が70～80cm大とやや幅広であり、幅の狭い短冊型の長方形墓坑が明確化するのは森田ＳＫ１（1715年）の段階まで待たなければならない。

（3）地域特質と階層差

先述の様に、土佐では18世紀前半までは円形、短い長方形や略方形、長方形の各タイプの土葬墓が併存しつつ造営され、18世紀後半以降からは箱形木棺を使用する短冊型の長方形墓坑が土佐中央部の墓坑形態の主流へと転じる。こういった形態変遷の在り方は他県でも一般的に認められる状況であるのか、他県の報告内容とも対照させておきたい。

まず福岡県の席田青木遺跡では17世紀後半から18世紀中葉に早桶を使用した円形墓坑が使用され始め、18世紀前半から19世紀には、円形墓坑に在地窯の甕棺を使用するようになるという。また、寺院境内墓地が調査された大阪中央区法円坂の難波宮跡・大坂城跡調査（NW93－12次調査）では、火葬墓27基と土葬墓23基が検出されているが、そのうち18世紀前半を中心とする土葬墓は殆どが円形で、12基が桶を用い、10基が丹波・信楽・肥前産の甕棺を用いたものであるという。

こういった県外での事例と比較してみると、桶を用いた円形墓坑が17世紀後半から18世紀前半には存在する点では共通性がみられる。ただ本県では、九州・大坂でみられるような成人墓への甕棺の使用は認められず、九州の様に19世紀以降も円形墓が造営され続けることはない。桶・箱状木棺・甕棺等の埋葬主体の差には、大型の甕棺を供給できる生産地が周辺に存在するかどうかという地域の立地環境も大きく影響するとみられるが、ここにも土佐の地域特性をみることが出来る。

また墓坑形態の違いには、土葬・火葬という埋葬形態の差も大きく関わってくる。今回県下で確認した成人墓は人骨の残存状態の悪いものが大部分で土葬・火葬の確実な峻別は難しいが、しかし成人墓の殆どは土葬墓とみられるものであった。また火葬墓の事例として、物部川中流域の林田遺跡ＳＫ10で木棺を焼いて埋め戻した火葬形態が認められたが、確認事例は1例のみでありこうした埋葬形態が県下の山村から農村部にかけて広くみられるものかは今後の検討課題としたい。

これに対して近世大坂においては18世紀以降埋葬者数の増加に伴って火葬墓の割合も増し、蔵骨器として土師質の火消し壺や有蓋小型壺が使用されるとの報告がある（註１）。埋葬が火葬・土葬のいずれによるかは、儒教思想の浸透や信仰上の問題の他に、埋葬者数の増加に伴う土地利用上の制約が考えられ、ここには人口の集中する都市遺跡と地方との違いが看取できる。

この他に土葬・火葬墓の出現比率には藩の法制上の問題も関与したと考えられる。特に土佐においては、17世紀以降、藩による儒教思想の奨励が強く進められ、それに伴って土葬墓が奨励された。近世の法令を編纂した『憲章簿』「里正之部」によれば、そこには「火葬御制禁并役方定之事　一、慶安四辛卯年、御国中火葬御制禁被仰出之。一、天和三癸亥年、御国中役方御定目被仰出之。」との記述がみられ、土佐では火葬墓の禁令が慶安４年（1651）に出されたことが分かる。こうした統制も県下の近世墓の形態特質を大きく左右させる要因になったと考えられる。

最後に、県下の土葬墓には特徴的な埋葬形態を示した事例が幾つかみられたためここにつけ加えておく。方形墓坑の小籠ＳＫ18・24は底部に礫と粘土を敷き詰めており、厚葬であろうとの報告がなされている。又、小高坂山坂本家墓所と三ノ丸壽性院墓所では、墓坑下層埋土中から炭化物が多量に出土しており、埋葬時には木炭が棺内や棺周辺に入れられていたものと予想される。また特殊な例として、三ノ丸壽性院墓所では木棺外周に漆喰等を埋め込む埋葬形態が確認された。このうち壽性院墓所の特殊な形態については、大名家親族という被葬者の階層性が反映されたものとみることができよう。（註２）

３．副葬品について

（１）六道銭

土佐において、地下に銭貨を埋納する行為は具同中山遺跡群、姫野々土居跡、岡豊城跡など中世遺跡の地鎮跡からすでにみえているが、墓坑内への銭貨副葬が一般化するのは近世以降である。墓坑内への副葬銭貨、いわゆる「六道銭」は、俗に「三途の川の渡し賃」と言われるもので、死者が六道の辻にある六地蔵に１枚ずつ賽銭を渡すと考えられていることから古銭６枚組のものが最も多いとされる。県下でこれまでに確認された六道銭はその殆どが墓坑床上の中央部から北側にかけて出土したもので、中には布の付着痕跡を留めて検出されたものもあった。こうしたことから、六道銭は一般に被葬者の胸元近くに納められ、その際には布に包んだり布袋に入れて死者の頚元に掛けらたとみられる。六道銭の副葬は県外遺跡では浄土宗・浄土真宗・臨済宗など各宗派の墓で確認されているということであり、（註３）土佐の近世墓においてもこうした風習が広く浸透したものと予想される。以下では、小高坂山森田家墓所、奥谷南遺跡、姫野々土居跡、小籠遺跡、田村遺跡の六道銭について、その内容を検討することとする。なお、古銭の年代鑑定は泉幸代氏によるもので、その内容は別章の古銭観察表（表３）と出土銭貨一覧（表６）に示している。

①小高坂山森田家墓所出土の六道銭

今回の小高坂山森田家墓所の調査では、六道銭の出土数自体は多いとは言えないが、墓標銘から埋葬年代が導きだせる資料が含まれているため、その内容を特に明記しておきたい。森田家墓所の調査で六道銭の出土が認められたものはＳＫ１・３・６・８・９の６基である。

まず、正徳５年（1715）の墓標銘をもつＳＫ１からは６枚が出土しており、その内分けは古寛永４枚、新寛永２枚の組み合せとなる。この中には岡山銭（初鋳年代1636年）、四ツ宝銭（初鋳年代1708年）、及び不旧手銭（初鋳年代は1716～1735年の説あり）が含まれている。

次に、寛保４年（1744）墓標銘のＳＫ３からは、古寛永3枚、新寛永３枚の組み合せからなる六道銭が 出土する。この中には岡山銭が含まれる。

ＳＫ６は確実な墓標銘を伴わないが、ここからも６枚が出土する。内容は6枚とも新寛永であり、中には不旧手銭が含まれている。

墓標銘と被葬者の没年代記録から文化６年（1809）を埋葬年代とするＳＫ８からは、新寛永３枚が出土しており、中には文銭が含まれる。

幼児骨を納めた甕棺墓ＳＫ９は墓坑の切り合い関係から1809年以降と推定される。ここからは４枚が出土しており、３枚が新寛永、１枚は観察不能である。

上記遺構については古寛永（初鋳1636年）・文銭（初鋳1668年）・新寛永（初鋳1697年）のいずれについても、各々の貨銭の初鋳年代と墓坑埋葬年代との間で整合性に問題のあるものは特に無かった。

②県下の六道銭出土傾向

県下の六道銭出土墓坑を、埋葬年代別に示したものが表６－１～４である。それによれば、近世墓への寛永通宝の副葬が確認され始めるのは17世紀後半の田村B4SK430からであり、近世全体では時期不明の墓も含めて39基に六道銭の副葬が認められている。六道銭の出土の有無によって墓の特定が左右されたり、陶磁器など年代特定の根拠を得やすい墓では六道銭を共伴する傾向が強いなど資料的限界があるため、出現比率の実態数はもっと低い数値になると考えられるが、まず先の表６－１～３を用いて、年代毎の六道銭出土比率の増減を大まかに捉えておきたい。それによれば、17世紀後半では検出墓坑９基中３基、18世紀前半では10基中７基、18世紀後半から19世紀中葉では26基中17基となり、18世紀以降六道銭の副葬が一般化し以後増加していく状況がみて取れる。また、時期不明のものも含めて墓坑形態別に出土比率を見ても、Ａ類では15基中３基（20%）、Ｂ類では18基中６基（33%）、Ｃ類では49基中28基（57%）となり、ここでも18世紀前葉以降一般化する短冊型長方形墓坑Ｃ類での出土比率が高まっている。

枚数については、17世紀後半で６枚組が３基。（表６－１）18世紀前半では６枚が３基、２枚・４枚・５枚・７枚が各１基。（表６－２）18世紀後半から19世紀では６枚及び５～６枚が７基、５枚が４基、１枚が２基、２枚・３枚・４枚・14枚が各１基であった。（表６－３）これによれば、全体を通じて６枚セットがやはり最も多い。しかし、17世紀後半は６枚組が100%近いのに対して、18世紀以降では全般に６枚組以外のものの占める比率がかなり増加してくるようである。すなわち表６－２～４全体から見ると、６枚組又は５～６枚が44%、５枚組が15%、４枚組が10%、３枚組が５%、２枚組が８%、１枚が８%、７枚組が８%、14枚組が３%という状況であった。

こういった６枚組以外の埋納や六道銭を伴わない墓には、年代的背景の他にどういった要素が関わっているのだろうか。６枚組以外の副葬は農村部の田村遺跡で18世紀前半から、城下町周辺の小高坂山墓地で19世紀以降から見えており出現に若干の時期差があるが、十分な資料数を得られていないため、ここからは地域差・階層差のようなものを見出すことができなかった。

一方、乳幼児墓である森田家墓地ＳＫ９（19世紀）、田村遺跡B4SK534（19世紀）、奥谷南遺跡ＳＫ１（17世紀後半）の場合は、４枚組や副葬無しであり、成人・乳幼児の違いが六道銭枚数に影響を与えている可能性は高い。

以上の様に、小高坂山墓地、田村遺跡、小籠遺跡とも、18世紀代以降は性差･地域差は認めにくい。又、18世紀以降から遺跡の六道銭出土比率が伸び始めるが、この段階には６枚組という概念がかなり薄れ、特定の枚数に規定されない副葬の在り方が一般的となるようである。ただし、こうした傾向が県下全般に認められるのかどうかについては、資料数が非常に限定されているため現段階では断言し難く、今後の資料増加による再検討を待つこととしたい。

③銭貨別出土傾向

最後に、県下出土の六道銭について、出土銭貨のセット関係を検討しておきたい。今回確認された六道銭には銅銭・鉄銭とも含まれ、副葬に際して特にある種類のものを選んで納めたというような気配はみられない。こうしたことから、副葬された銭貨の組み合せは、当時の貨幣流通の在り方を示す一括資料として活用できるものと考えられる。又、桜木晋一氏は九州地方での六道銭の銭貨組み合せをもとに、銭貨流通の量的変化の在り方をセリエーション分析し、古寛永（初鋳1636年）・文銭（初鋳1668年）・新寛永（初鋳1697年）・寛永鉄銭（初鋳1739年）の流通市場での交替が漸移的に進み、寛永鉄銭が出現する18世紀中期には古寛永と文銭は殆ど姿を消す（桜木1990･1991）ことを指摘している。（註４）又､関東においてもほぼ同様の結果が報告されている。（鈴木1988）（註５）こうした視点に沿って、以下では高知県下出土の六道銭についても銭貨のセット関係を検討し、その年代的変化を追うこととする。

再び表６－１～４に戻り、埋葬年代別に出土銭貨の内容を見てみたい。資料数が限定されるが、ここからは一定の傾向を看取することはできると思われる。まず、17世紀後半の田村遺跡B4SK430・530・565出土資料は全て古寛永で占められる（表６－１）。次に、18世紀前半以降に入ると新寛永が出現し平均してその比率が60％を超すまでになるが、古寛永・文銭は依然残る。ただ、この段階の組成内容には遺構間で差があり、埋葬年代1715年の小高坂山森田家ＳＫ１では古寛永の残る比率がより高く、埋葬年代1744年の森田家ＳＫ３では古寛永と新寛永とが同比率程度である。一方、田村遺跡B4SK554･556･F5SK5002には古寛永･文銭は残らないなどの結果が出ており、埋葬時期や遺跡によって幾分かの差が出るようである。続く18世紀中葉以降では、新寛永と鉄銭を主体として構成され、一部に古寛永の残る事例を認める以外には、古寛永と文銭は殆ど残らない。

この様に、古寛永が鋳造中止年代以降もしばらく流通し18世紀中葉頃まで新寛永と共存するというデータ結果は、九州・関東での報告結果とほぼ大差が無く、土佐においても古寛永から新寛永への変化が漸移的なものであったとみることができる。又、城下周辺、農村部の各遺跡ともその変化形態に大きな差異は認められず、階層差や地域差を越えた一般的な貨幣流通の在り方を示しているものと思われる。

（２）その他の副葬遺物

六道銭に次いで、多く認められるのは煙管であり、中には小高坂山森田家墓所ＳＫ４・ＳＫ６の様に外面に布の付着を認め、布に包んで棺内に納められた様子を示すものがある。城下町周辺・農村と

もに煙管の副葬が見られ始めるのは18世紀以降からで、小高坂山墓地では1715年墓碑銘をもつ小高坂山森田家墓所ＳＫ１を初現とする。小籠遺跡、田村遺跡などの農村部ではその副葬が一般化するのは18世紀後半以降からである。

次に多く見られるのは小杯、碗、猪口などの飲食器である。飲食器の副葬は田村遺跡に特に多くみられ、17世紀後半から18世紀前半以降は肥前産磁器や在地産陶磁器による碗・小杯の出土が増える。特に19世紀以降は在地の能茶山産磁器の中碗や小杯、肥前系の笹文小杯など日用雑器ランクの飲食器が高い割合で副葬されている。又、近代以降に古銭の副葬が途絶えた後も、碗・小杯の副葬の習慣は依然残っており、田村遺跡B1SK113・114では、酸化コバルトを用いた肥前系磁器や在地系陶器の碗類が出土している。

一方、城下周辺に立地する三ノ丸墓地の森田家墓地では、同時代の墓坑においても先の田村遺跡に比較して碗・小杯の出土は認めにくく、六道銭と煙管のみの組み合せが多かった。城下側の事例が僅少なため、こういった違いが、地域間の風習や宗派上の違いによるものなのか、階層差が反映したものかは特定し難い。今後、城下側の資料の増加を待って再検討したい。

この他に例外的なものとして、小児墓とみられる田村遺跡Ｂ４区のB4SK534で玩具と思われるミニチュアの白磁碗、森田家墓地ＳＫ８から玉と櫛が出土している。このうち櫛については、被葬者の装身具であった可能性もある。

この様に、土佐では六道銭の他、喫煙具と飲食器を副葬する事例が目立った。県外の報告をみると、関西では土師器皿・磁器碗・漆器椀・磁器小杯など食器類の他、数珠玉・剃刀・鋏・紅皿・合子・簪、他に階層性を示すとみられる刀子・太刀や小児墓に伴う鳩笛・土人形等の玩具類が。九州でも六道銭・煙管・碗・皿・小杯の他に数珠・鋏・毛抜き・剃刀・櫛・紅皿・土人形など多様な副葬品がみられる。これら県外の事例については、上級武士層の副葬品も含まれているため直接的な比較はし難い。しかし六道銭と煙管のみ、或いは、六道銭・煙管・飯碗・酒杯の基本的な組み合せからなる副葬形態は、土佐の風俗的な側面も示しているともみえ興味深い。

おわりに

今回は小高坂山墓地の成果に県下の近世墓報告事例を加え、現在までの近世墓資料の集約を行った。土佐の近世墓の考古学的な発掘調査報告がなされた1995年の『小籠遺跡Ｉ』以来、その報告数は序々に増えてきているが、まだ数遺跡に留まり、県下の近世墓の実態を明らかにできる段階には至っていない。始めに触れた様に、近世墓は法制的・習俗的な面での制約から、墓地の開発化と移転に際してもなかなか発掘調査に至り得ない。特に今回の高知市三の丸の小高坂山墓地の移転に際しても、500基以上に及ぶ近世墓のうち、その大部分が未調査のまま移転されるという状況であり、まさに近世墓調査の向かう厳しい局面を浮き彫りにしたともいえる。考古資料としての近世墓の重要性を再認識し、近世遺跡及び近世墓の記録保存への一層の取り組みを望むとともに、今後の資料集積に期待したい。

〔謝辞〕
本稿をまとめるにあたっては、出土銭貨の鑑定について泉幸代氏、県下の近世墓について岡本桂典・出原恵三・吉成承三氏より御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

〔註〕
1）豆谷浩之「大坂の近世墓」『関西近世考古学研究Ⅵ』1998年
2）埋葬形態の地域差や階層差については『燧袋』文政５年の項に「同夜仮葬仕候様被仰付ニ付当村松ノ前山ニ葬ル当地之風儀甚薄葬ニ而身柄抜群宜キ家座棺其他は寝棺ニテ葬ル由此寝棺之製ワツカ長三尺計之箱ニ而足をかゝめテ横ニ寝る様ニ納ル由也仍而別ニ厚キ棺材をモトメ臥棺ヲ製ス尤衣衾等持合ノモノヲ用ル故高知ニ而作ル棺ヨリモ大キク且頭ノ方ヲ高ク作ル 棺制如此ツクル本式ナリ」との記述がある。上記述は著者である楠瀬大枝が親族の葬儀のために高知城下から須崎の津浦に向かった時、村の葬儀について見聞した内容を表したものである。
3）桜木晋一「前畑遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道銭」『前畑遺跡－第６分冊』鹿児島県教育委員会1990年
4）桜木晋一「前畑遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道銭」『前畑遺跡－第６分冊』鹿児島県教育委員会1990年
桜木晋一「九州地域における中・近世の銭貨流通」『九州文化史研究所紀要36』1991年
5）鈴木公雄「出土六道銭の組合わせからみた江戸時代前期の銅銭流通」『社会経済史学　第53巻第６号』1988年

〔参考文献〕
泉幸代「小籠遺跡出土の六道銭について」『小籠遺跡Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター 1995年
出原恵三「近世墓について」『小籠遺跡Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター 1995年
岡本桂典「土佐十和村の墓標について」『立正史学　第59号』1986年
櫻木晋一「九州における近世墓研究と六道銭」『関西近世考古学研究Ⅵ』1998年
加納梓「副葬品について」『自證院遺跡』東京都新宿区教育委員会1987年
出原恵三・泉幸代・藤方正治『小籠遺跡Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター 1995年
吉成承三・大崎文彦・松田知彦『姫野々土居跡』葉山村教育委員会2000年
松村信博・山本純代『奥谷南遺跡Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター 1999年
出原恵三『林田遺跡Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター 2002年
泉幸代・浜田恵子・出原恵三・宮地啓介「Ｂ４区」「Ｅ２区」「Ｆ５区」『田村遺跡群Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター 2004年
『土佐藩法制史料憲章簿』「里正之部巻ノ一」高知県立図書館1982年

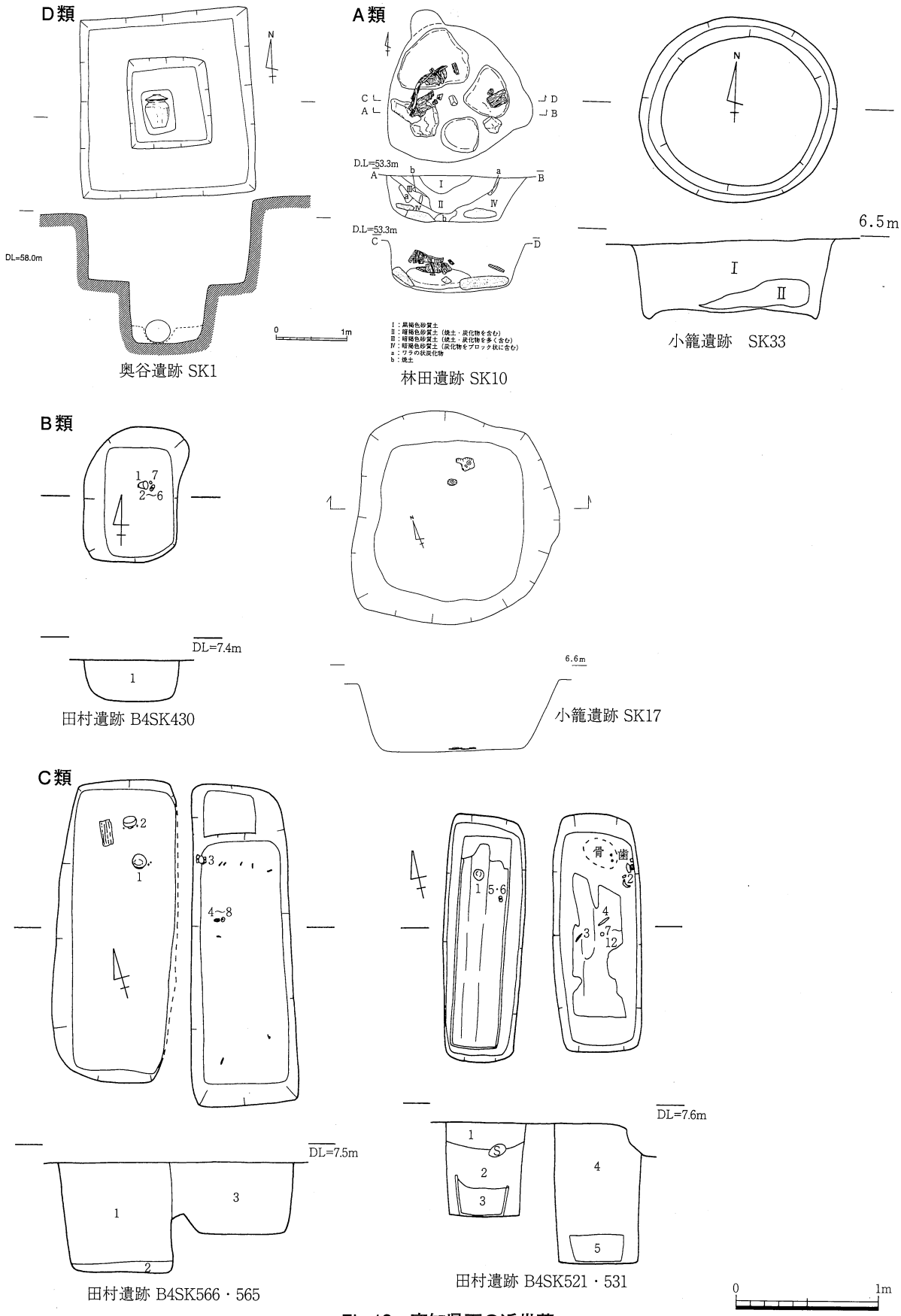


Fig.13　高知県下の近世墓

表5　近世墓坑一覧

遺跡名	遺構番号	時期分類	年代	形態分類	形態・構造	平面規模（cm）	副葬品							他の出土遺物	特徴（A～S夫婦墓）	年代推定の根拠・備考
							六道銭（枚）	煙管	碗	小杯	猪口	皿	その他			
小高坂山森田家墓所	SK1	Ⅱ	18C前葉	C	長方形	180×55	6	○						人骨	A（男）	墓碑銘1715年
小高坂山森田家墓所	SK2	Ⅱ	18C前半	C	長方形	144×46									A（女）	没年1738年
小高坂山森田家墓所	SK3	Ⅱ	18C前半	C	長方形	170×50	6	○						釘、人骨	B（男）	墓碑銘1744年
小高坂山森田家墓所	SK4	Ⅱ	18C前半	C	長方形	158×50		○		○				釘	B（女）	墓碑銘1743年
小高坂山森田家墓所	SK5		不明	A	円形	65×60								釘		
小高坂山森田家墓所	SK6		18C以降	C	長方形	190×53	6	○								新寛永（1697年以降）
小高坂山森田家墓所	SK7	Ⅲ	19C前葉	C	長方形	約200×60									C（男）	墓標銘1803年
小高坂山森田家墓所	SK8	Ⅲ	19C前葉	C	長方形	185×44	3	○					櫛、玉		C（女）	没年1809年
小高坂山森田家墓所	SK9	Ⅲ	19C前葉以降	A'	小型円形	46×46	4							甕、棺蓋、人骨	幼児墓・甕棺	切り合い関係
小高坂山森田家墓所	SK10	Ⅱ	18C前葉	A	円形	100×72・床70×60										墓標銘1725年
小高坂山坂本家墓所	八郎兵衛直益墓	Ⅲ	18C後葉	C	長方形・炭化物多	－		○							D（男）	墓標銘1779年
小高坂山坂本家墓所	八郎兵衛直益妻墓	Ⅲ	18C末	C	長方形・炭化物多	－		○							D（女）	墓標銘1792年
小高坂山前大濱家墓所	八郎兵衛墓	Ⅱ	18C前半	C	長方形・炭化物多	－									E（男）	墓標銘1738年
小高坂山前大濱家墓所	八郎兵衛妻墓	Ⅲ	18C中葉	C	長方形・炭化物多	－								釘	E（女）	墓標銘1759年
小高坂山三の丸寿性院墓所	寿性院墓	Ⅰ	17C後半	Cか	長方形か・炭化物多・漆喰等を棺周囲に埋める	－	不明		色絵磁器○					木棺・人骨		墓標銘1661年
奥谷南	SK1	Ⅰ	17C中葉	D	方形・底部二段堀	最下部120×120								甕棺、鉢（棺蓋）、人骨		墓誌銘1652年、乳児墓・甕棺
奥谷南	SK2	Ⅰ	17C中葉か	D	長方形・底部二段堀	最下部180×80										SK1との位置関係
奥谷南	SK3	Ⅱ	18C前半	C	長方形	200×80	6（布付着）				○			釘		
姫野々土居	SK9	Ⅰ	17C後半	A	円形	100×100							土師器杯	人骨・歯		SK10・11との位置関係
姫野々土居	SK11	Ⅰ	17C後半	A	円形	80×80				○		○			F	肥前内野山窯皿
姫野々土居	SK10	Ⅰ	17C後半	A	円形	70×70						○			F	肥前内野山窯皿
小籠Ⅰ区	SK1		17C末～18C	A	円形	140×140										位置関係
小籠Ⅰ区	SK13		17C末～18C	A	円形（桶痕有り）	170×170						○			G	肥前陶器
小籠Ⅰ区	SK18		17C末～18C	B	隅丸長方形・床面に礫	208×194									G	位置関係
小籠Ⅰ区	SK33		18C	A	円形（桶痕有り）	136×130	2							人骨		新寛永（1697年以降）
小籠Ⅰ区	SK24		17C末～18C	A	不整形・床面に粘土と礫	210×165									H	位置関係
小籠Ⅰ区	SK23	Ⅰ～Ⅱ	17C後葉～18C前半	A	不整円形	110×170									H	肥前京焼風陶器
小籠Ⅰ区	SK10		17C末～18C	A	楕円形	220×150										位置関係
小籠Ⅰ区	SK12		17C末～18C	B	隅丸長方形	216×104										位置関係
小籠Ⅰ区	SK15		17C末～18C	B	隅丸長方形	210×122										位置関係
小籠Ⅰ区	SK18		17C末～18C	B	隅丸長方形・床面に礫	208×194										位置関係
小籠Ⅰ区	SK22		17C末～18C	B	隅丸長方形	208×190										位置関係
小籠Ⅰ区	SK19		17C末～18C	B	不整円形	154×146									I	位置関係
小籠Ⅰ区	SK17		18C	B	隅丸方形	150×140	5							木棺、歯	I	不旧手銭（1726年以降）・位置関係

表5　近世墓坑一覧

遺跡名	遺構番号	時期分類	年代	形態分類	形態・構造	平面規模（cm）	副葬品							他の出土遺物	特徴（A～S夫婦墓）	年代推定の根拠・備考
							六道銭（枚）	煙管	碗	小杯	猪口	皿	その他			
小籠Ⅰ区	SK20		17C末～18C	C	長方形	160×66								唐津系灰釉陶器		位置関係
小籠Ⅰ区	SK26		17C末～18C	C	長方形	248×102								肥前磁器		位置関係
小籠Ⅰ区	SK27		17C末～18C	B	長方形	194×106										位置関係
小籠Ⅰ区	SK28		17C末～18C	B	長方形	残154×118										位置関係
小籠Ⅰ区	SK29		17C末～18C	B	長方形	178×90										位置関係
小籠Ⅰ区	SK30		17C末～18C	B	長方形	168×112										位置関係
小籠Ⅰ区	SK31		17C末～18C	B	長方形	残140×138										位置関係
小籠Ⅰ区	SK32		17C末～18C	B	長方形	不明×106										位置関係
小籠Ⅰ区	SK34		18C	C	長方形	140×60	4永楽通宝							木棺、釘、人骨		新寛永（1697年以降）・位置関係
田村B1区	B1SK118	Ⅲ	19C中葉	C	長方形	186×56			○	○				木棺、釘	J	能茶山産磁器
田村B1区	B1SK117	Ⅲ	19C中葉	C	長方形	180×64	－	－	－	－	－	－	－		J	位置関係・削平され遺物不明
田村B1区	B1SK144	Ⅲ	19C前半~中葉	C	長方形	168×60	1	○	○					人骨、釘		肥前系磁器
田村B1区	B1SK152	Ⅲ	19C中葉か	C	長方形	残117×残44	－	－	－	－	－	－	－			床面まで削平され遺物不明
田村B4区	B4SK430	Ⅰ	17C後半	B	長方形	96×66	6			○					K	肥前磁器
田村B4区	B4SK530	Ⅰ	17C後半	C	長方形	186×72	6	○					かわらけ	人骨	K	SK430との位置関係
田村B4区	B4SK565	Ⅰ	17C後半	C	長方形	227×70	6						かわらけ	木棺、釘	L	SK566との位置関係
田村B4区	B4SK566	Ⅰ	17C後半	C	長方形	212×85			○					木棺、歯	L	肥前磁器
田村B4区	B4SK554	Ⅱ	17C末～18C前半	C	長方形	178×116	4							木棺、人骨	M	SK566との位置関係、新寛永（1697年以降）
田村B4区	B4SK556	Ⅱ	17C末～18C前半	C	長方形	192×84	2（布付着）						かわらけ	木棺	M	SK566との位置関係、新寛永（1697年以降）
田村B4区	B4SK517	Ⅲ	19C	C	長方形	183×52	5	○	○	○				人骨	N	肥前系磁器
田村B4区	B4SK522	Ⅲ	19C	C	長方形	170×41				○				釘、人骨	N	肥前系磁器
田村B4区	B4SK520	Ⅲ	19C	C	長方形	170×54	5～6鉄銭			○				釘、歯		肥前系磁器
田村B4区	B4SK531	Ⅲ	18C後葉～19C	C	長方形	168×62	6	○	○					木棺、歯、人骨	O	京信楽系陶器、肥前磁器
田村B4区	B4SK521	Ⅲ	19C	C	長方形	171×57	5	○		○				木棺	O	肥前系磁器
田村B4区	B4SK523		18C	C	長方形	168×50		○		○				釘、人骨	P	肥前磁器
田村B4区	B4SK536		18C	C	長方形	残130×残38	－	－	－	－	－	－	－		P	床面まで削平され遺物不明
田村B4区	B4SK529	Ⅲ	18C末～19C	C	長方形	172×60	5～6鉄銭	○	○	○				木棺、人骨	Q	瀬戸美濃産陶胎染付
田村B4区	B4SK525	Ⅲ	19C	C	長方形	168×48	6		○	○				木棺、釘、人骨	Q	肥前系磁器
田村B4区	B4SK528	Ⅲ	19C	C	長方形	189×50		○						釘	R	周辺墓坑との位置関係
田村B4区	B4SK527	Ⅲ	19C	C	長方形	142×56	6	○	○	○				釘	R	能茶山産磁器
田村B4区	B4SK534		18～19C	B'	長方形	68×44							ミニチュア碗		幼児墓	
田村B4区	B4SK535	Ⅲ	19C中葉	C	長方形	188×59	2	○	○	○						能茶山産磁器
田村B4区	B4SK538		不明	C	長方形	138×41	－	－	－	－	－	－	－			床面まで削平され遺物不明
田村E2区	E2SK268	Ⅲ	19C	C	長方形	不明				○				木棺、釘	S	肥前系磁器
田村E2区	E2SK270	Ⅲ	19C		長方形	170×48				○					S	在地系陶器
田村F5区	F5SK 5001		18C以降	B	短長方形	139×98	6							木棺、釘、歯		新寛永（1697年以降）
田村F5区	F5SK 5002	Ⅱ	18C前半	A	円形	87×69	7？鉄銭含む				○					肥前磁器・鉄銭（1739年以降）
田村F5区	F5SK 5003	Ⅲ	19C	C	長方形	187×61	14、鉄銭含む	○					かわらけ			煙管・鉄銭（1739年以降）
田村F5区	F5SK 5004		18C以降	A	円形	107×105	1									新寛永（1697年以降）

表5　近世墓坑一覧

遺跡名	遺構番号	時期分類	年代	形態分類	形態・構造	平面規模（cm）	副葬品							他の出土遺物	特徴（A～S夫婦墓）	年代推定の根拠・備考
							六道銭（枚）	煙管	碗	小杯	猪口	Ⅲ	その他			
田村F5区	F5SK 5006		不明	A	楕円形											
田村F5区	F5SK 5013		18C以降	C	長方形	185×70	7	○					かわらけ	木棺		新寛永（1697年以降）
田村F5区	F5SK 5014		18C	C	長方形	残141×56			○					木棺、釘		肥前磁器
田村F5区	F5SK 5015	Ⅱ	18C前半	B	長方形	112×62	5		○					木棺		肥前産陶胎染付
田村F5区	F5SK 5016A		18C以降	C	長方形	不明	6									新寛永（1697年以降）
田村F5区	F5SK 5016B		18C以降	C	長方形	不明	4									新寛永（1697年以降）
田村F5区	F5SK 5017		18C以降	C	長方形	123×52	3							釘		新寛永（1697年以降）
田村F5区	F5SK 5018		不明	C	長方形	180×59										
田村F5区	F5SK 5021		不明	A	楕円形	127×92										
田村F5区	F5SK 5023	Ⅲ	19C	C	長方形	186×51				○						在地系陶器
田村F5区	F5SK 5024		不明	C	長方形	152×68										
田村F5区	F5SK 5026	Ⅲ	18C後半	C	長方形	202×53	不明、鉄銭含む	○	○							肥前磁器・鉄銭（1739年以降）
田村F5区	F5SK 5027	Ⅲ	19C	C	長方形	178×50	5			○						肥前系磁器
田村F5区	F5SK 5028	Ⅲ	19C	C	長方形	138×57	1 鉄銭			○						肥前系磁器
田村F5区	F5SK 5029		不明	C	長方形	不明										
田村F5区	F5SK 5030	Ⅲ	18C後半	C	長方形	144×59	5 鉄銭	○	○					釘		京都系陶器
田村F5区	F5SK 5031		18～19C	C	長方形	201×54				○				釘		在地系陶器
田村F5区	F5SK 5033		18～19C	C	長方形	166×66	6	○	○	○				木棺、釘		在地系陶器
田村F5区	F5SK 5035	Ⅲ	19C	－	不明	不明	6＋鉄銭			○						肥前系磁器
田村F5区	F5SK 5036		不明	－	不明	不明										
田村F5区	F5SK 5045		18C	B	長方形	124×68	6							釘		貨銭組み合せから年代推定
林田	SK10		不明	A	円形・焼土含・床面に大型暦	100×100	5							木棺・鉄釘		

表6－1　Ⅰ期（17C後半）

	古寛永	文銭	新寛永	鉄銭	不明、その他	計	副葬年代
田村B4SK430	6					6	17C後半
田村B4SK530	6					6	17C後半
田村B4SK565	6					6	17C後半～18C前半
計	18（100%）	0（0%）	0（0%）	0（0%）	0（0%）	18（100%）	

表6－2　Ⅱ期（18C前半）

	古寛永	文銭	新寛永	鉄銭	不明、その他	計	副葬年代
森田SK1	4		2			6	18C前葉
森田SK3	3		3			6	18C前半
奥谷南SK3	1	2	3			6	18C前半
田村B4SK554			4			4	17C末～18C前半
田村B4SK556			2			2	17C末～18C前半
田村F5SK5002			5	2		7	18C前半
田村F5SK5015		1	4			5	18C前半
計	8（22%）	3（8%）	23（64%）	2（6%）	0（0%）	36（100%）	

表6－3　Ⅲ期（18C後半～19C）

	古寛永	文銭	新寛永	鉄銭	不明、その他	計	副葬年代
田村F5SK5026			3	2～3		5～6	18C中葉～後半
田村F5SK5030				5		5	18C後半
田村F5SK5003	1		13			14	18C中葉以降
田村B4SK535	2					2	19C中葉
田村F5SK5035	3		3			6	19C
田村F5SK5027	2		3			5	19C
森田SK8		1	2			3	19C前葉
森田SK9			2	1	1	4	19C
田村B1SK144			1			1	19C
田村B4SK521			5			5	19C
田村B4SK527			6			6	19C
田村B4SK525			5	1		6	19C
田村B4SK531			5	1		6	18C後葉～19C
田村B4SK517			2	3		5	19C
田村B4SK520				5～6		5～6	19C
田村B4SK529				6		6	19C
田村F5SK5028				1		1	19C
計	8（9%）	1（1%）	50（58%）	約26（31%）	1（1%）	約86（100%）	

表6－4　Ⅱ～Ⅲ期

	古寛永	文銭	新寛永	鉄銭	不明、その他	計	副葬年代
田村F5SK5016A	3	1	1		1	6	18C以降
小籠SK34	1	1	1		永楽通宝1	4	18C以降
田村F5SK5001	2		4			6	18C
田村F5SK5013	1		6			7	18C以降
田村F5SK5017	1		2			3	18C以降
田村F5SK5033	1		6			7	18C以降
田村F5SK5045	2		4			6	18C
小籠SK17		2	3			5	18C以降
田村F5SK5004		1				1	18C以降
田村F5SK5016B		1	3			4	18C以降
森田SK6			6			6	18C以降
小籠SK33			2			2	18C以降
	11（19%）	6（11%）	38（67%）	0（0%）	2（6%）	57（100%）	

写 真 図 版

Ⅰ区全景（西より）

墓標A

墓標E（前）・C（後）

墓標D

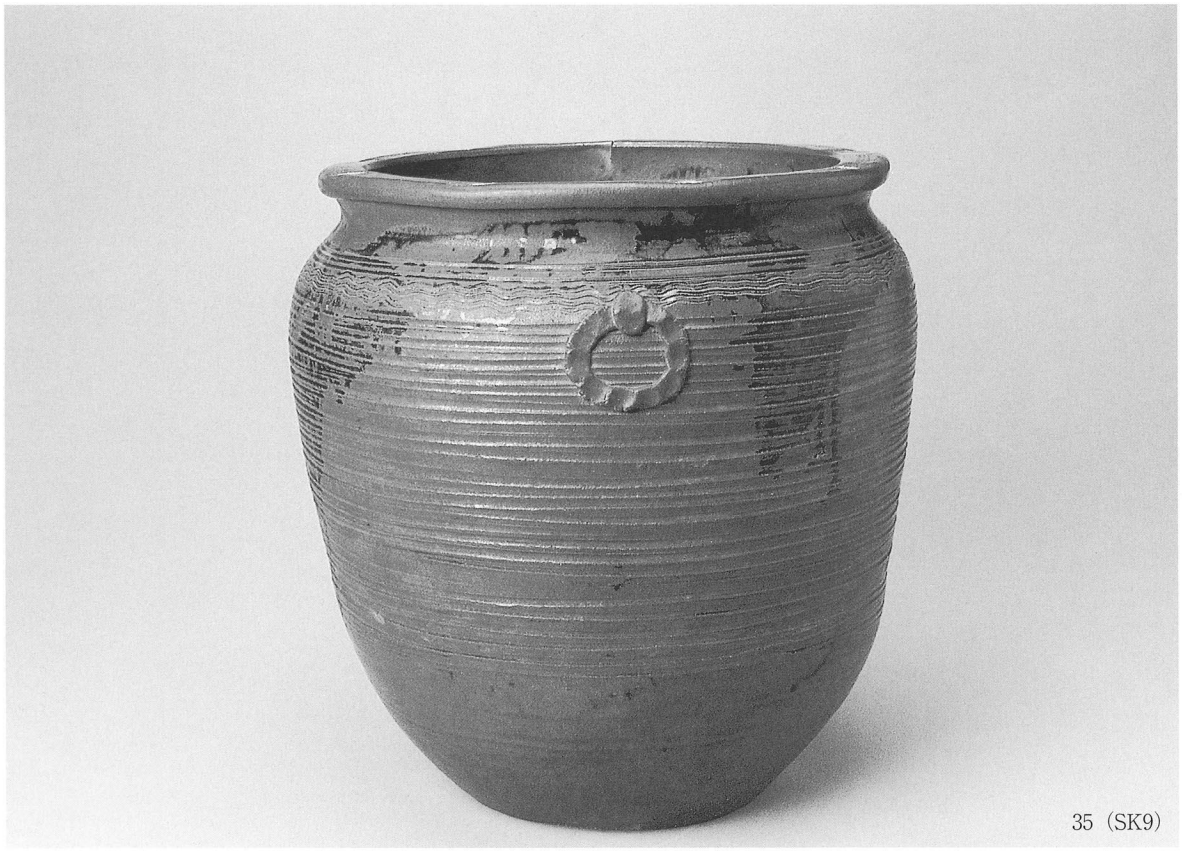
墓標B

ＳＫ４　遺物出土状況

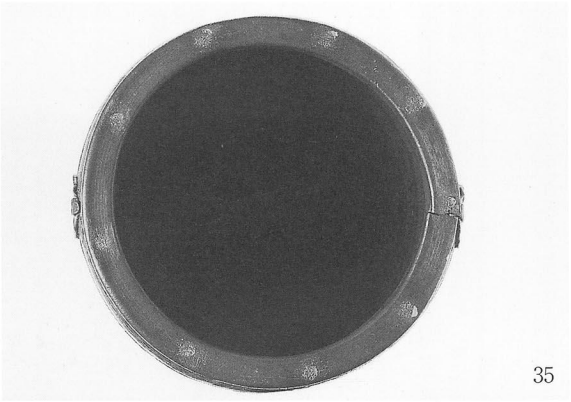
ＳＫ１　六道銭・人骨出土状況

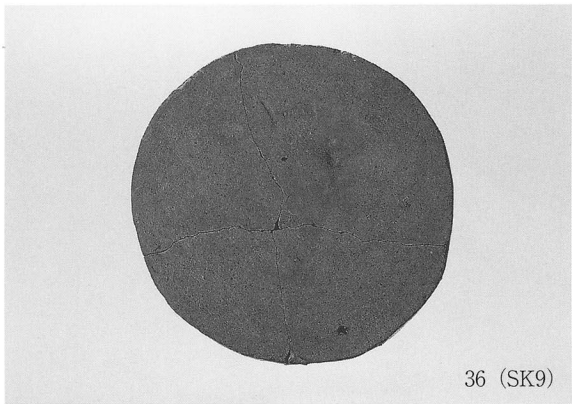
ＳＫ９　甕棺出土状況（東より）

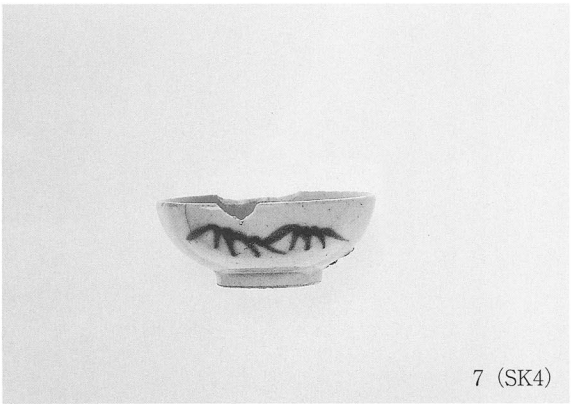
ＳＫ９　出土人骨


35（SK9）

35

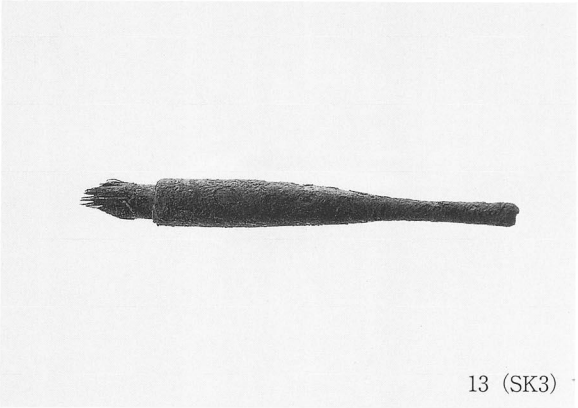

35

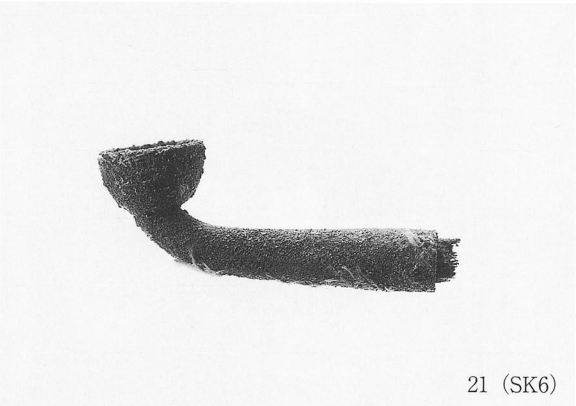

36（SK9）


7（SK4）

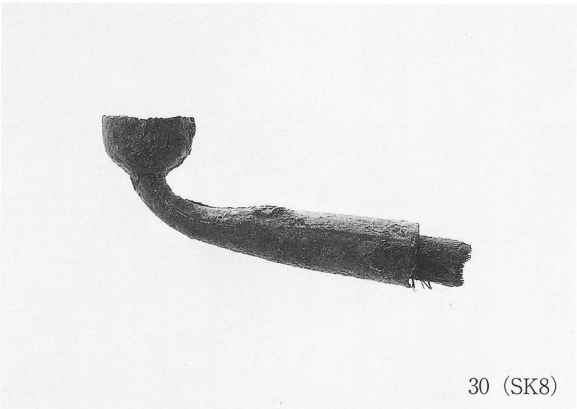
ＳＫ４・９　出土遺物

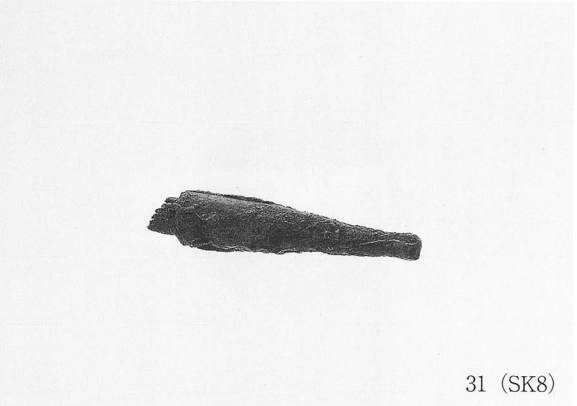
12（SK3）

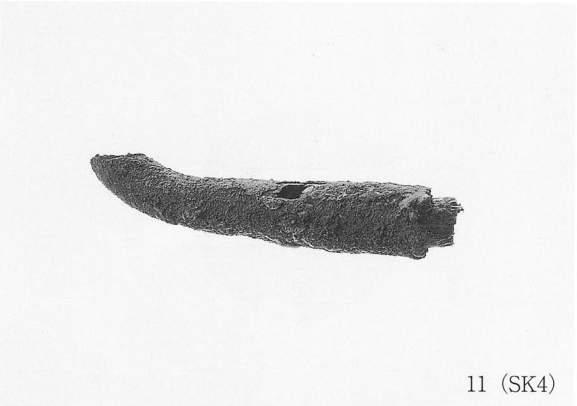

13（SK3）

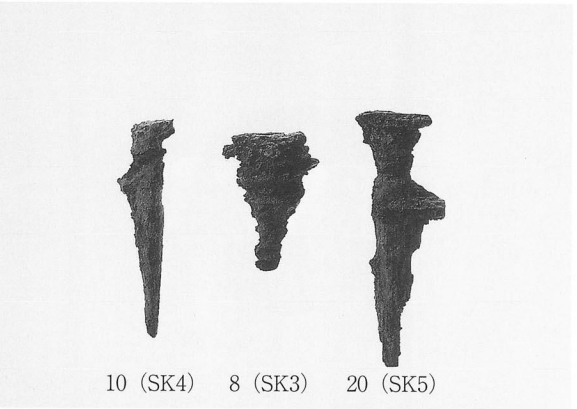

21（SK6）

22（SK6）


30（SK8）


31（SK8）


11（SK4）


10（SK4）　8（SK3）　20（SK5）

ＳＫ３～６・８　出土遺物

SK8

1（SK1）

2（SK1）

3（SK1）

4（SK1）

5（SK1）

15（SK3）

24（SK6）

ＳＫ１・３・６・８　出土遺物

高知市森田久右衛門墓所出土の近世幼児骨

松下孝幸*

【キーワード】：高知県、近世人骨、幼児骨

はじめに

高知県高知市三ノ丸前山に所在する森田久右衛門墓所の試掘調査が2003年（平成15年）３月におこなわれ、１基の甕棺から比較的保存状態良好な人骨が１体検出された。試掘調査がおこなわれた森田家は近世土佐藩窯である尾戸焼の製作を代々にわたって勤めており、この墓所には初代陶工森田久右衛門や第４代陶工の森田弥源次の他10基の近世墓が確認されている。

人骨が検出された墓壙は第４代陶工森田弥源次の妻の墓壙を切る状況で検出されており、墓壙内には高さ33.6cmの鉄釉陶器甕が埋納されており、その中から保存良好な1歳半の幼児骨が検出された。この幼児骨には古銭4枚が副葬されており、金箔状の細片も認められている。

今回検出されたのは幼児骨のみであったが、四肢骨の保存状態が良好であり、四肢骨の計測をおこなうことができたし、年齢も推定することが可能だったので、その結果を報告しておきたい。

資　料

今回人骨が出土した墓坑（ＳＫ９）は平面プランが円形で、径46cm、深さ46cmで、この墓坑内には胴部最大径32cm、高さ33.6cmの鉄釉陶器甕が埋納されており、この甕棺から人骨が１体検出された。この人骨は所見の項で詳述しているように1歳半ぐらいの幼児骨で、共伴した古銭や甕の考古学的所見から、18世紀末から19世紀前葉頃の近世人骨と推測されている。

計測方法は、基本的にはMartin-Saller（1957）によったが、一部は筆者が独自に項目を付け加えた。なお、年齢区分は表１に示すとおりである。

表１　年齢区分（Table 1. Divisionofage）

	年齢区分	年　　齢
未成人	乳児	１歳未満
	幼児	１歳～５歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	６歳～15歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16歳～20歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21歳～39歳（40歳未満）
	熟年	40歳～59歳（60歳未満）
	老年	60歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

* Takayuki MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ケ浜遺跡・人類学ミュ-ジアム〕

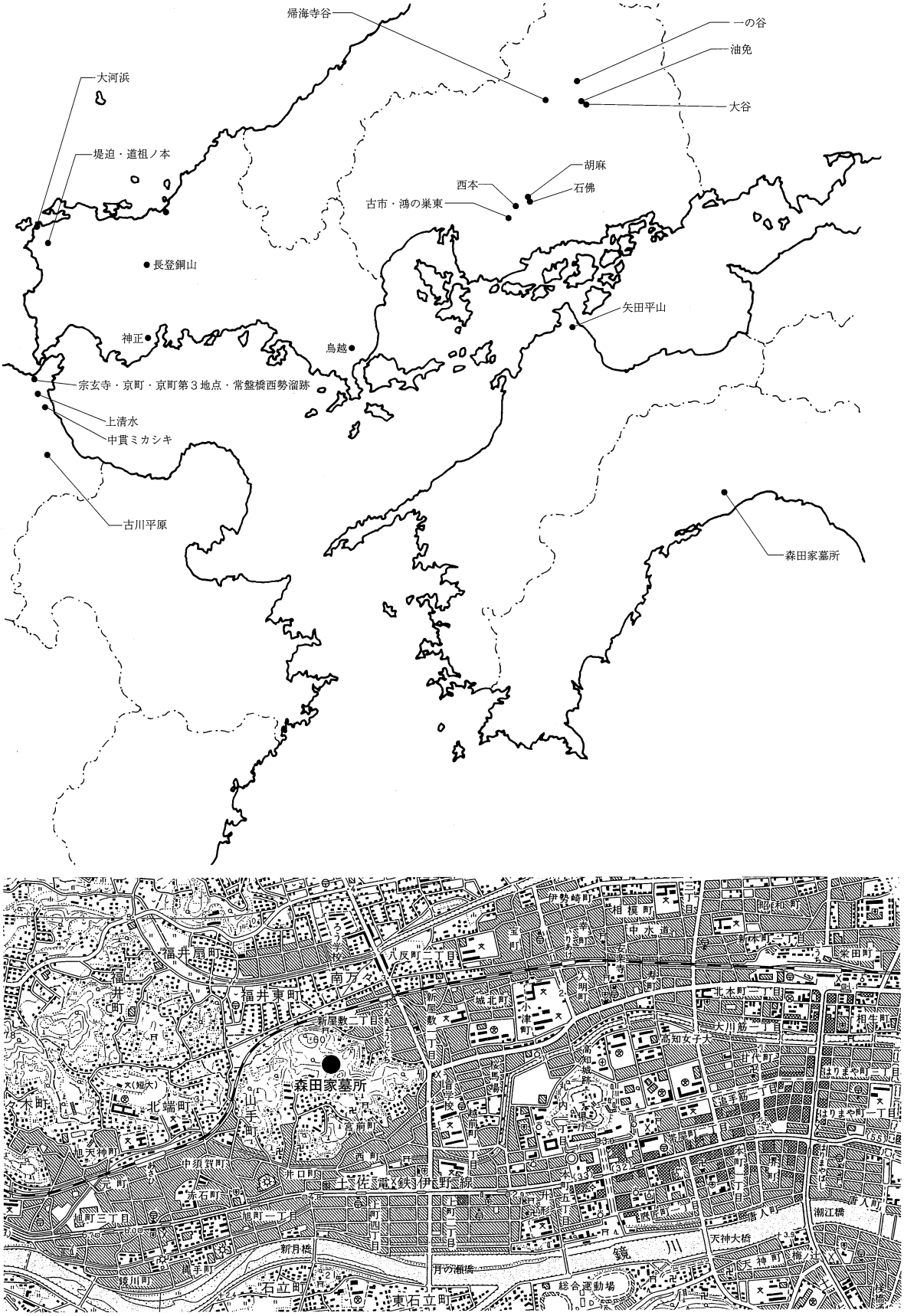


図１　遺跡の位置（1/25,000）

(Fig. 1 Location of the graves of the Morita family, Kochi City, Kochi Prefecture)

所　見

残存部分は図２に示し、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

１．頭蓋

頭蓋の保存状態は四肢骨に比べると良くない。

（１）脳頭蓋

大部分が失われており、残っていたのは右側頭頂骨、右側側頭骨などである。

（２）顔面頭蓋

顔面頭蓋も右側半が残っていたに過ぎない。眼窩はかなり大きく、上顔高は41㎜で、かなり低い。下顎骨は左側の下顎枝が欠損している以外はよく残っている。

２．歯

上顎骨と下顎骨には乳歯が釘植している。残存歯と歯槽の状態を歯式で示した。

m_2m_1 ○ i_2i_1	i_1i_2 ○ m_1m_2
m_2m_1 ○ i_2i_1	i_1i_2 ○ m_1m_2

〔/：不明（破損）　○：歯槽開存　●：歯槽閉鎖〕

下顎の左側第一乳臼歯と上顎左側第一乳臼歯は萌出しているが、下顎の右側第一乳臼歯と第二乳臼歯、上顎の右側の第一乳臼歯と第二乳臼歯および上顎の左側第二乳臼歯はまだ萌出していない。また、乳犬歯は1本も遺存していなかった。また、板状の上顎左側の第一大臼歯冠が残っていた。

３．四肢骨

（１）上肢骨

上肢骨は、肩甲骨（左右）、鎖骨（左右）、上腕骨（左右）、橈骨（左右）、尺骨（左右）が残存していたが、橈骨と尺骨の保存状態は他の上肢骨に比べてあまりよくない。

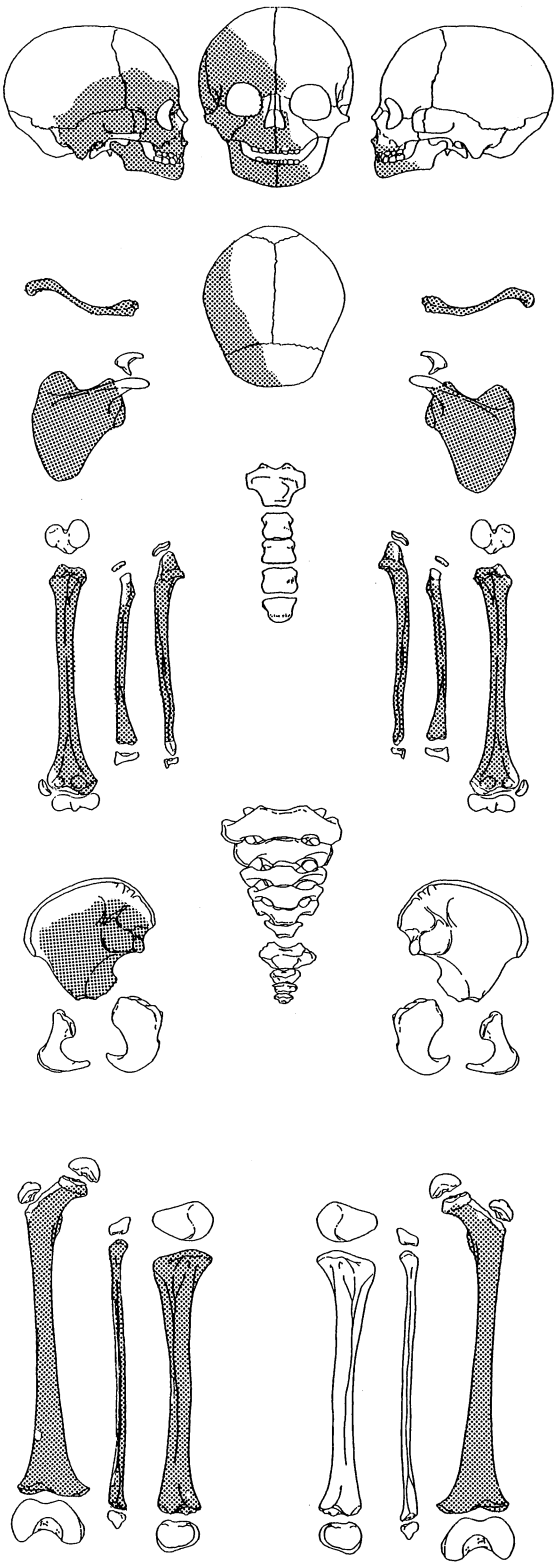


図２　森田家墓所ＳＫ－９（幼児）
人骨の残存部、アミかけ部分
(Fig. 2 Regions of preservation of the skelton. Shaded areas are preserved.)

（2）下肢骨

下肢骨は、右側の腸骨、左右の大腿骨、右側の脛骨と右側の腓骨が残存していたが、左側の腸骨、左右の坐骨と恥骨、左側の脛骨と腓骨がまったく残存していなかった。

4．躯幹骨

椎骨は大部分の椎弓と18個の椎体、肋骨は23本（12番の肋骨が１本欠損）残っていた。

5．年齢の推定

まず、乳歯の萌出状態から年齢を推定してみたい。上下両顎の左側第一乳臼歯はすでに萌出している。藤田によれば、上顎の第一乳臼歯の萌出時期の平均値は男子で530日、女子で497日で、下顎の場合は男子で531日、女子で521日である。

次いで、四肢骨の長さで年齢を推定してみると、表２は上腕骨の計測値の比較表であるが、骨体最大長は1.5歳と推定されている山口県豊浦郡豊北町の大河浜２号人骨とほとんど大差なく、骨体周などの計測値もほぼ一致している。表３は大腿骨の比較表である。本例では骨体最大長が計測できないが、復元値を求めてみると約124mm程度になり、この値は大河浜２号人骨の121mmに近い。その他中央周などの計測値も大河浜２号人骨の計測値にかなり近い。表4は脛骨の比較表である。表４からも各計測値が大河浜２号人骨に近いことがわかる。表にはしていないが、橈骨や尺骨の計測値も大河浜２号人骨の計測値に近く、本例の四肢骨は各骨とも大河浜２号人骨に酷似している。四肢骨ばかりではなく、乳歯の萌出状況も本例に近く、本例は全身骨でこの大河浜２号人骨に近いのである。従って本例の年齢はこの大河浜２号人骨とほぼ同じ位と考えて大過ないものと思われ、年齢を1.5歳前後と推定した。

表２　上腕骨計測値（Table 2. Comparison of measurements and indices of humeri）

			京町 KB－7 9ヶ月 近世 福岡県	京町 DB－244－2 1.5歳 近世 福岡県	森田家墓所 SK－9 近世 高知県	大河浜 2 1.5歳 近世 山口県	京町 KB－312 2歳 近世 福岡県	京町 KB－281 3歳 近世 福岡県	京町 KB－303 3歳 近世 福岡県
1.	骨体最大長	（右）	88	－	101	100	－	－	－
		（左）	89	－	－	100	－	118	125
2.	骨体中央最大径	（右）	9	12	9	10	－	－	－
		（左）	9	12	10	10	12	13	11
3.	骨体中央最小径	（右）	7	9	8	8	－	－	－
		（左）	7	9	7	8	11	11	10
4.	骨体中央周	（右）	26	35	29	30	－	－	－
		（左）	26	35	29	30	38	40	35
5.	骨体上端幅	（右）	20	－	19	17	－	－	－
		（左）	21	－	－	17	25	25	24
6.	骨体下端幅	（右）	23	24	－	22	－	－	28
		（左）	24	－	－	－	－	29	29
7.	骨体最小周	（右）	26	31	28	28	－	－	－
		（左）	26	32	28	29	－	38	34
3/2	骨体中央断面示数	（右）	77.78	75.00	88.89	80.00	－	－	－
		（左）	77.78	75.00	70.00	80.00	91.67	84.62	90.91
7/1	長厚示数	（右）	29.55	－	27.72	28.00	－	－	－
		（左）	29.21	－	－	29.00	－	32.20	27.20

表３　大腿骨計測値（mm）（Table 3. Comparison of measurements and indices of femora）

			京町 DB－274 1歳 近世 福岡県	京町 KB－123 1歳 近世 福岡県	京町 DB－244－2 1.5歳 近世 福岡県	森田家墓所 SK－9 近世 高知県	大河浜 2 1.5歳 近世 山口県	京町 KB－182 1.5歳～2歳 近世 福岡県	京町 KB－312 2歳 近世 福岡県
1.	骨体最大長	(右)	－	－	135	－	121	(117)	－
		(左)	－	－	－	－	121	(117)	－
2.	骨体中央横径	(右)	10	－	12	9	10	11	12
		(左)	－	11	－	9	10	12	12
3.	骨体中央矢状径	(右)	9	－	11	8	9	12	11
		(左)	－	9	－	8	9	11	11
4.	骨体中央周	(右)	31	－	37	30	32	37	39
		(左)	－	35	－	30	32	36	39
5.	骨体上横径	(右)	13	－	14	12	13	16	15
		(左)	－	14	－	12	13	15	15
6.	骨体上矢状径	(右)	11	－	12	10	10	13	13
		(左)	－	10	－	9	10	11	13
7.	骨体上端幅	(右)	27	－	32	－	28	28	34
		(左)	－	－	－	－	27	－	34
8.	骨体下端幅	(右)	－	－	40	32	32	－	－
		(左)	－	－	－	－	33	－	－
4/1	長厚示数	(右)	－	－	27.41	－	26.45	(31.62)	－
		(左)	－	－	－	－	26.45	(30.77)	－
3/2	骨体中央断面示数	(右)	90.00	81.82	91.67	88.89	90.00	109.09	91.67
		(左)	－	－	－	88.89	90.00	91.67	91.67
6/5	上骨体断面示数	(右)	84.62	71.43	85.71	83.33	76.92	81.25	86.67
		(左)	－	－	－	75.00	76.92	73.33	86.67

表４　脛骨計測値（mm）（Table 4. Comparison of measurements and indices of tibiae）

			京町 KB－123 1歳 近世 福岡県	京町 DB－302－2 1～1.5歳 近世 福岡県	京町 DB－244－2 1.5歳 近世 福岡県	森田家墓所 SK－9 近世 高知県	大河浜 2 1.5歳 近世 山口県	京町 KB－182 1.5歳～2.歳 近世 福岡県	京町 KB－312 2歳 近世 福岡県
1.	骨体最大長	(右)	－	－	－	102	100	－	－
		(左)	－	－	－	－	－	－	－
2.	骨体中央横径	(右)	－	－	11	8	8	10	11
		(左)	9	10	－	－	8	10	11
3.	骨体中央最大径	(右)	－	－	11	9	9	11	12
		(左)	10	10	－	－	9	11	12
4.	骨体中央周	(右)	－	－	34	28	28	33	37
		(左)	31	30	－	－	28	33	37
5.	骨体上端幅	(右)	－	－	27	24	－	24	－
		(左)	－	－	－	－	24	－	－
6.	骨体下端幅	(右)	－	－	－	16	15	－	－
		(左)	－	－	－	－	－	－	21
7.	骨体最小周	(右)	－	－	34	28	28	－	37
		(左)	31	－	－	－	－	－	37
7/1	長厚示数	(右)	－	－	－	27.45	28.00	－	－
		(左)	－	－	－	－	－	－	－
2/3	骨体中央断面示数	(右)	－	－	100.00	88.89	88.89	90.91	91.67
		(左)	90.00	100.00	－	－	88.89	90.91	91.67

要　約

高知県高知市三ノ丸前山にある森田久右衛門墓所の2003年（平成15年）３月におこなわれた試掘調査によって、１基の甕棺から比較的保存状態良好な人骨が１体検出された。頭蓋の保存状態は悪かったが、四肢骨や躯幹骨の保存状態は比較的良好で、計測や観察が可能で、年齢も推定することができた。人類学的所見は次のとおりである。

１．試掘調査で出土した人骨は１体のみで、これは墓坑（ＳＫ９）に納められていた甕棺（鉄釉陶器甕）から検出された。

２．本人骨には古銭４枚が副葬されており、また金箔状の細片も認められている。

３．本人骨は18世紀末から19世紀前葉頃に埋葬された人骨と推測されている。

４．ほぼ全身の骨が残っていたが、頭蓋は右側の一部しか残っていなかった。また、左側腸骨、左右の坐骨、恥骨および左側の脛骨と腓骨が遺存していなかった。

５．乳歯の萌出状態と四肢骨の大きさから、本被葬者は1.5歳前後の幼児と考えられる。

６．幼小児骨から成人になってからの特徴を推測することは困難であると一般的に考えられているが、弥生時代人骨の場合は、成人にみられる地域差が幼小児骨にすでに認められることから、ある程度の予想はできそうである。本例はかなり低顔で、眼窩がかなり大きい特徴が認められたが、このような特徴は子供に共通してみられる特徴なので、そのまま成人の特徴とするわけにはいかない。今後高知県の近世人骨の特徴がわかってくれば、本例との関連などについても言及ができるかもしれない。

〔謝辞〕

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた高知県埋蔵文化財センター、高知市教育委員会生涯学習課の皆様方に感謝致します。》

〔参考文献〕

１．Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttugart：429－597.

２．松下孝幸・他、1980a：熊本県川田京坪遺跡出土の近世人骨。車塚古墳・川田京坪遺跡・川田小筑遺跡・塩塚古墳（熊本県文化財調査報告46）付：１－17

３．松下孝幸・他、1980b：熊本県興善寺四郎丸遺跡出土の近世人骨。興善寺Ⅰ（熊本県文化財調査報告45）：61－68

４．松下孝幸、1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の人骨。松之尾遺跡（枕崎市松之尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（1））：215－228.

５．松下孝幸・他、1982：宮崎学園都市堂地東遺跡出土の近世人骨。宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報（Ⅲ）：47－55.

６．松下孝幸・他、1983：成岡・西ノ平遺跡出土の中世・近世人骨。成岡・西ノ平・上ノ原遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書28）：355－382.

７．松下孝幸・他、1985：長崎県松浦市楼階田遺跡出土の近世人骨。楼階田遺跡－松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－（長崎県文化財調査報告書第76集）：191－196.

８．松下孝幸・他、1992a：北九州市上清水遺跡出土の近世人骨。上清水遺跡Ⅴ区（奈良時代以降編）（北九州市埋蔵文化財調査報告書第117集）：416－441.

９．松下孝幸、他、1992b：東広島市古市遺跡出土の近世人骨。西城第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発

掘調査報告書Ⅰ（東広島市教育委員会文化財調査報告書第21集）：105－126.
10. 松下孝幸、1993：北九州市京町遺跡出土の近世人骨。京町遺跡（北九州市文化財調査報告書第59集）：177－248.
11. 松下孝幸・他、1994：山口県豊北町大河浜遺跡出土の人骨。大河浜遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告第165集）：11－21.
12. 松下孝幸、1995：北九州市宗玄寺跡出土の近世人骨。宗玄寺跡（北九州市埋蔵文化財調査報告書第172集）502－542.
13. 松下孝幸、1996a：北九州市普済院跡出土の近世人骨。折尾横穴群内普済院跡：95－121.
14. 松下孝幸、1996b：長崎県有川町頭ヶ島白浜遺跡出土の近世人骨。頭ヶ島白浜遺跡（有川町文化財調査報告書第１集）：67－87.
15. 松下孝幸、1997a：柳井市鳥越遺跡出土の近世人骨。鳥越遺跡発掘調査報告－和田山浄水場配水池建設に伴う発掘調査－：６－12.
16. 松下孝幸、1997b：福岡県犀川町古川平原古墳出土の古墳時代・近世人骨。古川平原古墳群（犀川町文化財調査報告書第５集）：82－98.
17. 松下孝幸、1997c：広島県三次市帰海寺谷遺跡出土の近世人骨。県営ほ場整備事業（川西東部・南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第157集）：131－135.
18. 松下孝幸、1998a：山口県豊北町堤迫・道祖ノ本遺跡出土の近世人骨。堤迫・道祖ノ本遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第15集）：37－59.
19. 松下孝幸、1998b：山口県阿知須町神正遺跡出土の近世人骨。赤迫遺跡B地区発掘調査報告（阿知須町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集）：116－122.
20. 松下孝幸、1998d：広島県庄原市一の谷第７号古墓出土の近世人骨。一の谷第６・７号古墳（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第170集）：47－50.
21. 松下孝幸、1999a：北九州市常盤橋西勢溜り跡出土の近世・近代人骨。常盤橋西勢溜り跡（北九州市埋蔵文化財調査報告書第229集）：付論1－12.
22. 松下孝幸、1999b：熊本県五木村頭地松本B遺跡出土の近世人骨。頭地松本Ｂ遺跡（2）（熊本県文化財調査報告第173集）：83－97.
23. 松下孝幸、1999c:熊本県球磨郡錦町蔵城遺跡出土の近世人骨。蔵城遺跡（熊本県文化財調査報告第172集）：96－123.
24. 松下孝幸、2000：愛媛県今治市矢田平山近世墓出土の近世人骨。阿方春岡遺跡・阿方牛ノ江遺跡・矢田八反坪遺跡・矢田大出口遺跡・矢田平山近世墓・矢田平山古墳・矢田平山遺跡（一般国道196号今治北道路埋蔵文化財調査報告書）（埋蔵文化財発掘調査報告書第88集）：271－318.
25. 松下孝幸、2002：北九州市京町遺跡第3地点出土の近世人骨。北九州市京町遺跡第３地点（北九州市生往寺境内発掘調査報告）：99－140.

表５　顔面頭蓋（mm、度）（Facial skeleton）

		森田家墓所 SK－9 1.5歳
40.	顔長	－
41.	側顔長	－
42.	下顔長	－
43.	上顔幅	－
45.	頬骨弓幅	－
46.	中顔幅	－
47.	顔高	－
48.	上顔高	41
47/45	顔示数(K)	－
48/45	上顔示数(K)	－
47/46	顔示数(V)	－
48/46	上顔示数(V)	－
40+45+47/3	顔面モズルス	－
50.	前眼窩間幅	－
44.	両眼窩幅	－
50/44	眼窩間示数	－
51.	眼窩幅(右)	－
	(左)	－
52.	眼窩高(右)	－
	(左)	－
52/51	眼窩示数(右)	－
	(左)	－
54.	鼻幅	17
55.	鼻高	32
54/55	鼻示数	53.13
55(1).	梨状口高	－
56.	鼻骨長	－
57.	鼻骨最小幅	－
57(1).	鼻骨最大幅	－
60.	上顎歯槽長	－
61.	上顎歯槽幅	－
62.	口蓋長	－
63.	口蓋幅	－
64.	口蓋高	－
61/60	上顎歯槽示数	－
63/62	口蓋示数	－
64/63	口蓋高示数	－
72.	全側面角	－
73.	鼻側面角	－
74.	歯槽側面角	－

表６　下顎骨（mm）（Mandibula）

		森田家墓所 SK－9 1.5歳
65.	下顎関節突起幅	－
65(1).	下顎筋突起幅	－
66.	下顎角幅	－
67.	前下顎幅	31
68.	下顎長	－
68(1).	下顎長	－
69.	オトガイ高	19
69(1).	下顎体高(右)	－
	(左)	－
69(2).	下顎体高(右)	－
	(左)	－
70.	枝高(右)	33
	(左)	－
70(1).	前枝高(右)	33
	(左)	－
70(2).	最小枝高(右)	26
	(左)	－
70(3).	下顎切痕高(右)	7
	(左)	－
71(1).	下顎切痕幅(右)	22
	(左)	－
71.	枝幅(右)	22
	(左)	－
71 a.	最小枝幅(右)	22
	(左)	－
79.	下顎枝角(右)	139
	(左)	－
66/65	下顎幅示数	－
68/65	幅長示数	－
68(1)/65	幅長示数	－
69(2)/69	下顎高示数(右)	
	(左)	－
71/70	下顎枝示数(右)	66.67
	(左)	－
71 a/70(2)	下顎枝示数(右)	84.62
	(左)	－
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	31.82
	(左)	－

表７　鎖骨（mm）（Clavicula）

		森田家墓所 SK－9 1.5歳
1.	最大長(右)	－
	(左)	59
2.	中央垂直径(右)	5
	(左)	5
3.	中央矢状径(右)	5
	(左)	5
4.	中央周(右)	16
	(左)	16
4/1	長厚示数(右)	－
	(左)	27.12
2/3	鎖骨断面示数(右)	100.00
	(左)	100.00

表８　上腕骨（mm）（Humerus）

		森田家墓所 SK－9 1.5歳
1.	骨体最大長(右)	101
	(左)	－
2.	骨体中央最大径(右)	9
	(左)	10
3.	骨体中央最小径(右)	8
	(左)	7
4.	骨体中央周(右)	29
	(左)	29
5.	骨体上端幅(右)	19
	(左)	－
6.	骨体下端幅(右)	－
	(左)	－
7.	骨体最小周(右)	28
	(左)	28
3/2	骨体中央断面示数(右)	88.89
	(左)	70.00
7/1	長厚示数(右)	27.72
	(左)	－

表９　橈骨（mm）（Radius）

		森田家墓所 SK－9 1.5歳
1.	骨体最大長(右)	－
	(左)	－
2.	骨体中央横径(右)	6
	(左)	6
3.	骨体中央矢状径(右)	5
	(左)	5
4.	骨体中央周(右)	18
	(左)	19
5.	骨体最小周(右)	18
	(左)	19
5/1	長厚示数(右)	－
	(左)	－
3/2	骨体中央断面示数(右)	83.33
	(左)	83.33

表10　尺骨（mm）（Ulna）

		森田家墓所 SK－9 1.5歳
1.	骨体最大長(右)	－
	(左)	(84)
2.	骨体中央最小径(右)	－
	(左)	5
3.	骨体中央最大径(右)	－
	(左)	7
4.	骨体中央周(右)	－
	(左)	19
5.	骨体最小周(右)	17
	(左)	16
5/1	長厚示数(右)	－
	(左)	(19.05)
2/3	骨体中央断面示数(右)	－
	(左)	71.43

表11　大腿骨（mm）（Femur）

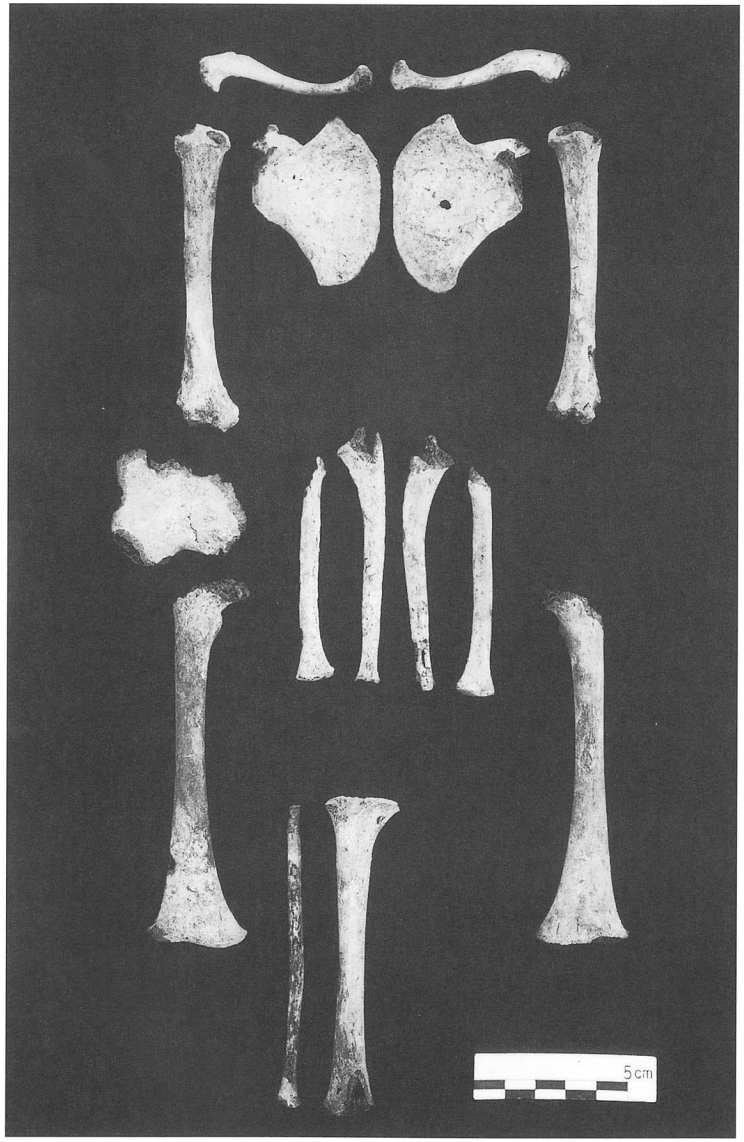
		森田家墓所 SK－9 1.5歳
1.	骨体最大長(右)	－
	(左)	－
2.	骨体中央横径(右)	9
	(左)	9
3.	骨体中央矢状径(右)	8
	(左)	8
4.	骨体中央周(右)	30
	(左)	30
5.	骨体上横径(右)	12
	(左)	12
6.	骨体上矢状径(右)	10
	(左)	9
7.	骨体上端幅(右)	－
	(左)	－
8.	骨体下端幅(右)	32
	(左)	－
4/1	長厚示数(右)	－
	(左)	－
3/2	骨体中央断面示数(右)	88.89
	(左)	88.89
6/5	上骨体断面示数(右)	83.33
	(左)	75.00

表12　脛骨（mm）（Tibia）

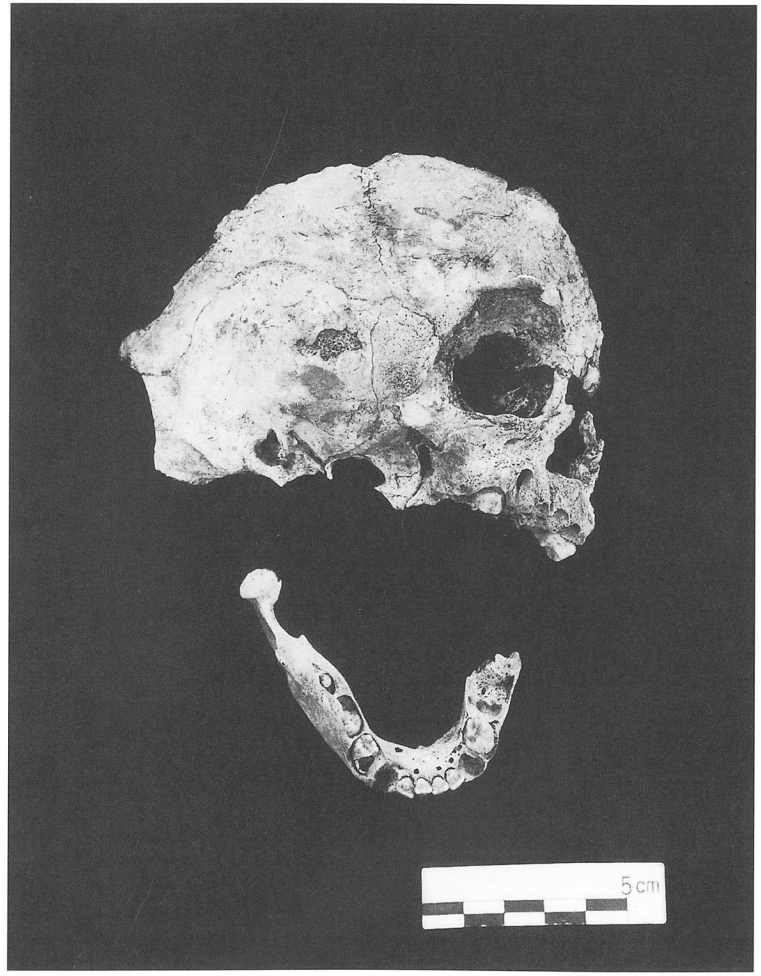
		森田家墓所 SK－9 1.5歳
1.	骨体最大長(右)	102
	(左)	－
2.	骨体中央横径(右)	8
	(左)	－
3.	骨体中央最大径(右)	9
	(左)	－
4.	骨体中央周(右)	28
	(左)	－
5.	骨体上端幅(右)	24
	(左)	－
6.	骨体下端幅(右)	16
	(左)	－
7.	骨体最小周(右)	28
	(左)	－
7/1	長厚示数(右)	27.45
	(左)	－
2/3	骨体中央断面示数(右)	88.89
	(左)	－

表13　腓骨（mm）（Fibula）

		森田家墓所 SK－9 1.5歳
1	骨体最大長(右)	98
	(左)	－
2	骨体中央最大径(右)	－
	(左)	－
3	骨体中央最小径(右)	－
	(左)	－
4	骨体中央周(右)	－
	(左)	－
5	骨体最小周(頚周)(右)	－
	(左)	－
5/1	長厚示数(右)	－
	(左)	－
3/2	中央断面示数(右)	－
	(左)	－



四肢骨（The limb bones）



頭蓋（Skull）

森田家墓所ＳＫ９人骨（1.5歳）
(The Morita SK9, 1.5 years old)

報告書抄録

ふりがな	もりたきゅうえもんぼしょおよびこだかさやまもりたけぼしょ
書名	森田久右衛門墓所 及び 小高坂山森田家墓所
副書名	墓地改葬に伴う確認調査報告書
巻次	
シリーズ名	高知市文化財調査報告書
シリーズ番号	26
編著者名	田上　浩・浜田恵子
編集機関	高知市教育委員会
所在地	〒780－8571　高知県高知市本町４丁目３番30号　TEL088－822－6394
発行年月日	西暦　2004年３月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もりたきゅうえもん 森田久右衛門 ぼしょ 墓所	〒780－0923 こうちけん 高知県 こうちし 高知市 さんのまる 三ノ丸	39201	なし	33° 33′ 43″	133° 31′ 8″	20030303 及び 20030312	約100㎡	墓地の 改葬

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
森田久右衛門 墓所	近世墓	近世	墓	骨壺 六道銭 煙管その他の副葬品	近世尾戸窯初代陶工 及びその一族の墓所 の形態の調査

高知市文化財調査報告書第26集

森田久右衛門墓所及び小高坂山森田家墓所

－墓地改葬に伴う埋蔵文化財確認調査報告書－

2004年３月

発　　行　　高知市教育委員会

〒780－0870　高知市本町４丁目３番30号

生涯学習課

電話　088－822－6394

印　　刷　　共和印刷株式会社